

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

家の後 I 遺跡 垣ノ内 遺跡

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

家の後 I 遺跡 垣ノ内遺跡

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所においては、『平成のおろち退治』といわれる斐伊川・神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調整及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の趣旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を行い、記録の保存につとめています。

尾原ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や本次町教育委員会、仁多町教育委員会の協力のもとに平成11年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成12～13年度に実施した「家の後Ⅰ遺跡」「垣ノ内遺跡」の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただきました島根県教育委員会並び関係者各位に謝意を表します。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長田中 靖

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受けて平成11年度から、尾原ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成12～13年度に実施した大原郡木次町の家の後I遺跡及び垣ノ内遺跡での発掘調査の記録であります。家の後I遺跡では、縄文時代中期～晩期にかけての多数の遺物が出土しました。また、垣ノ内遺跡では、斐伊川中上流域では有数の弥生時代の集落の姿が確かめられ、また、塙町式土器に垣間見える三次盆地を中心とした地域との交流について考える貴重な資料が得られました。本報告書がこの地域の歴史を解明していく糸口になり、郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力いただきました地元住民の方々、国土交通省中国地方整備局、木次町教育委員会、仁多町教育委員会、関係機関をはじめ関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢卓嗣

例　　言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成12年度と平成13年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県大原郡木次町大字北原字家の後293外

家の後 I 遺跡

島根県大原郡木次町大字北原字門720外

垣ノ内遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

(平成12年度) 垣ノ内遺跡現地調査

事務局 宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

内田 融（同総務課長）今岡 宏（同総務係長）

松木岩雄（同調査課長）

調査員 西尾克己（同第2係主幹）増田浩太（同主事）中野靖睦（同教諭兼文化財保護主事）

名越顕秀（同教諭兼主事）山根洋子（同教諭兼主事）中井浩二（同教諭兼主事）古川和明（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）

伊藤 実（広島県立歴史民俗資料館主任学芸員）

竹廣文明（鳥根大学汽水域研究センター助手）

田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）

中村唯史（鳥根県環境生活部景観自然課主事）

蓮岡法暉（鳥根県文化財保護審議会委員）

林 正久（鳥根大学教育学部教授）

(平成13年度) 家の後 I 遺跡、垣ノ内遺跡現地調査

事務局 宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

内山 融（同総務課長）今岡 宏（同総務係長）

川原和人（同調査第2課長）

調査員 西尾克己（同調査第2課主幹）増田浩太（同主事）中井浩二（同教諭兼文化財保護主事）曾田 徹（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）

伊藤 実（広島県立歴史民俗資料館主任学芸員）

杉原清一（鳥根県文化財保護指導委員）

竹廣文明（鳥根大学汽水域研究センター助教授）

田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）

中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム財団指導課）

蓮岡法暉（鳥根県文化財保護審議会委員）

林 正久（鳥根大学教育学部教授）

山田康弘（鳥根大学法文学部助教授）

(平成14年度)家の後I遺跡・垣ノ内遺跡報告書作成

事務局 宍道正年（鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

ト部吉博（同副所長）

内田 融（同総務課長）坂本淑子（同総務係長）

川原和人（同調査第2課長）

調査員 増田浩太（同主事）中井浩二（同教諭兼文化財保護主事）

4. 発掘作業（発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達等）については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、鳥根県教育委員会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

(平成12年度)

〔現場担当〕簗 俊治（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

(平成13年度)

〔現場担当〕簗 俊治（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

5. 現地調査及び資料整理に際しては、鳥根県教育庁文化財課、古代文化センター、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。また、調査指導をお願いした方々のほかに、多くの方から有益な御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

石田爲成（岡山県古代吉備文化財センター）、会下和宏（鳥根大学埋蔵文化財調査センター）、河瀬正利（広島大学大学院文学研究科教授）、坂本諭司（本次町教育委員会）、高尾昭浩（横山町教育委員会）、野津 旭（仁多町教育委員会）

6. 採図南北は、測量法による第3座標系X軸方向を指す。また、平面直角座標系XY座標は、日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。

7. 第2図は建設省国土地理院発行の1/50,000図を使用した。第3、21図は建設省国土地理院の測量成果をもとに、建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所とワールド航測コンサルタント株式会社が作成した1/1,000図を使用した。第4、22、24図は有限会社創互技研が設置した基準杭を用いて、国際航業株式会社が製作した測量図をもとに、増田が修正加筆した。

8. 図版2、17下、18は国際航業株式会社が撮影した。図版17上は平成6年3月の分布調査時に撮影、その他の写真は増田が撮影した。

9. 本書に掲載した実測図は各調査員の他に、川原、久保田一郎、勝部喜代志、横木尚文、勝部悠美、松崎恵美子、石田爲成、神庭明広、佐々木順子、陶山佳代、瀬川恭子、錦織美千恵、山根るみ子が作成し、添書は増田、佐々木、陶山、瀬川、錦織、山根が行った。

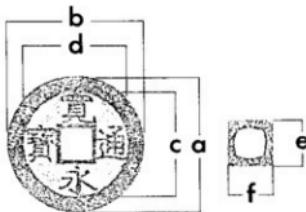
10. 遺物整理・報告書作成作業は各調査員の他に、小豆澤典子、石原幸代、小野千歳、門脇卓子、佐々木、陶山、瀬川、高橋啓子、土谷美鈴、錦織、西村ひろみ、野田清美、広野節子、山根、横田典子、渡部恵子が行った。

11. 本書の執筆は第4章を除き調査員が分担してを行い、その文責を次に記した。また第4章第1・2節については薫科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に御執筆いただいた。

12. 家の後 I 遺跡の土壌分析は、文化財コンサルタント株式会社（渡辺正巳氏）に委託し、第4章 第3節に成果を収録した。また、垣ノ内遺跡の炭化材¹⁴C 年代測定は、財團法人九州環境管理協会に委託した。
13. 本書の編集は各調査員の協力を得て増田が行った。
14. 本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　例

- 本文、挿図および写真図版の番号は一致する。
 - 剥片石器・礫石器の計測は、最終剥離面の向きが確実に分かることはそれに従い、不明なものは最大長を「長さ」、これに直交する最大幅を「幅」、両者が形成する面に対する最大厚を「厚さ」として行った。
 - 出土鉄の各計測位置は右図のとおりである。
 - 遺構名は整理段階で下表のように変更した。
 - 土器の時期決定は主として以下の文献を参考に増田が行った。弥生土器については、松本1992を用いたが、後期後葉（松本V-4以降）については赤澤1992を採用した。
- 小林達夫編 1988『縄文土器大観』1~4 小学館
 戸沢充則編 1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
 角田徳幸 1998『板屋Ⅱ遺跡』島根県教育委員会
 松本岩雄 1992『出雲・隠岐地域「弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編』木耳社
 赤澤秀則 1992『南講武田遺跡』溝戸地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 広島市教育委員会
 大谷見二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』島根考古学会誌11 島根考古学会
 横浦俊一 1995『出雲における須恵器の生産・流通と特質』『風上記の考古学3』同成社
 横浦俊一 2001『島根県東部(出雲)の切り離し技法と長勁牽頭部接合技法』『古代の土器研究—律令的土器様式の東・西6 穀忠器の製作技法とその転換—』古代の土器研究会
 広江耕史 1995『山陰の煮炊具 一出雲・石見-』『古代の土器研究—律令的土器様式の東・西4 煮炊具』古代の土器研究会
 広江耕史 1992『鳥取県における中世土器の変遷について』『松江考古』8
 橋本久和ほか 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 前山博ほか 1984『国内出土の肥前陶磁 古店津・伊万里の流通を探る』佐賀県立九州陶磁文化館



旧 名 称	新名称	旧 名 称	新名称	旧 名 称	新名称
S01-07	S01-07	P04-25, 07	S005	遺構⑩	SK13
S02-04	S02-04	P04-05, 06, 07	S006	遺構4	SK14
S03	S03	P14-16, 17	S007	AYD0, AYD0, AYD0, AYD0, AYD0, AYD0, AYD0	AYD1
S05-08	S05-08	P10-18, BP11, BP06,	S007	土器番号11	土器番号11
S06	S06	P10-18, BP09, BD01,	S007	上部番号12	上部番号12
S09	S09	AKDD2	縦面倒1	DYDD	DYD1
MZ11	S110	BKDD2	縦面倒2	土器番号9	土器番号9
MZ12	S111	遺構1	遺構1	上部番号10	上部番号10
T11M	S112	SK02	SK02	土器番号2-3	土器番号2-3
遺構11	S113	遺構5-6-7, 遺構8, 上部番号9	遺構8	AKDD	AKDD
S10(2001)	S114		S009	土器番号4-5-6	土器番号4-5-6
MZ7(2001)	S115	SK10	SK10	上部番号7	土器番号7
遺構6	S116	SD01(2001)	SK	DKDD	東部の鋸葉台, 隠岐
遺構2	壺9	SK01	SD04(2001)	東部の鋸葉台, 隠岐	東部の鋸葉台, 隠岐
遺構2, P25, 26, 30, 33, 34, 35, 36, 51	加工段1	SD02	SD05(2001)	東部の鋸葉台, 隠岐	東部の鋸葉台, 隠岐
P7, 8, 9, 11, C, 31, 4, 45, 47, 48, 51, 33, 35	SD09+02	遺構13(113)	加工段1	SD06(2001)	北の鋸葉台, 隠岐
P26, 27, 28, 29, 31, 212, 213	SD03	WC	遺構造塊1	SD07(2001)	東部の鋸葉台, 隠岐
DKDD, CRDD, CRD	加工段2	WC2, WC3	遺構造塊2-3	SK13	支那の鋸葉台, 隠岐
P01, 21, 26, 28	S003	壺9	SK12		

本文目次

第1章 調査経緯

第1節 発掘調査の経緯	増田 浩太	2
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	名越 顯秀	3

第2章 家の後I遺跡

増田 浩太

第1節 調査の経過と概要	10
第2節 家の後I遺跡の基本層位	11
第3節 出土遺構	12
第4節 出土遺物	12
第5節 まとめ	15

第3章 垣ノ内遺跡

増田 浩太

第1節 調査の経過と概要	44
第2節 垣ノ内遺跡の基本層位	46
第3節 調査結果	50
第4節 包含層出土遺物	123
第5節 まとめ	150

第4章 自然科学的分析

第1節 家の後I遺跡出土サスカイト製造物および 黒曜石製造物の原材产地分析	藁科 哲男	3
第2節 垣ノ内遺跡出土サスカイト製造物および 黒曜石製造物の原材产地分析	藁科 哲男	9
第3節 家の後I遺跡発掘調査に係る花粉、植物珪酸体分析	渡辺 正巳	31

挿図目次

第1図	遺跡の位置	2
第2図	周辺の遺跡 (S=1/50,000)	8
第3図	家の後 I 遺跡位置図 (S=1/1,000)	19
第4図	家の後 I 遺跡調査後測量図 (S=1/400)	20
第5図	家の後 I 遺跡土層図 (上図 S=1/80、下図 S=3/400)	21
第6図	家の後 I 遺跡遺物出土状況図 1 (S=1/400)	22
第7図	家の後 I 遺跡遺物出土状況図 2 (S=1/300)	23
第8図	家の後 I 遺跡遺物出土状況図 3 (S=1/300)	24
第9図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 1 (S=1/3)	25
第10図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 2 (S=1/3)	26
第11図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 3 (S=1/3)	27
第12図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 4 (S=1/3)	28
第13図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 5 (S=1/3)	29
第14図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 6 (S=1/3)	30
第15図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 7 (S=1/3)	31
第16図	家の後 I 遺跡出土縄文土器 8 (S=1/3)	32
第17図	家の後 I 遺跡出土土器 9・石器 1 (1は S=1/3、2~9は S=2/3)	33
第18図	家の後 I 遺跡出土石器 2 (S=1/3)	34
第19図	家の後 I 遺跡出土縄文時代以降の土器 (S=1/3)	35
第20図	家の後 I 遺跡出土土鏡 (S=1/1)	36
第21図	垣ノ内遺跡位置図 (S=1/2,000)	45
第22図	垣ノ内遺跡遺構配置図、調査区分図 (S=1/400)	47~48
第23図	垣ノ内遺跡土層図 (S=1/80)	49
第24図	垣ノ内遺跡調査後測量図 (S=1/400)	51~52
第25図	垣ノ内遺跡 SI01・07実測図 (S=1/60)	54
第26図	垣ノ内遺跡 SI01・07出土遺物 (1~16は S=1/4、17は S=2/3)	55
第27図	垣ノ内遺跡 SI02・04実測図 (S=1/40)	56
第28図	垣ノ内遺跡 SI02・04出土遺物 (1~9は S=1/4、10は S=1/2)	57
第29図	垣ノ内遺跡 SI02・04遺物出土状況図	57
第30図	垣ノ内遺跡 SI03実測図 (S=1/40)	58
第31図	垣ノ内遺跡 SI03出土遺物 (S=1/4)	58
第32図	垣ノ内遺跡 SI03遺物出土状況図	58
第33図	垣ノ内遺跡 SI05・08実測図 (S=1/60)	59
第34図	垣ノ内遺跡 SI05・08出土遺物 (S=1/4)	60
第35図	垣ノ内遺跡 SI05・08遺物出土状況図	60
第36図	垣ノ内遺跡 SI06実測図 (S=1/40)	61
第37図	垣ノ内遺跡 SI06出土遺物 (S=1/4)	62
第38図	垣ノ内遺跡 SI06遺物出土状況図	62
第39図	垣ノ内遺跡 SI09実測図 (S=1/40)	63
第40図	垣ノ内遺跡 SI09出土遺物 (S=1/4)	63
第41図	垣ノ内遺跡 SI10実測図 (S=1/40)	64
第42図	垣ノ内遺跡 SI11実測図 (S=1/40)	64

第43図	垣ノ内遺跡 SI12実測図 (S=1/60)	65
第44図	垣ノ内遺跡 SI13 (遺構11) 実測図 (S=1/40)	66
第45図	垣ノ内遺跡 SI13 (遺構11) 出土遺物 (1～7は S=1/4、8・9は S=1/2)	67
第46図	垣ノ内遺跡 SI13 (遺構11) 出土炭化材、遺物出土状況図 (1は S=1/3)	68
第47図	垣ノ内遺跡 SI14実測図 (S=1/40)	70
第48図	垣ノ内遺跡 SI15実測図 (S=1/40)	70
第49図	垣ノ内遺跡 SI16 (遺構9) 実測図 (S=1/40)	70
第50図	垣ノ内遺跡 SI16 (遺構9) 出土遺物 (S=1/4)	70
第51図	垣ノ内遺跡遺構2実測図 (S=1/80)	72
第52図	垣ノ内遺跡遺構2遺物出土状況図	73
第53図	垣ノ内遺跡遺構2出土遺物1 (S=1/4)	74
第54図	垣ノ内遺跡遺構2出土遺物2 (1～24は S=1/4、25は S=1/2)	75
第55図	垣ノ内遺跡加工段1実測図 (S=1/40)	76
第56図	垣ノ内遺跡 SB01・02実測図 (S=1/40)	77
第57図	垣ノ内遺跡 SB03実測図 (S=1/80)	78
第58図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 実測図 (S=1/60)	79
第59図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 遺物出土状況図中心部	80
第60図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 遺物出土状況図	81
第61図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 出土遺物 (S=1/4)	82
第62図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 出土遺物2 (S=1/4)	83
第63図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 出土遺物3 (1は S=1/6、2は S=1/2)	84
第64図	垣ノ内遺跡加工段2 (BKDD、CKDD) 出土遺物4 (1～9は S=1/4、10は S=1/2)	85
第65図	垣ノ内遺跡 SB05・06・07実測図 (S=1/80)	86
第66図	垣ノ内遺跡加工段3 (CKDD 2) 実測図 (S=1/80)	87
第67図	垣ノ内遺跡加工段3 (CKDD 2) 出土遺物 (S=1/4)	88
第68図	垣ノ内遺跡加工段3 (CKDD 2) 遺物出土状況図	88
第69図	垣ノ内遺跡硬化面1 (AKDD 2) 実測図 (S=1/40)	89
第70図	垣ノ内遺跡硬化面1 (AKDD 2) 出土遺物 (1は S=1/2、2～9は S=1/4)	89
第71図	垣ノ内遺跡硬化面1 (AKDD 2) 遺物出土状況図	90
第72図	垣ノ内遺跡硬化面2 (BKDD 2) 実測図 (S=1/40)	91
第73図	垣ノ内遺跡硬化面2 (BKDD 2) 出土遺物 (1～11は S=1/4、12・13は S=1/2)	92
第74図	垣ノ内遺跡硬化面2 (BKDD 2) 遺物出土状況図	92
第75図	垣ノ内遺跡遺構1実測図 (S=1/40)	93
第76図	垣ノ内遺跡遺構1出土遺物 (S=1/4)	93
第77図	垣ノ内遺跡遺構1遺物出土状況図	94
第78図	垣ノ内遺跡 SK02実測図 (S=1/40)	94
第79図	垣ノ内遺跡 SK02出土遺物 (S=1/4)	95
第80図	垣ノ内遺跡 SK02遺物出土状況図	95
第81図	垣ノ内遺跡遺構8実測図 (S=1/40)	96
第82図	垣ノ内遺跡遺構8出土遺物 (S=1/4)	96
第83図	垣ノ内遺跡遺構8遺物出土状況図	96
第84図	垣ノ内遺跡 SB09実測図 (S=1/60)	97
第85図	垣ノ内遺跡 SK10実測図 (S=1/20)	98
第86図	垣ノ内遺跡 SK20実測図 (S=1/40)	98

第87図	垣ノ内遺跡 SK01実測図 (S=1/40)	98
第88図	垣ノ内遺跡 SD01実測図 (S=1/40)	99
第89図	垣ノ内遺跡 SD02実測図 (S=1/40)	99
第90図	垣ノ内遺跡加工段 4 実測図 (S=1/40)	99
第91図	垣ノ内遺跡埋樁遺構 1 実測図 (S=1/40)	101
第92図	垣ノ内遺跡埋樁遺構 2・3 実測図 (S=1/40)	101
第93図	垣ノ内遺跡 SK12・13・14実測図 (S=1/40)	101
第94図	垣ノ内遺跡土器溜り位置図 (S=1/600)	102
第95図	垣ノ内遺跡土器溜り AYD1 (AYDD) 遺物出土状況図	104
第96図	垣ノ内遺跡土器溜り AYD1 (AYDD) 出土遺物 1 (S=1/4)	105
第97図	垣ノ内遺跡土器溜り AYD1 (AYDD) 出土遺物 2 (S=1/4)	106
第98図	垣ノ内遺跡土器溜り 11 遺物出土状況図	106
第99図	垣ノ内遺跡土器溜り 11 出土遺物 (S=1/4)	107
第100図	垣ノ内遺跡土器溜り 12 遺物出土状況図	108
第101図	垣ノ内遺跡土器溜り 12 出土遺物 (S=1/4)	109
第102図	垣ノ内遺跡 DYD1 (DYDD) 実測図 (S=1/20)	110
第103図	垣ノ内遺跡 DYD1 (DYDD) 遺物出土状況図	110
第104図	垣ノ内遺跡 DYD1 (DYDD) 出土遺物 1 (S=1/4)	111
第105図	垣ノ内遺跡 DYD1 (DYDD) 出土遺物 2 (S=1/4)	112
第106図	垣ノ内遺跡土器溜り 9 遺物出土状況図	112
第107図	垣ノ内遺跡土器溜り 10 遺物出土状況図	112
第108図	垣ノ内遺跡土器溜り 9・10 出土遺物 (S=1/4)	113
第109図	垣ノ内遺跡土器溜り 1・2・3 実測図 (S=1/30)	114
第110図	垣ノ内遺跡土器溜り 3 遺物出土状況図	114
第111図	垣ノ内遺跡土器溜り 1・2・3 遺物出土状況図	115
第112図	垣ノ内遺跡土器溜り 1・2・3 出土遺物 1 (S=1/4)	116
第113図	垣ノ内遺跡土器溜り 1・2・3 出土遺物 2 (S=1/4)	117
第114図	垣ノ内遺跡 AKDD 実測図 (S=1/40)	118
第115図	垣ノ内遺跡 AKDD 遺物出土状況図	118
第116図	垣ノ内遺跡 AKDD 出土遺物 (S=1/4)	119
第117図	垣ノ内遺跡土器溜り 4・5・6 遺物出土状況図	120
第118図	垣ノ内遺跡土器溜り 7 遺物出土状況図	120
第119図	垣ノ内遺跡土器溜り 4・5・6・7 出土遺物 (S=1/4)	121
第120図	垣ノ内遺跡出土縄文土器 1 (S=1/3)	125
第121図	垣ノ内遺跡出土縄文土器 2 (S=1/3)	126
第122図	垣ノ内遺跡出土縄文土器 3 (S=1/3)	127
第123図	垣ノ内遺跡出土縄文土器 4 (S=1/3)	128
第124図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）1 (S=1/4)	130
第125図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）2 (S=1/4)	131
第126図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）3	
	(1~19・22は S=1/4、20~21は S=1/3、23は S=2/3)	132
第127図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（塩町系）4 (S=1/4)	133
第128図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）5 (S=1/4)	134
第129図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）6 (S=1/4)	135
第130図	垣ノ内遺跡出土弥生土器（後期～古墳初）7 (S=1/4)	136

第131図	垣ノ内遺跡出土須恵器 1 (S=1/4)	139
第132図	垣ノ内遺跡出土須恵器 2 (S=1/4)	140
第133図	垣ノ内遺跡出土須恵器 3 (S=1/4)	141
第134図	垣ノ内遺跡出土土師器 1 (S=1/4)	142
第135図	垣ノ内遺跡出土土師器 2 (S=1/4)	143
第136図	垣ノ内遺跡出土土師器 3・白磁・青花等 (S=1/3)	144
第137図	垣ノ内遺跡出土手づくね・製塙土器・丹塗土器 (S=1/4)	146
第138図	垣ノ内遺跡出土石器 1・鉄器 (S=1/3)	148
第139図	垣ノ内遺跡出土上石器 2 (1~9は S=2/3、10~16は S=1/2)	149
第140図	垣ノ内遺跡出土銭 (S=1/1)	150

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧表	7
表2	家の後I遺跡出土上器観察表	36~39
表3	家の後I遺跡出土打製・磨製石製品観察表	39
表4	家の後I遺跡出土剥片石器・二次加工剥片・剥片観察表	39~40
表5	家の後I遺跡出土砾石器観察表	40
表6	家の後I遺跡出土銭観察状	40
表7	家の後I遺跡出土石錘観察表	41
表8	家の後I遺跡出土弥生時代以降の遺物一覧表	42
表9	垣ノ内遺跡出土堅穴住居計測表	157~159
表10	垣ノ内遺跡出土掘建柱建物計測表	160~161
表11-1	垣ノ内遺跡出土遺物総覧 1	162
表11-2	垣ノ内遺跡出土遺物総覧 2	163
表12	垣ノ内遺跡遺構別出土遺物数量表	164~165
表13	垣ノ内遺跡出土土器観察表	166~180
表14	垣ノ内遺跡遺構出土石器・鉄器観察表	181
表15	垣ノ内遺跡出土剥片石器観察表	181
表16	垣ノ内遺跡出土二次加工剥片・剥片観察表	182~183
表17	垣ノ内遺跡出土石斧類観察表	183
表18	垣ノ内遺跡出土砥石観察表	183
表19	垣ノ内遺跡出土石錘観察表	184
表20	垣ノ内遺跡出土銭観察表	185
表21	垣ノ内遺跡出土砾石器観察表	186
表22	垣ノ内遺跡出土金属製品観察表	186

グラフ目次

グラフ1	家の後I遺跡出土上石錘形態別割合	41
グラフ2	家の後I遺跡出土石錘重量別分布	42

グラフ3	垣ノ内遺跡出土石錘形態別割合	185
グラフ4	垣ノ内遺跡出土石錘重量別分布	185

写真図版目次

- 図版1 上：家の後Ⅰ遺跡調査前風景（北東から） 下：調査風景
- 図版2 上：調査後空撮（南西から） 下：調査後空撮（北西から）
- 図版3 上：調査後近景（東から） 下：三瓶太平山降下火山灰検出状況
- 図版4 上：Ⅱ区セクション 下：縄文土器出土状況
- 図版5 上：C層縄文土器出土状況（東から） 下：粗製深鉢出土状況
- 図版6 上：包含層出土縄文土器1 下：包含層出土縄文土器2
- 図版7 上：包含層出土縄文土器3 下：包含層出土縄文土器4
- 図版8 包含層出土縄文土器5
- 図版9 上：包含層出土縄文土器6 下：包含層出土縄文土器7
- 図版10 上：包含層出土縄文土器8 中：包含層出土縄文土器9 下：包含層出土縄文土器10
- 図版11 上：包含層出土縄文土器11 中：包含層出土縄文土器12 下：包含層出土縄文土器13
- 図版12 上：包含層出土縄文土器14 中：包含層出土縄文土器15 下：包含層出土縄文土器16
- 図版13 上：包含層出土縄文土器17 中：包含層出土縄文土器18 下：包含層出土縄文土器19
- 図版14 包含層出土縄文土器20
- 図版15 上：包含層出土石器1 中：包含層出土石器2 下：包含層出土石器3
- 図版16 上：包含層出土縄文土器・弥生土器・須恵器 下：包含層出土須恵器・土師質土器・煙管
- 図版17 上：調査前の垣ノ内遺跡（南から） 平成6年3月 下：調査前空撮（南から） 平成11年12月
- 図版18 上：平成12年度調査後全景（北西から） 下：平成13年度調査後全景（南から）
- 図版19 上：SI01・07完掘状況（南から） 下：SI01・07完掘状況（北から）
- 図版20 上：SI01・07出土遺物 下：SI01・07出土遺物
- 図版21 上：SI02・04半裁状況（北から） 下：SI02・04全景（北から）
- 図版22 上：SI02・04完掘状況（南から） 下：SI02・04出土遺物
- 図版23 上：SI03完掘状況（南から） 下：SI02・04、SI03出土遺物
- 図版24 上：SI05・08半裁状況（南から） 下：SI05・08完掘状況（南から）
- 図版25 上：SI05・08出土遺物 下：SI06完掘状況（南から）
- 図版26 上：SI06セクション遺物出土状況（東から） 下：SI06出土遺物
- 図版27 上：SI09完掘状況（北から） 下：SI06、SI09出土遺物
- 図版28 上：SI10・11・12完掘状況（南から） 下：SI10・11・12完掘状況（北から）
- 図版29 上：SI10・11完掘状況（北から） 下：SI11近景
- 図版30 上：SI13遺物出土状況（南東から） 下：SI13遺物出土状況（東から）
- 図版31 上：SI13東側炭化材集中部 下：SI13西側炭化材集中部
- 図版32 上：SI13出土遺物 下：SI13出土鉄斧・炭化材
- 図版33 上：SI14出土状況（南西から） 下：SI15完掘状況（北から）
- 図版34 上：SI16出土状況・完掘状況 下：SI16出土遺物
- 図版35 上：遺構2西側遺物出土状況（南から） 下：遺構2西側遺物出土状況近景
- 図版36 上：遺構2西側遺物出土状況（南から） 下：遺構2加工段I完掘状況（西から）
- 図版37 上：遺構2出土遺物 下：遺構2出土遺物

- 図版38 上：遺構2出土遺物 下：遺構2出土遺物
- 図版39 遺構2出土遺物
- 図版40 上：SB01・02完掘状況（南から） 下：SB01・02完掘状況（東から）
- 図版41 上：SB03完掘状況（南から） 下：I・II区作業風景
- 図版42 上：加工段2遺物出土状況（東から） 下：加工段2遺物出土状況近景
- 図版43 上：加工段2竈・甕出土状況（南から） 下：加工段2竈・甕出土状況（西から）
- 図版44 上：加工段2西側遺物出土状況（南から） 下：加工段2西側遺物出土状況近景
- 図版45 上：加工段2完掘状況（西から） 下：加工段2セクション（東から）
- 図版46 加工段2出土遺物
- 図版47 加工段2出土遺物
- 図版48 加工段2出土遺物
- 図版49 加工段2出土遺物
- 図版50 加工段2出土遺物
- 図版51 上：SB05・06検出状況（東から） 下：SB05・06・07完掘状況（西から）
- 図版52 上：加工段3遺物出土状況（北から） 下：加工段3近景
- 図版53 加工段3出土遺物
- 図版54 上：硬化面1検出状況（東から） 下：硬化面1遺物出土状況（西から）
- 図版55 硬化面1出土遺物
- 図版56 上：硬化面2出土状況・セクション（東から） 下：硬化面2遺物出土状況
- 図版57 硬化面2出土遺物
- 図版58 硬化面2・遺構1出土遺物
- 図版59 上：遺構1完掘状況（西から） 下：SK02遺物出土状況（北から）
- 図版60 上：SK02出土遺物 下：SK02出土遺物
- 図版61 上：SK02出土遺物 下：遺構8遺物出土状況
- 図版62 上：遺構8出土遺物 下：SB09完掘状況（西から）
- 図版63 上：埋桶遺構1（南から） 下：埋桶遺構1半蔵状況（南から）
- 図版64 上：埋桶遺構3（南から） 下：埋桶遺構3近景
- 図版65 上：SK12完掘状況（西から） 下：SK12完掘状況（南から）
- 図版66 上：SK13完掘状況（東から） 下：SK14完掘状況（南から）
- 図版67 上：AYD1遺物出土状況（西から） 下：AYD1遺物出土状況（東から）
- 図版68 上：AYD1高環・甕出土状況 下：AYD1高環出土状況
- 図版69 AYD1遺物出土状況近景
- 図版70 上：AYD1出土遺物 下：AYD1出土遺物
- 図版71 AYD1出土遺物
- 図版72 AYD1出土遺物
- 図版73 上：土器溜り11遺物出土状況（西から） 下：土器溜り11出土遺物
- 図版74 上：土器溜り11出土遺物 下：土器溜り11出土遺物
- 図版75 上：土器溜り12遺物出土状況（西から） 下：土器溜り12遺物出土状況近景
- 図版76 上：土器溜り12遺物出土状況近景 下：土器溜り12出土遺物
- 図版77 土器溜り12出土遺物
- 図版78 上：DYD1出土状況（西から） 下：DYD1出土遺物
- 図版79 DYD1出土遺物
- 図版80 上：DYD1出土遺物 下：土器溜り9・10出土遺物
- 図版81 上：土器溜り9・10出土遺物 下：土器溜り9・10出土遺物
- 図版82 上：土器溜り10遺物出土状況（東から） 下：土器溜り1遺物出土状況（南から）

- 図版83 上：土器滴り2遺物出土状況（南から） 下：土器滴り3遺物出土状況（東から）
図版84 上：土器滴り3遺物出土状況（西から） 下：土器滴り3遺物出土状況近景
図版85 土器滴り1・2・3出土遺物
図版86 土器滴り1・2・3出土遺物
図版87 上：土器滴り1・2・3出土遺物 下：AKDD 遺物出土状況（西から）
図版88 AKDD 出土遺物
図版89 上：AKDD 出土遺物 下：土器滴り5出土遺物状況（西から）
図版90 上：土器滴り6遺物出土状況（西から） 下：土器滴り4・5・6・7出土遺物
図版91 土器滴り4・5・6・7出土遺物
図版92 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土縄文土器
図版93 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土縄文土器
図版94 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土縄文土器
図版95 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土縄文土器
図版96 包含層出土縄文土器
図版97 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土縄文土器
図版98 上：包含層出土縄文土器 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版99 包含層出土弥生土器（中期）
図版100 上：包含層出土弥生土器（中期） 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版101 上：包含層出土弥生土器（中期） 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版102 上：包含層出土弥生土器（中期） 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版103 包含層出土弥生土器（中期・塩町系）
図版104 上：包含層出土弥生土器（塩町系） 下：包含層出土弥生土器（塩町系）
図版105 包含層出土弥生土器（塩町系）
図版106 上：包含層出土弥生土器（中期） 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版107 上：包含層出土弥生土器（中期・高坏） 下：包含層出土弥生土器（中期・高坏）出土状況
図版108 上：包含層出土弥生土器（中期） 下：包含層出土弥生土器（中期）
図版109 包含層出土弥生土器（中期・後期）
図版110 上：包含層出土弥生土器（後期） 下：包含層出土弥生土器（後期）
図版111 上：包含層出土弥生土器（後期） 下：包含層出土弥生土器（後期）
図版112 包含層出土須恵器
図版113 包含層出土須恵器
図版114 上：包含層出土須恵器 下：包含層須恵器出土状況
図版115 上：包含層出土須恵器 下：包含層出土須恵器
図版116 包含層出土須恵器
図版117 上：包含層出土須恵器 下：包含層出土須恵器
図版118 包含層出土須恵器
図版119 包含層出土土師器
図版120 上：包含層出土土師器 下：包含層出土土師器
図版121 上：包含層出土土師器 下：包含層出土土師器
図版122 上：包含層出土土師器 下：包含層出土土師器・手づくね土器
図版123 上：包含層出土手づくね土器・丹塗り土器 下：包含層出土丹塗り土器・土錐
図版124 包含層出土手づくね土器・丹塗り土器
図版125 上：包含層出土石器 下：包含層出土石器
図版126 上：包含層出土鉄器 下：包含層出土石器
図版127 上：包含層出土陶磁器 下：包含層出土石器

第4章 第1・2節 図表目次

図1 黒曜石原産地	15
図2 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地	16
表1-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	17
表1-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	18
表1-3 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	19
表1-4 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	20
表1-5 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	21
表1-6 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	22
表2-1 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	23
表2-2 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	24
表2-3 原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値標準偏差値	25
表2-4 原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値標準偏差値	26
表3 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	27
表4 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	27
表5 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	27
表6-1A 家の後I遺跡出土安山岩製石器の元素比分析結果	28
表6-2A 家の後I遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果	28
表6-1B 垣内遺跡出土安山岩製石器の元素比分析結果	28
表6-2B 垣内遺跡出土黒曜石製他石器の元素比分析結果	28
表7A 家の後I遺跡出土の安山岩製、黒曜石製石器の原産地推定結果	29
表7B 垣内遺跡出土の安山岩製、黒曜石製石器の原産地推定結果	29

第4章 第3節 図表目次

図1 試料採取地点	31
図2 試料採取層準	31
図3 花粉ダイアグラム	32
図4 植物珪酸体ダイアグラム	33
表1 花粉化石組成表	32
表2 植物珪酸体化石組成表	33
表3 植物概査結果一覧表	34

調查経緯

第1章 調査経緯

第1節 発掘調査の経緯

斐伊川の治水事業は出雲地域長年の課題である。斐伊川が現在のように宍道湖に流れ込むようになって以来、この典型的な天井川に対して様々な治水対策が講じられてきた。しかし昭和47年の大洪水では、下流の出雲平野や大橋川流域が甚大な被害を受けるおよび、抜本的な対策に迫られることとなった。

昭和51年、「斐伊川水系工事実施基本計画改定案」が公示され、いわゆる「治水3点セット」（①斐伊川、神戸川上流におけるダム

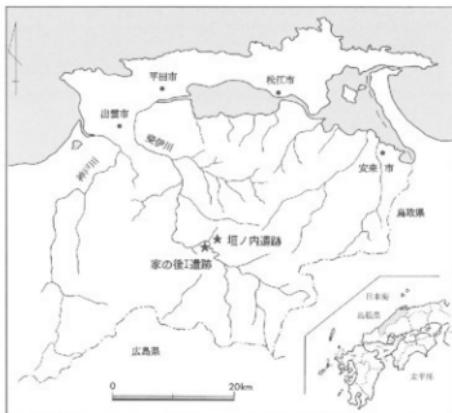
の建設、②中流の斐伊川放水路建設と斐伊川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖湖岸の整備）を基本とした治水対策が具体化した。尾原ダムは、この計画に基づき斐伊川上流の大原郡木次町・仁多郡仁多町に計画された多目的ダムである。尾原ダム建設事業は、平成3年10月の「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」調印を経て着手され、平成5年12月には水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。翌平成6年2月には「尾原ダム建設に関する基本計画」が公示され、現在建設が進められている。

平成3年6月、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所 以下同じ）から島根県教育委員会に対し、埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受け、島根県教育委員会では、平成5年3月と平成6年3月の2回にわたり分布調査を実施した。木次町教育委員会と仁多町教育委員会の協力を得て行われたこの調査で、合計81か所の遺跡及び要確認調査地を設定した。

平成10年12月、遺跡の範囲確認調査を平成11年度から実施することが決定した。また、島根県教育委員会、木次町教育委員会、仁多町教育委員会の三者で協議を行い、①確認のため再度分布調査を行うこと、②当初は基本的にダム本体部分を県が調査し、残土処理場や付替え道路等の付帯設備部分は両町が対応すること、③今後の調査分担は調査状況や各機関の調査体制に応じて調整すること、の3点を確認した。平成11年3月に行われた2度目の分布調査では、新たに32か所の遺跡及び要確認調査地を設定した。これにより、遺跡および要確認調査地は合計113か所となった。

平成11年度、島根県教育委員会は29か所の範囲確認調査を実施し、本報告書収録の家の後I遺跡、垣ノ内遺跡を含む11か所について全面発掘調査が必要と判断した。

平成12年度には、垣ノ内遺跡を含む2か所の全面発掘調査を行うとともに、20か所の確認調査を



第1図 遺跡の位置

実施した。垣ノ内遺跡では弥生時代中期から後期末の竪穴住居を中心とする遺構、遺物が多数出土した。また、遺跡が調査区の北側にさらに続いていることが明らかとなつたため、翌平成13年度に追加調査を行つた。この年の9月には、仁多町前布施において工事中に遺跡（寺仏山横穴墓）が発見され、仁多町教育委員会により急速発掘調査が行われた。こうした工事中の発見が統一すれば、建設工事や発掘調査の進行に支障が出るとの観点から、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所より工事箇所の再踏査が提案された。また一方で、数年間の調査成果からこの地域の遺跡の立地傾向が徐々に明らかになりつつあった。そこで平成13年3月に再々度の分布調査を実施した。この調査で新たに2か所の要確認調査地が登録された。

平成13年度には、家の後I遺跡、垣ノ内遺跡追加調査分を含む6遺跡の全面発掘調査と3か所の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査では1か所が全面発掘調査と決まった。家の後I遺跡では、縄文時代の斐伊川河岸を検出し、それに伴つて縄文時代後期から晩期の土器などが出土した。9月から行った垣ノ内遺跡の追加調査では、弥生時代中期後半の焼失住居をはじめとする竪穴住居、加工段などを確認した。

本書は、平成13年度調査の家の後I遺跡、平成12・13年度調査の垣ノ内遺跡の報告である。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

尾原ダムは、大原郡木次町平田にダムサイトを築いて斐伊川の本流を堰き止めるものであり、貯水池の範囲は町境を越えて仁多郡仁多町三成に及ぶ。尾原ダムの建設事業はしばしば、「平成のオロチ退治」と称せられるが、付近は、『古事記』や『日本書紀』に記述のある、スサノオ（須佐之男命・素戔鳴尊）による八岐大蛇退治伝説の故地である。

出雲地方南部を雲南と称するが、大原・仁多両郡は、その雲南地方に属する。『出雲国風上記』(以下『風土記』と略す)によれば、大原郡は神原・屋代・屋裏・佐世・阿用・海潮・来次・斐伊の8郷で構成され、『和名抄』はその8郷に大原郷を加える。一方仁多郡は、『風土記』は三処・布勢・三沢（三津とする説も有力）・横田の4郷を載せ、『和名抄』はその4郷に漆仁・阿位の2郷を加える。漆仁・阿位の2郷は、三沢郷から分立したものと推定されている。なお、ダムサイトの建設予定地である木次町平田は、昭和30年に木次町・日登村と合併する以前は仁多郡温泉村に属しており、旧温泉村の村域は『和名抄』の漆仁郷とほぼ等しい。従って、ダム湖に水没したり、道路などダム関連工事が行われる範囲は、『風土記』でいう仁多郡の4郷のうち、横田郷を除いた各郷に及ぶことになり、この事業がこの地域に与える影響は少からぬものになるであろう。

仁多郡の郡名は、大國主命（大穴持命）が「此の国は大きくも非ず小さくも非ず。…是は尔多志枳小国在り」と述べたことに由来すると、『風土記』は伝えている。小ぢんまりとして水田耕作に適した肥沃な土地、と言った意味である。現況は過疎化の進んだ典型的な中山間地になっているが、以下では周辺の遺跡の紹介等をしつつ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代

この時代の遺跡は、木次・仁多両町内およびその周辺地域では、現在のところ、確認されていない。鳥取県全体をみても旧石器時代の資料は多くはないが、宍道湖・中海の周辺地域では、松江市のド黒山遺跡をはじめ、この時代に遡ることのできる遺跡が見つかりはじめている。雲南地域においても、今後の開発の進行等をきっかけに、旧石器時代の遺跡が発見される可能性もある。

縄文時代

斐伊川中・上流域は、神戸川中・上流域と同様、縄文時代の遺跡の分布が密な地域である。

近年この地域で縄文時代の遺跡として注目されたのは、木次町の平田遺跡である。平田遺跡は、斐伊川とその支流の阿井川の合流地点に位置する。この遺跡では、縄文後期から晩期初頭の土器が大量に出土したが、岡山県の福田貝塚出土品と酷似した浅鉢や、鍾崎式土器など、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものが見られる。また大量の石鎌や石斧が剥片をともなって出土しており、この遺跡は石器の製作工房跡であったと考えられる。さらに、土器の出土状況等から、埋葬が行われた可能性が指摘され、土墳も8基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。埋葬が行われた遺跡として、周辺には、県指定史跡である三刀屋町の官山遺跡、木次町の家の後II遺跡、倒立埋葬の仁多町の暮地遺跡が知られている。尾原ダム建設に伴う調査では、暮地遺跡から縄文時代後期の土偶が3体出土した。1遺跡から3体の土偶が出土するのは中国で岡山県津雲貝塚、同じく福田貝塚に次いで3例目である。仁多町の林原遺跡からは、範囲確認調査の結果、縄文後期を中心とする土器や磨製石器などの石器が出土したほか、縄文後期前葉から中葉のものと思われる土偶が1点確認されており、本調査の成果が期待されるところである。

平田遺跡から阿井川を通り、町境を越えて仁多町に入ると、やがて下鴨倉遺跡にいたる。阿井川の河岸段丘上に存在するこの遺跡は、かつて「縄文のデパート」と評されたように、出土した土器は、縄文前期から晩期にいたる山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅するばかりか、北部九州の影響も色濃い、貴重な資料となるものである。

この地域で最も古いものに分類できる遺跡は、斐伊川上流の横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡や下大仙子遺跡であり、これらは縄文時代早期に遡ることができるものである。平成12年度の調査で、木次町の川平I遺跡からも縄文早期の押型文土器が出土した。川平I遺跡では、早期から晩期に至る主要な土器がほぼ途切れることなく出土している。

弥生時代

以前から、木次町では早稻田遺跡、本郷谷遺跡、仁多町では鹿谷遺跡、横田町では国竹遺跡、代山遺跡、横田高校グランド遺跡などが弥生時代の遺跡として知られてきた。しかし、縄文時代の遺跡に比べると数そのものが少なく、遺構が確認されたのも国竹遺跡のみであり、この地域では、わずかに横田町の横田八幡宮に伝えられた銅劍（中細形銅劍C）、木次町日登から出土したと言われる銅鐸（外縁付鉢I式）が注目される程度であった。

しかし近年になって、この地域の弥生時代の様相を知る上で、貴重な資料を提供する遺跡が見つかった。縄文時代の頃でも触れた、木次町の平田遺跡である。この遺跡からは、円形に近い多角形を呈した径8.8m～9.0mの堅穴建物跡1棟が確認された。建物内からは鍛冶炉が4基検出され、鉄鋤やその未製品、板状や棒状の鉄片、鏃、砥石などが出土した。この建物は鉄素材を鍛錬し、鏃を用いて鉄器を製作した工房として使われたものと考えられる。これとはほぼ同様の性格をもった建物群が、八束郡宍道町の上野II遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡は、上野II遺跡のものに比べてやや新しく、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

尾原ダム建設に伴う発掘調査では、木次町の垣ノ内遺跡から、弥生時代中期後半から後期末にかけての堅穴住居が16棟、掘立柱建物が数棟発見された。斐伊川中・上流域では、弥生時代の集落跡の調査例が少なく、住居跡・建物跡がこれだけまとまって検出された例もないことから、注目され

る遺跡である。平成14年度に行われた木次町北原本郷遺跡では、中期前葉から後期末にかけての堅穴住居が12棟検出された。遺跡のある広大な河岸段丘は、さらに調査が続けられることになっており、今後の成果が期待される。

古墳時代

斐伊川中流域には、副葬品に景初三年銘の三角縁神獸鏡を持っていたことで著名な大原郡加茂町の神原神社古墳をはじめ、木次町の斐伊中山古墳群、三刀屋町の松本古墳群1号墳・3号墳などの前期古墳が点在する。これらの古墳は、斐伊川の本流に、赤川あるいは三刀屋川といった大きな支流が合流し、平地が遠望できる微高地や山丘上に立地するという特徴がある。

一方、中流から上流域では、従来より前期や中期の古墳はほとんど見当たらないとされてきたが、近年この定説にも変化が生じた。仁多町三成の須坂古墳群は15基から構成される古墳群である。前方後方墳1基、一部に弥生時代の台状墓と思われるものも含み、前期古墳群に類似するものである。近い例として、斐伊中山古墳群を挙げることができる。また、同じく仁多町三成の丸子山古墳群は円墳2基からなるが、副葬品等の状況は中期末頃の様相を呈しており、この地域の首長クラスの墳墓と推定されるものである。

後期になると、斐伊川中・上流域の主要古墳が、仁多町高田・郡村の付近に築かれるようになる。この付近は、後述のように『風土記』の時代に仁多郡の郡家が置かれていたところで、岩屋古墳、常楽寺古墳など、それに相応しい古墳が存在する。岩屋古墳は7世紀前半頃の円墳で、墳丘の規模は径約15mと大きくはないが、全長約7mの仁多郡では群を抜いて大きい横穴式石室を持つ。常楽寺古墳は墳丘を欠き、また豪道部も欠いているものの、整った横穴式石室を持つ円墳である。この古墳の特徴は、円筒埴輪14以上、馬形埴輪1、男子人物埴輪3、女子人物埴輪2と、豊富な埴輪を持つことである。石室内部の調査がなされていないこともあって、被葬者の人物像は詳らかにはできないが、相当な勢力がここに存在していたことは確実であり、その勢力は何に依拠したものなのかを分析していくことが今後の課題となるであろう。

横穴墓は、木次町で10群、仁多町では16群を数えることができる。その形態は、ほとんどが玄室の平面プランが縱長方形、断面が三角形のテント形で、妻入りであり、この形態は斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。副葬品も須恵器を中心に、僅かな玉類や鉄器を持つなどおむね等質的だが、木次町の平ヶ廻横穴墓では金銅装の刀子が副葬されていたことが注目される。また、平成12年に調査が行われた木次町の下布施横穴墓群では、1号横穴墓から遺存状態の極めて良好な装飾大刀が出土した。その装飾は、柄に葛を密に巻き、柄頭には黒漆を塗った上に金箔・銀箔を貼ったもので、畿内で一括生産される一般的の装飾大刀とは技術的系譜が異なるものとして注目される。仁多町の殿ヶ迫横穴墓群では、切削の残る足に添え木がなされている人骨が発見された。同じく時仏山横穴墓の被葬者は伏臥伸展位という類例のない形で葬られていた。副葬品も供献土器ではなく、メノウ製の勾玉、切子、小正などの数は近隣の他例より突出している。

平成14年度の実施の調査では、仁多町の原田古墳から豊富な副葬品が発見された。横穴石室の大部分は残っていないが、ヒスイの勾玉、双龍環頭大刀、金銅製馬具などの遺物は近隣に出土例が無く、注目される。

木次町口登に所在する原口古墳群は、6基のうち調査されたのは1号墳のみであるが、松江市友田遺跡の土壙墓や埴丘墓との共通点が指摘され、古墳群と呼ばれてはいるものの、弥生後期の墳丘

墓の可能性が高いと指摘されていることを記しておきたい。

奈良・平安時代

『風土記』によれば、大原郡の役所である郡家は斐伊郷、飯石郡の郡家は多爾郷、仁多郡の郡家は三处にそれぞれ置かれた。

飯石郡家の所在地は現在の飯石郡掛合町郡のあたり、大原郡家は現在のJR木次駅の北側の地点と推定され、それ以前には大東町仁和寺のJR幡屋駅付近にあったらしいが³¹、いずれも『風土記』の距離単程や地名からの推測であり、関連する遺跡・遺物は見つかっていない。それに対して、仁多郡家には有力な推定地があり、それは仁多町郡村のカネツキ免遺跡付近と考えられている。カネツキ免遺跡からは須恵器や土器をはじめ、多くの遺物が出土しているが、土器には墨書き土器も含まれ、また円面鏡・転用鏡も見られる。付近には大領原や内裏原という字名があり、近隣の芝原遺跡からは「厨」と墨書きする須恵器が出土している。これらのことから、カネツキ免遺跡は遺構こそ確認できていないものの、仁多郡家と関わりの深い遺跡といえる。

また、木次町家の上遺跡は、配石遺構から土器・手づくね土器・土玉などが出土した7~8世紀の水辺の祭祀に関係する遺跡と考えられている。

尾原ダム建設に伴う調査では、木次町の楕ヶ坪遺跡で平安時代半ばと推定される製鉄炉壁や鉄滓類が出土した。これらは、類例が少なく不明な点が多い平安時代の鉄生産についての貴重な資料として注目される。

中・近世

承久の乱(1221年)の後には、大原郡内にも東国の御家人が進出してきた。中でも日伊郷の伊北氏、大東庄の上屋氏、大西庄の飯沼氏、淀本庄の中沢(牛尾)氏、佐世郷の佐世氏らである。この地域には、牛尾氏の三笠城・高平城(大東町)、佐世氏の佐世城(同町)、立原氏の近松城(加茂町)など、重要な城が集中していた。

仁多郡では、信濃国の御家人の飯島氏が、承久の乱の戦功を賞されて、三沢郷に所領を獲得した。飯島氏が実際に三沢郷に移り住み、三沢氏を称して本格的な所領經營に乗り出したのは、鎌倉時代末期のことである。三沢氏は鴨倉山(要害山)に居城である三沢城を構えると、隣接する阿井郷・布勢郷・三所郷に支配領域を広げ、室町期には横山庄にも進出した。三沢城は14世紀初頭の築城とされ、主郭を中心に主として北側と東側の尾根筋に大小14段以上の郭をもつ山城で、西と南は絶壁状をなし、南の麓には阿井川が流れれる。鴨倉山の標高は418.5mと周囲の山々に比べて低いにも関わらず、四方の要衝をほとんど望める位置にある。三沢氏は、奥出雲の鉄の生産と流通を掌握し、出雲国内で最大の勢力を誇る国人へと成長を遂げた。天文12年(1543年)には尼子氏に征服されるが、それでもなお出雲最大の国人領主として影響力を保持し続けた。三沢城は、永正6年(1509年)、横山庄内に藤ヶ瀬城が築かれるまで、三沢氏の本拠地であった。

『風土記』の仁多郡や飯石郡の条にも記されるなど、古来より、雲南地域では盛んに製鉄が行われてきた。大原郡の記事にはこのような記述がないが、事情は同様と思われる。近年の調査によれば、下布施川流域の谷筋に12世紀後半と推定される木次町の上垣内たたら跡、13世紀後半の可能性が高い同町の枯木ヶ谷跡遺跡などの野だらが点々と分布し、大原郡内では主要な鉄生産地の一つだったようだ。

近世になると横山町の絲原氏・卜藏氏、仁多町の櫻井氏、青山村の田部氏など著名な鉄師が登場した。松江藩の後ろ盾を得た彼らによって、大規模な高殿たたらが営まれるようになると、雲南地

域の産銅量は飛躍的に増大することとなった。しかし、大原郡南部においては近世以降も依然として小規模なたたらが散在するにとどまり、高殿たたらは下布施跡の上鉄跡が知られる程度である。

註1 加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』 1992 今井書店

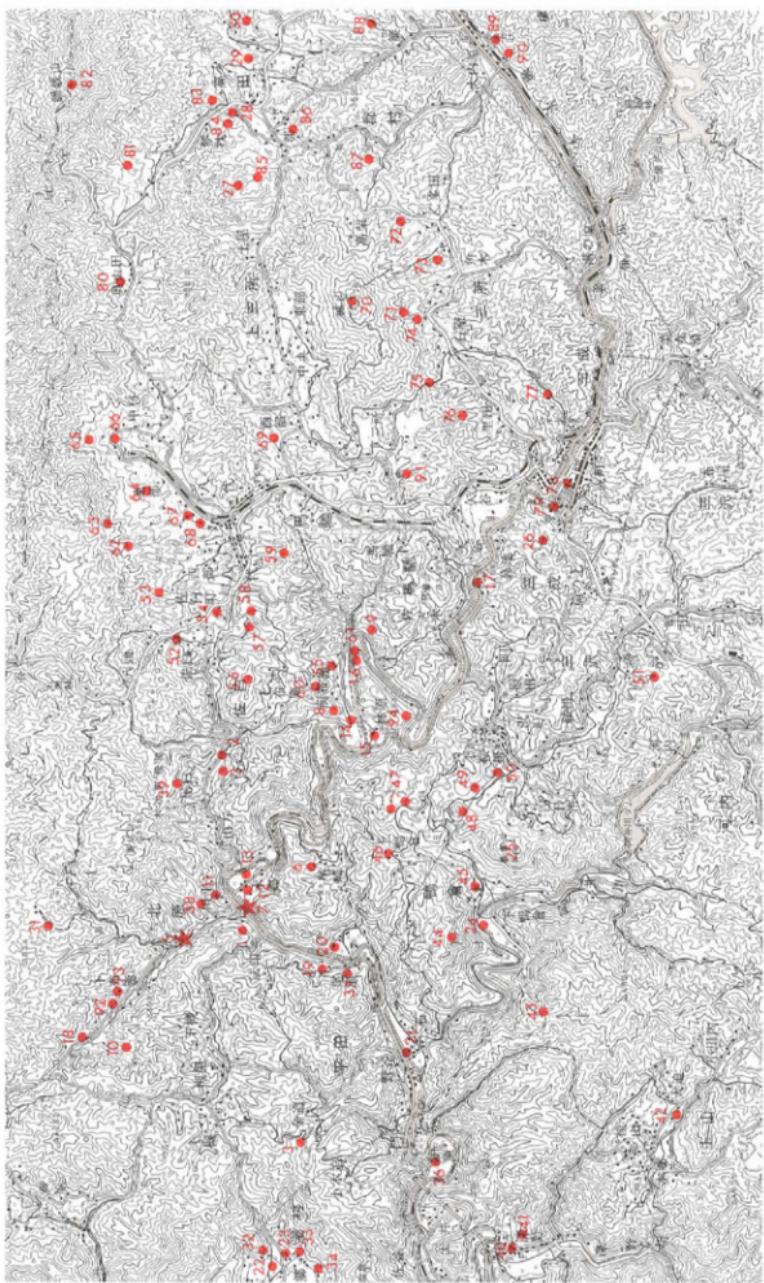
【参考文献】

- 『斐伊川誌』 1995 建設省中国地方建設局出雲工事事務所
 加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』 1992 今井書店
 加藤義成校注『校注出雲国風土記』 1965 千島書房
 『道路改良計画に伴う 下鴨倉跡緊急発掘調査報告』 1981 仁多町教育委員会
 『発掘調査報告書 奈良寺古墳』 1985 仁多町教育委員会
 『比丘尼原横穴群緊急発掘調査報告』 1986 仁多町教育委員会
 『郡原敷占跡 - 調査と石室の移築-』 1986 仁多町教育委員会
 『緊急発掘調査報告 上分・原たたら跡』 1989 仁多町教育委員会
 『道路改良工事に伴う第2次発掘調査報告 下鴨倉遺跡』 1990 仁多町教育委員会
 『古代の出雲を考える7 松本古墳群 -斐伊川流域の前期古墳をめぐって』 1991 出雲考古学研究会
 『発掘調査報告書 野上・たたら跡』 1992 仁多町教育委員会
 『発掘調査報告書 斐伊中山古墳群 -西支群- 本次町文化財調査報告書第2集』 1993 木次町教育委員会
 『高田小学校建設予定地内発掘調査報告書 口ヤケたたら跡 芝原道路』 1994 仁多町教育委員会
 『尾原ダム建設に関わる発掘調査報告書 武者山遺跡 丸子古墳群』 1995 仁多町教育委員会
 『妙見山遺跡発掘調査報告書 本次町文化財調査報告書第3集』 1995 本次町教育委員会
 『主要地方道玉置吾妻山線改良工事に関わる発掘調査報告書 宇根たたら跡』 1996 仁多町教育委員会
 『中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書 須坂遺跡・他』 1997 仁多町教育委員会
 『平田遺跡 本次町文化財調査報告書第4集』 1997 木次町教育委員会
 『家の上遺跡・石窟遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』 1998 本次町教育委員会
 『鳥根県中近世城跡分布調査報告書(第2集) 出雲・隱岐の城館跡』 1998 鳥根県教育委員会
 『上道内たたら跡 北原1遺跡 茶屋の遺跡跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1999 本次町教育委員会
 萩原千鶴『山云国風土記』 1999 講談社学術文庫
 『桔木ヶ谷鉱跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3』 2000 本次町教育委員会
 『平田遺跡第Ⅲ調査区 斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2000 本次町教育委員会
 『駿ヶ追横穴墓群 西尾寺遺跡 龜ヶ谷遺跡 シベ石遺跡 時佐遺跡 時佐山横穴墓 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2001 仁多町教育委員会
 『鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 年報 X 平成13年度』 2002 鳥根県教育委員会

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	尾白1遺跡	散布地	25	元治原跡(舊食糞場)	城跡	49	びけ古墳	古墳
2	尾白2遺跡	尾原跡	26	丸子山古墳群	古墳	57	布久山遺跡	城跡
3	家ノ庭貝塚跡	散布地	27	カトリハ遺跡	散在地	51	八幡山御穴群	穴
4	川平1溝跡	芋原跡	28	奈良寺古墳	古墳	52	庭白1・2古墳	古墳
5	船ノ内遺跡	集落跡	29	庭白2古墳	古墳	53	全く寺跡	散在地
6	龜ヶ谷遺跡	整地跡	30	豊雲古墳	古墳	54	川山古墳	古墳
7	家の上1・2遺跡	散在地	31	下原遺跡(下原跡)	散在地跡	55	丹清寺	寺社
8	駿ヶ谷鉱跡	礦穴	32	火垂沢跡	散在地	56	佐久寺	寺社
9	鶴山山神社・遺跡	神社	33	赤道遺跡	散在地	57	下布施穴群	穴
10	了子始便人墓群	墓穴	34	高見原古墳	古墳	58	上布施遺跡	散在地
11	音ノ瀬遺跡	散布地	35	企削遺跡	散在地	59	びけ・赤穴跡	穴
12	家の後遺跡	散布地	36	早世野古墳跡	古墳	60	木の子城跡	城跡
13	北条本郷跡	散布地	37	石磨古墳	散在地	61	林原古墳	古墳
14	尾白2遺跡	東高源跡・古墳	38	下布施城跡	城跡	62	三山古墳	古墳
15	市道遺跡	散布地	39	延泊古墳群	古墳	63	白星遺跡	散在地
16	野原遺跡	散在地	40	正井1・2号坑跡(古墳)	古墳	64	四星遺跡	散在地
17	葛西遺跡	散布地	41	尾原1・2号坑跡等	古墳	65	江戸岬遺跡	散在地
18	松木ヶ谷遺跡	散在地	42	上山城跡	城跡	66	宋家古墳	古墳
19	上道内たたら跡	鉱業跡	43	之の原遺跡	散布地	67	長崎古墳群	古墳
20	上原跡	河原跡	44	吹木山城跡	城跡	68	金剛岡跡	散在地跡
21	平田遺跡	鉱業跡	45	光海寺・六櫻寺	古跡	69	牛舎古村跡	散在地
22	牛原田遺跡	散布地	46	芝原古墳	古墳	70	足利山城跡	城跡
23	西野谷遺跡	散布地	47	元治原古跡	古跡	71	石原古跡	古跡
24	下布施遺跡	散布地	48	久見寺跡(古跡)	散在地	72	青森古跡	散在地

第2図 周辺の遺跡 (S=1/50,000)



家の後Ⅰ 遺跡

第2章 家の後Ⅰ遺跡

第1節 調査の経過と概要 (第3~4図、図版1.2)

家の後Ⅰ遺跡は、島根県大原郡本次町字北原大字家の後に所在する遺跡である。斐伊川が南東へ向けて大きく流れを変える北原地区は、その左岸に斐伊川流域でも有数の規模を持つ河岸段丘が開けている。この河岸段丘上には家の後Ⅰ遺跡をはじめ、北原本郷遺跡、家の後Ⅱ遺跡が広がっている。河岸段丘の最下流部に位置する家の後Ⅰ遺跡は2面の水田になっており、範囲確認調査の結果、調査区は川側の水田北半分を除いた片凸状に設定されていた。調査の進行に伴い、調査区を拡張したため、総面積は水田2面分の約2,200m²となった。今回は作業の円滑化と効率化を図るため、調査区をⅠ、Ⅱ、Ⅲ区に分け、出土遺物は全点番号を付加の上、遺跡情報システム (SITE)^④ を用いて取り上げることとした。

調査は平成13年4月初旬の表土掘削からスタートした。調査区の大部分が高い圃場整備客土で覆われていたため、重機を用いた掘削に2日を要した。

客土層の下面では、径5m前後の穴に大小の円礫・角礫を人為的に詰め込んだ場所が5、6か所在していた。この場所は元来斐伊川河岸段丘の最下段に位置するため、数トンに達すると思われる巨石が多い。また背後の山は急角度で切り立ち、中腹には露頭から割れ落ちたと思われる巨岩が幾つも引っ掛かっており、転落石も多いと思われる。おそらくは圃場整備で地均しをした際に、邪魔になる川原石、転落石を集めて埋めたものと考えられる。岩石を適宜撤去しながら1~2m掘削し、客土を掘り上げた。その結果、山側にあたる約1/4は地山以下まで掘削されていることが明らかになつたため、この部分は人力掘削の必要が無くなった。

本格的な発掘調査は4月16日から始まった。依然として搅乱土が各所に残っており、これらを除去しながら調査を行った。遺物は特に集中する部分もなく、全体に散漫な状況であった。調査中は、東角及び西角に縦横1m×2mのトレンチを設け、本調査に先行して掘削を行い、土層を確認した。

6月に入ると、調査範囲を決定する根柢となった平成11年度の調査が、トレンチによっては客土層以下まで達していないことが明白となった。遺物の出土状況を見ても、同じ水田の1/2だけが遺跡外とは考えにくく、6月中旬から徐々に調査区を広げ、最終的には約2,200m²の調査を行った。またこのころ、Ⅲ区の中央部を中心にして火山灰が斑点状に検出され始めた。最終的にⅡ区とⅢ区の一部で面的な検出をするに至ったが、6月25日には中村唯史氏に現地を見ていただき、三瓶太平山降下火山灰の可能性が高いとの指導をいただいた。また火山灰層を境に縄文時代の包含層が二分される事も明確になった。

7月初旬には、大量の円礫が調査区を埋めるようになった。縄文時代中期後半以前の斐伊川と考えられるこの面は、大小の川原石が隙間無く広がっており、重機では歯が立たず、人力で掘るためには膨大な労力を要すと考えられた。一方、先行トレンチでは、川原面以下に川砂が2m以上堆積していることが明らかとなり、遺物もないことが確認された。さらに下位に包含層が存在する可能性はあるものの、川原石を全て撤去した上でさらに2m以上掘削することは、事实上困難であった。総合的に検討した上で、この川原面での調査終了が決まった。

8月1日には島根大学汽水城研究センターの竹廣文明氏（現広島大学）に出土遺物を見ていただき、整理法などの助言をいただいた。8月7日には発掘作業が終了し、翌8日に調査後の空撮を行って、現地調査を終了した。また8月後半には文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏に土壤分析用のサンプル採取をお願いした。11月14日には、垣ノ内遺跡、尾白I・II遺跡、家ノ脇II遺跡などと合わせて調査指導会を行い、御指導いただいた。

調査期間、現場の割約もあり現地説明会を行うことはできなかつたが、11月に開催した垣ノ内遺跡現地説明会では主な出土遺物を展示する事ができた。復元した縄文土器や石器類は、本次町・仁多町の中学生が発掘体験や総合学習で現場を訪れた際にも活用した。また毎年5月下旬にダム予定地内で開催されていた「葉の花祭」や11月の温泉公民館・農林環境改善サブセンター主催の「ふるさとまつり」でも遺物展示コーナーを設け、広く地域の方々に調査の内容を知つていただくことができたと考えている。

第2節 家の後I遺跡の基本層位（第5図）

家の後I遺跡の層位は、第5図のとおりである。

最上層（A層）は水田耕作土で、戦後になって北原の河岸段丘の圃場整備が行われた際に持ち込まれた客土である。この圃場整備で当初3段であった水山を2段に造成し直したようで、最上段（山側）は地山以下まで削り込んで平坦面を作り出していた。一方で最下段（川側）はあまり大きな改変を受けなかつたようである。

以下13層に細分できるが、大枠では弥生時代後期以降の包含層（B層）、縄文時代後期から弥生時代前期の包含層（C層）、三瓶太平山降下火山灰層（D層）、縄文時代中期後半から縄文時代後期の包含層（E層）、縄文時代中期後半以前の川原砂層（F層）に分けられる。

B層は圃場整備によってかなり攪拌を受けており、層の厚さも場所によって大きく差があつた。遺物の出土状況から考えて、何らかの造構の存在が推測されるが、圃場整備によって失われてしまつたのだろう。また、B層出土遺物とした中には客土とともにに入った遺物が混じつている可能性がある。C層とE層は粒子のやや粗い砂層で、色調に差があるものの質自体は大差がない。D層は火山灰と軽石を含み、これを境にC層とE層を明確に区別することができた。この火山灰は軽石の発泡状態などから太平山降下火山灰の可能性が高いとの指摘を受けたが⁶²、C層からは四元式並行以降の土器が出土しており、E層から崎ヶ鼻式の土器が出土するなど矛盾はないと思われる。なお三瓶山周辺の遺跡から採取されたサンプルの14C年代測定により、降灰時期は3600～3700B.P.前後が想定されている⁶³。

F層は木目の細かい砂層で、上面に大小の凹窪が咬んでいる。E層の出土遺物は船元2式以降に限られるので、それ以前の斐伊川の川原と考えられるが、現在の川原面に対し4mほど高い位置にあたる。重機を用いて調査区西角に裁ち割りを入れたが、この層は2m以上厚さがあり、遺物は出土しなかつた。

なお、各層の性格を把握するため土壤の科学分析を行つた。花粉量が少なく、得られたデータは限られたが、遺跡周辺の古植生や遺跡付近での稲作の可能性を示すデータが得られた。この結果については第4章第3節に詳細を報告している。

第3節 出土遺構（第4図、図版2）

今回の調査では、縄文時代中期後半以前の斐伊川の流路を確認した他は明確な遺構を検出できなかった。川に並行するように杭列が2列検出されたが、セクション検討の結果、圃場整備直前まで使われていた水田を区画したものと判断した。また客土掘削時には、鳥居状に組まれた木材と長大なワイヤーが出土した。これは戦後、木材の積み出しのために造り付けられた索道の残骸のようである。

このように、家の後I遺跡では、近現代の暮らしを物語る遺構が検出されたに過ぎない。

第4節 出土遺物（第6図～第20図、図版4～16）

今回の調査では、調査面積が比較的少ないと、縄文時代の包含層調査が主体になることを考慮し、出土遺物全点に番号付加の上で取り上げることとした。取り上げにあたっては、遺跡情報システム（SITEver.4）を用いて出土位置、層位、種別等をデジタルデータとして取り込んだ。第6、7、8図の作成にはこのデータを利用した。出土遺物は計3959点で、この他に表探資料など番号未付加の遺物が約50点ある。

遺物の取捨にあたっては、時期がある程度判断可能な文様のある土器を優先的に掲載した。また精製の浅鉢類も極力掲載することとした。一方、出土遺物の大部分を占める粗製の鉢類については接合が困難なものが大部分であるため、口縁部の残る破片など個体の把握できるものを中心分類し、代表的なものを掲載している。非掲載の遺物数は多いが、遺跡の様相は把握できると考えている。また非掲載遺物も全て番号付加のまま個別に梱包し、デジタルデータとともに収蔵してあるので、これらを対比することで出土位置を把握することが可能である。

縄文土器

第9図～第10図はE層出土の縄文土器である。

9～1は貼付突帯に刺突文を入れている。地文は荒い縄文で、船元2式並行であろう。この時期の遺物は計2点のみで、今回の調査では最も古い遺物である。2、3は半裁竹管文が入る縄文地の土器で、船元3式である。20も小片で判別しづらいが、同時期の可能性が高い。4～14は地文が撚り糸の土器群で單木2式である。小片が多いが深鉢類と思われる。この遺跡では單木3式に当たる個体はないようである²¹。

15～17は太めの沈線が入る磨消し縄文の土器で、中津1式または2式である。18は沈線の細い磨消し縄文の土器で中津3式であろう。9～19は磨消しの荒さが特徴的だがほぼ同時期のものと判断した。

21、22は同一個体で、口縁の一部と底部以外ほぼ完全に復元できる。頸部は丁寧にナデて、口縁部と胴部を明確に分けている。口縁端部は広く外側に肥大させ、横方向に凹線を走らせる。4か所に耳状の突起が付くと推定したが、3か所の可能性もある。突起は内側を漏斗状に整形し、螺旋状に凹線を入れている。胴部は大小のP字形モチーフが上下交互に入るが、形状はかなりくずれており、一部は逆L字形にも見える。縄文もモチーフに対して統一性がなく、内外が逆転する部分がある。時期は、頸部に空白を設け、口縁と胴部の文様が明確に分かれていることから、布勢式段

階にあたると考えられる。口縁断面形やモチーフの特徴が似る上器として、ほぼ同時期と考えられる松ノ木式⁹が挙げられる。

第10図も縁帶文土器を中心に掲載している。これらの土器は、布勢式から崎ヶ鼻式に位置づけられる上器群である。口縁端部を外側へより広く肥大させる特徴は、松ノ木式に見られるもので、頸部をナデあるいは磨くことで口縁部と胴部を明確に分けている。1は口縁部を横方向に肥大させ、口縁端部に縄文を入れる個体である。崎ヶ鼻式の範疇と考えられる。2は口縁端部に縄文の代わりに刻みを入れるが、ほぼ同じ時期であろう。6は口縁を縱方向に肥大させるやや古い形態だが縄文は入らない。津雲A式並行の鉢に見られるモチーフで、これも崎ヶ鼻式に位置づけられそうである。8~11は同一個体で全面に丁寧なミガキを施し、口縁部の要所には刺突を円形に並べる。胴部の直線的なモチーフは2条の凹線で描かれる。13では口縁があり外傾せず、口縁端部を内側にも肥大させ横方向と円形の凹線を入れる。頸部はナデ調整、胴部のモチーフは3条凹線が用いられる。14は布勢式ではほぼ全容の分かる個体である。口縁部を“く”の字形に肥大させ、モチーフは3条凹線で描かれる。頸部と胴部には縱方向の条痕が入る。縁帶文土器で頸部に条痕が確認できたのはこの1個体のみである。

第11図にはC層出土の遺物を並べた。1~4、7、11、18、19は縄文の入る一群で、四元式並行の土器であろう。口縁が内傾する鉢としない鉢がある。4は凹線の間隔が広く、中津式の可能性もあるが、層位を尊重して四元式の範疇に含めた¹⁰。7は凹線内に連続する刺突があり、彦崎K2式への過渡的な様相と考えられる。

11~5、8、9、12~17は擬縄文の入る土器である。3条以上の凹線が主として横方向に入るが、それを弧で繋ぐもの、繋がず中途で止めるものなど多様性がある。また凹線内に連続刺突を施したり、要所に刺突を入れるものも特徴である。口縁が大きく内傾するものや段の付くものは注口土器の可能性が高い。13、14では擬縄文の代わりに梢円形の連続する刺突を用いている。これらの上器は彦崎K2式並行の上器であるが、6、10の様に刻日文を入れるものは元住吉山1式に並行するやや新しいものと考えられる。

11~20、21はかなり小型の鉢で、点でしか接合できないが同一個体である。非常に薄く繊細な作りで、胎土も他のC層の土器とは全く異なる。調整はミガキを主体とし、口縁端部とくびれた頸部に凹線文と刻日文を組み合わせて描く。胴部は凹線を用いた横方向のモチーフを基本としながらも、アクセントとして対向する丁字形文を入れている。胴の一部には赤色顔料が残っているが、全面にあるいは一部に塗布されていたようだ。出土例がこの地城では見つからないが、北部九州に分布する西平式に類似する壺があり、これに並行する可能性を指摘しておきたい。

11~23~25は口縁内側に連続する半貫通の竹管刺突文を入れるもので、孔列土器の範疇に入るものである。いずれも谷尻式と考えられるが、23は断面長方形の刺突を押し引き気味に入れており、厚さが薄く胎土も他の2点とは異なっている。10~26、19~1は突帯文土器である。

12~1~7は内、外面を丁寧にナデ調整する鉢類である。後期のくびがない深鉢だろうか。8は口縁部に粘土帯を貼付けて肥大させる深鉢である。9、10は波状口縁の端部外面にヘラ状工具を用いた刻みが長く入る深鉢で、外面調整は貝殻条痕を用いる。後期の深鉢であろう。11~15は表裏とも条痕の入る破片だが、条痕の入る上器は僅か10点ほど出土したに過ぎない。

第13図には主に精製浅鉢類を並べた。浅鉢の多くが内外面ともミガキを基本とし、表面が暗褐色

系の黒色磨研土器である。

1は緩く2段に屈曲する口縁で、横方向のやや粗雑なミガキが入る。2、3は口縁が屈曲して直線的に伸びる鉢で、3では外面に細く浅い沈線が入る。4は底部が張り、大きく屈曲する浅鉢である。表面は摩耗しているが、内外面ともミガキ調整である。

5～12、14は浅く直線的に口縁が広がる浅鉢である。口縁端部の形状は肥大させるもの（5、6）、平坦面を作るもの（8、10）、丸くおさめるもの（7、9）がある。11、12、14は口縁内面に沈線を入れて端部を区別するもので、端部には斜め方向の刻みが入る。13は口縁が屈曲して内傾する浅鉢の破片で、外面は横方向のやや粗めのミガキが入る。口縁は欠損するが他とほぼ同時期のものだろう。15は口縁が短く、突帯を貼り付けて端部を2段に屈曲させる浅鉢である。小片だが口縁が直線的であることから方形浅鉢と考えられる。焼成後穿孔されている。

16～20は端部を肥大させる浅鉢で、17、19、20では明確に段を作り出す。内外面とも丁寧なミガキを入れる。口縁は緩く外反するものが多いが、18の様に顕著でないものもある。16は荒いナデ調整が主体で後期の浅鉢の可能性もある。22～24は丸みを帯び内湾する碗状の浅鉢類で、ミガキを入れるものと荒いナデのものがある。25～28は口縁端部を玉縁状に肥大させるもので、内外面とも丁寧なミガキを施す。

これらは黒色磨研系の浅鉢であるが、1がやや古手の形態である以外はおおよそ縦原式から谷尻式に相当すると思われる。さらに細分できるかもしれないが、有文深鉢や粗製浅鉢とのセット関係が掴めないので、ここでは一括して報告しておきたい。

第14・15・16図は粗製の鉢類である。出土した粗製深鉢の大部分はくびれが無く、平底あるいは上げ底である。調整は粗雑なナデとケズリが主体で、貝殻条痕の入るものは少ない。

14-1～6は口縁部を僅かに膨らませてアクセントを付けるもの、14-7～12、16-1～4は口縁端部に平坦面を作るものである。平坦面は14-7、12のように内面とともに横ナデするものと、16-1、2のように外面を横方向に丁寧にナデするものがある。

15-1～11、17-1は口縁端部を丸くおさめるもので、緩く外反する8などは晩期の深鉢と判断した。11は後期の浅鉢であろうか。17-1は全体の1/2が復元できる深鉢で、上部に補修孔が開けられている。

16-5～8は口縁端部を細める深鉢で、口縁部を中心比較的丁寧にナデ調整が行われている。

石器類

出土石器は、数量表のように総計87点である。石斧類は3点でいずれも乳棒状石斧の破片である。石材に差があることから、全て別個体と思われる。3は刃部が破損した後に再度加工した痕跡があるが、中途段階で止まっている。剥片石器は36点で、石礫、楔形石器、石匙がある。7は横長剥片を加工した石匙で、9の楔形石器は先端を欠いている。

石錐は37点出土した。全て切目石錐に分類されるものである。家の後I遺跡の切目石錐は長辺の両端を打ち欠くものと、一端のみ鋭く切り欠きを入れる2形態に分類できる。後者の場合は切目の無い一端が突出する石を選択したようで、形状が心葉形のものが多い。両者をどのように使い分けたのか定かでないが、割合は約12：7である。グラフ2には重量別分布を示した。明確な山は無いように見えるが、主として120g前後までが標準的に用いられ、200gを越えるものは少ない。また

形態の違いと重量にも、特に関係は見られない。

磨石、磁石類は使用痕や加工痕の明らかなものを選択し、計測した。使用痕の位置や、形態から分類したが、用途の不明なものが多い。18-13、14の桂化木は同一個体、あるいは同一母岩によるもので、端部は丸く摩滅している。出土層位から考えて縄文時代後期以前のものと考えられるが、用途は不明である。桂化木は周辺では産出しないため、搬入品と考えられる。

弥生時代以降の遺物

弥生時代以降の遺物は、縄文土器に比べて数が非常に少ない。またB層はかなり攪乱を受けており、客土とともに混入した遺物の可能性もある。

19-2~4は弥生時代前期の壺で、頸部にヘラ書き文と刺突文を入れる4はやや新しいものだろう。弥生時代中期から古墳時代初頭の土器は僅かなうえ、細片ばかりのため図示できるものは少なかった。5~9は後期から古墳時代初頭にかけての壺・壺類を並べた。10は低脚壺の脚部だが小片で時期は不明である。

須恵器は7世紀~8世紀を中心に壺、壺類、高壺などが出土している。辛うじて図化できたのは6点で、他は小片である。

16~18は近世の土師質土器で、ろくろ成形、糸切りである。

19は煙管の吸口で、真鍮版を丸めて錫止めしている。不明瞭ながら鶴の印が型押されており、雁首とを繋ぐ竹筒の繊維がそのまま残っている。雁首が出土しておらず明確な時期は分からぬが、吸口の構造が簡略化しながらも微妙な丸みが付けられている事から、18世紀~19世紀のものと考えられる⁴⁷。出土銭は計3点出土したがいずれも腐食が激しい。詳細は観察表を参照されたい。

第5節 まとめ

ここでは、家の後I遺跡の総括と若干の考察を行い、むすびに代えたい。家の後I遺跡では、縄文時代中期から近代までの遺物が出土したが、遺構は皆無であった。中心となるのは、三瓶太平山降下火山灰を挟んだ2枚の包含層である。

縄文時代について

包含層下層にあたるE層では、中期の船元2式から崎ヶ鼻式の土器までが連続と出土しており、その中心は撫糸地文を持つ里木2式と、縁帯文土器を主体とする2時期にある。調査時には両者の出土状況に明確な差を把握していなかったが、分布を図化すると川側の比較的下層部（第5図9層）に前者が多く、山側の上層部（同図6~7層）やかけ上がり部分（傾斜が急激にきつくなる部分）に後者がまとまっている傾向がある。また前者の土器は、それぞれの破片で胎土が異なるものが多く、破片に対する個体の実数は多くなると想定される。一方後者では、個体数はかなり限定され、本報告書掲載の点数と大差ないと考えられる。こうした差は、土器廃棄のあり方の違い、あるいは土壤の堆積作用、土壤生成作用の違いに因ると考えられる。土壤の堆積、生成作用については、E層内で複数のサンプルをとらなかったため詳細は明らかでないが、一因として指摘しておきたい。

上層にあたるC層からは、四元式並行の土器から弥生時代前期（I-4様式）までの遺物が出

上している。縄文土器の大部分が粗製の鉢類で時期が明確になるものは多くないが、四元式、西平式、谷尻式、前池式が確認できる。C層自体もさらに分層できた可能性もあるが¹⁵、第6図に見られるように出土状況は散漫で、圃場整備により削られた部分も多く、各時期の遺物を層位的に把握することはできなかった。土壤分析によればC層内、つまり四元式並行期から弥生時代前期の間に幾つかの遺構面が存在する可能性が示された。遺物との直接的な関係は不明であるが、この時期に周辺でイネ栽培が行われていた可能性が指摘されている。また、この頃の古植生はヨモギ類、タンボボ類、ウシクサ類が周辺に、斐伊川辺にはヨシ類が、近隣にはアカマツを中心とする松林、ニレ・ケヤキの湖畔林が存在したようだ。

このように家の後Ⅰ遺跡では、中期前半の船元2式から後期後半の彦崎K2式並行の土器はほぼ連続して出土している。晩期前半の土器は抜けているようで、谷尻式以降は弥生時代前期まで少数だが遺物がある。このことは、斐伊川の丁度対岸にあたる川平Ⅰ遺跡で押型文土器以降、弥生時代前期までほぼ連続して土器が出土しているのとは対照的である¹⁶。背後に山が迫っている家の後Ⅰ遺跡と比較的緩やかな段丘が連なる川平Ⅰ遺跡の違いが表れているのであろうか。

弥生時代前期～中期

出土遺物が少ないため、実態を把握することができない。

弥生時代後期以降

家の後Ⅰ遺跡は、前節までで記したとおり弥生時代後期以降の遺構面を全く検出できなかった。出土遺物は僅かで、弥生時代後期の壺片から近世の煙管まで幅広いが、それぞれを層位的に把握することはできなかった。家の後Ⅰ遺跡は、北原の河岸段丘の中でも最も下流のはずに位置するため、段丘も狭い。人々の日常生活域の中では、縁辺にすぎなかったのかもしれない。

一方で、この場所が河岸段丘において最も圃場整備の影響が大きい場所であったことも一因と考えられる。遺跡のある水田は隣接する水田に比べ約2mも低く、河岸段丘上で最も標高が低い。水田に効率よく水を供給する目的で、水田面を意図的に下げているためである。水田の畔にあたる調査区西南壁のセクションを見ると、圃場整備によって（あるいは整備前の水田構築時の影響もあるかもしれない）表土から1～1.5m掘り下げて水田を構築していることが確認された。つまり水田の構築により、弥生時代後期以降の堆積土（B層）は大部分が失われたと考えられる。実際にこの時期の遺構がどの程度存在したかは不明であるが、隣接する家の後Ⅱ遺跡や北原本郷遺跡の調査結果を考慮すると、数層の遺構面があったとしても不思議ではない。

三瓶太平山降下火山灰について

家の後Ⅰ遺跡では比較的良好な状態で三瓶太平山降下火山灰（約3,600年前）を検出することができた。この火山灰は、三瓶角井降下火山灰（約4,700年前）とともに完新世に降下したものとされ、三瓶浮布降下軽石、降下火山灰をあわせた3枚の火山灰層は、この地域の鍵層として注目されている。その契機となった飯石郡頓原町を中心とした志津見ダム建設に伴う発掘調査では、それぞれの火山灰層が厚さ数十cmに達し、包含層が明確に区別されている¹⁷。しかし完新世の噴火活動は比較的小規模と推定され、火山灰の構成粒子が完晶質～半晶質で識別が難しいことから、肉眼で

火山灰層を確認できない限り、遠隔地での判別は困難である³¹。鳥取県日南町では、角井降下火山灰と推定される火山灰層が20cm以上の厚さで確認されており³²、火山灰の分布軸に近い場所であれば火山灰を検出できる可能性は高かった。

尾原地域は三瓶山の東北東約30kmに位置し、火山灰の検出が調査上のポイントのひとつでもあった。平成8年度に調査が行われた平田遺跡では、太平山期の噴火に由来すると推定される軽石が包含層中から検出された³³。サイズの大きな軽石が含まれることから、何らかの目的で遺跡に持ち込まれたものの可能性が指摘されるが、近隣に比較的大型の軽石が降下してることが明らかになった³⁴。また平成11年度の範囲確認調査では、仁多町林原遺跡から一次堆積したと考えられる三瓶太平山降下火山灰が斑点状に検出された。林原遺跡は斐伊川左岸に広がる河岸段丘に位置し、土偶1点が出土するなど³⁵。本調査の成果が期待される遺跡であるが、この調査で尾原地域でも条件さえ整えば火山灰層を肉眼で確認しうることが明確になったのである。

今回の家の後I遺跡における火山灰層検出は、二つの意味を持つと考えられる。まず第一には、尾原地域においても、条件が整えば太平山降下火山灰層を層位的に押さえることが十分可能だということである。家の後I遺跡の火山灰は、厚さ最大5cm、多くの場合漸位部を除けば1cm前後に過ぎなかった。しかし実際は土質が他と全く異なるため、調査時においても容易に識別できた。対岸に位置する川平I遺跡では検出できず、仁多町家の脇II遺跡や本書収録の木次町垣ノ内遺跡のようにレンズ状に散在する場合など、立地や土壤堆積・生成作用の違いが与える影響は大きいと推定される。しかし調査時に検出できれば、鍵層として十分用いることができるだろう。

平成14年度に調査が行われた仁多町原田遺跡においても、太平山降下火山灰層が面的に検出されている³⁶。

第二には、包含層の区別が明確になったことで、崎ヶ鼻式の土器が火山灰降下前、四元式並行の土器が火山灰降下後に確実に位置づけられたことである。このことは一連の志津見ダム建設に伴う発掘調査でも指摘されていたことであるが、今回の調査もこれを追認する結果となった。降下火山灰がこの地域にどれほどの影響を与えたのか定かでないが、今後調査例が増加していく中で明らかになっていくことを期待したい。

まとめ

以上のように家の後I遺跡の調査では、縄文時代中期から晩期にかけての貴重な資料を得ることができた。本次町北原に広がる広大な河岸段丘の調査は、川平I遺跡を手始めに家の後I遺跡、家の後II遺跡、北原本郷遺跡と進められてきたが、全容が明らかになるにはまだ数年を要すだろう。現在の斐伊川は北原で90度近く蛇行しているが、斐伊川の流路は時代ごとに変化し、その結果として各遺跡の様相が異なっていると考えられる。最新の調査によれば、本流は現在よりも内回りでカーブしており、現在よりも南側を流れて家の後I遺跡に至ると考えられる。家の後II遺跡で確認されている縄文時代後期の支流合流点と、家の後I遺跡内の川原の位置関係を考慮すると、縄文時代後期以降に本流が現在の位置へ向かって北側へシフトしていったことがわかる。家の後I遺跡の調査結果は、こうした斐伊川の変遷と人々の関わりを垣間見せてくれるものといえる。

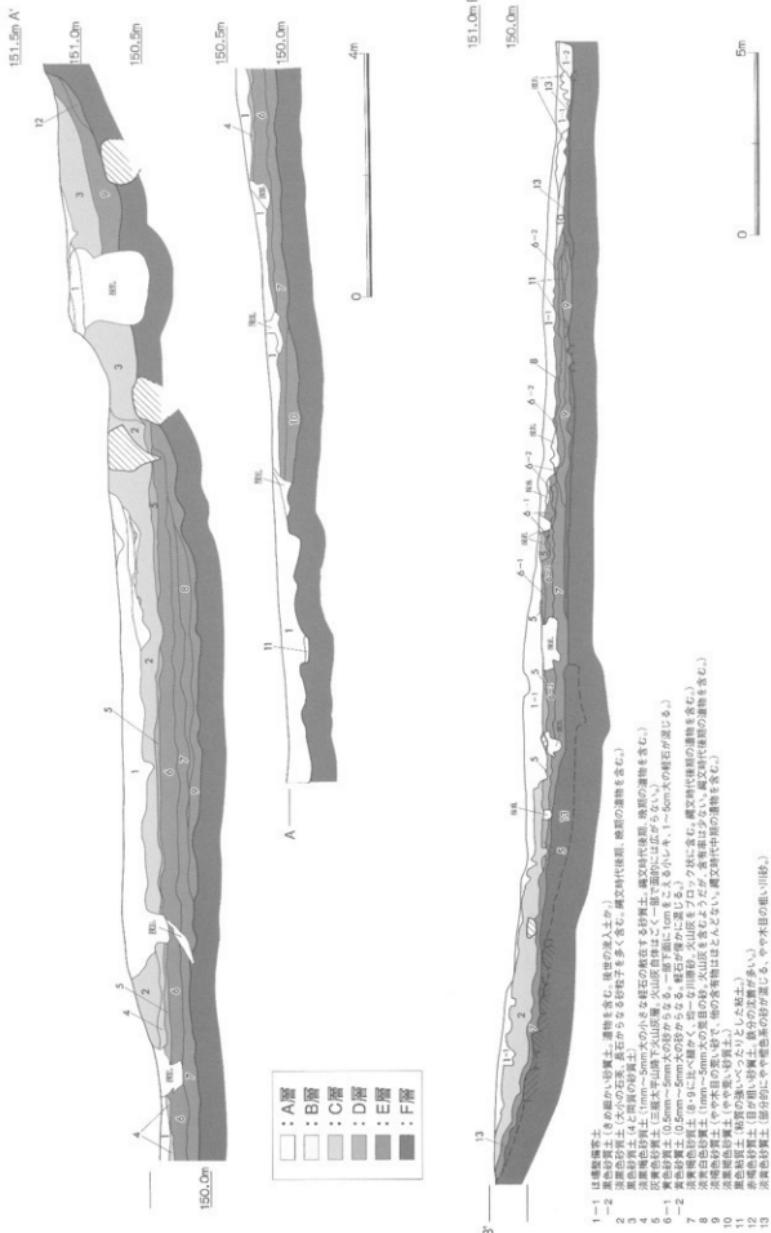
- 註1 テクノシステム株式会社製の遺跡調査システムで、光波測定器とハンディコンピュータを用いて、遺構・遺物の位置データを記録することができる。取り込んだデータは各種統計処理、図化に用いることが可能である。
- 註2 中村唯史氏の御教示による。
- 註3 ^{14}C 年代測定では、飯石郡領原町門遺跡 (3710 ± 130 B.P.)、西山上 (3530 ± 100 B.P.)、伊比谷 (3710 ± 100 B.P.)、神原II遺跡 (3730 ± 50 B.P.) の年代が得られている。
- 註4 同壁忠彦ほか 1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7号 倉敷考古館
- 註5 前田光雄編 2000『松ノ木遺跡V』高知県長岡郡本山村教育委員会
- 註6 千葉義は、山陰の後期土器である崎ヶ鼻式と「後現山式」について整理し、邑智郡邑智町沖状遺跡の良好な後期土器資料を用いて、崎ヶ鼻2式（彦崎K1式並行）以後で「後現山式」（彦崎K2式並行）以前に位置づけられる上器群を挙げて、沖式を設定した。今回、四元式並行として位置づけた土器は、この型式内で捉えられると考える。
- 註7 寺島幸一ほか 2001『岡説 江戸考古学研究事典』江戸考古学研究会
- 註8 第4章第3節において土壤分析を行ったサンプルは、調査区西南壁から採取したが、この部分のセクションではC層が比較的厚く堆積しており、4層（同前図2、6～9層）に分層する事ができた。調査区内では圃場整備による擾乱の影響が大きく、上部の数層は削平されて残っていなかった。
- 註9 島根県教育委員会 2003『尾白I遺跡・尾白II遺跡・家ノ庭II遺跡3区・川平I遺跡』
- 註10 角田忠幸 2001『板原Ⅲ遺跡』『三瓶山周辺の縄文遺跡』第12回中四国縄文研究会 中四国縄文研究会
- 註11 中村唯史 1999『島根県の完新世火山灰一とくに三瓶火山起源の火山灰層について』『島根県地学会会誌』15 島根県地学会
- 註12 中村唯史氏の御教示による。
- 註13 古本諭司ほか 1997『平田遺跡』本次町文化財調査報告書 第4集 本次町教育委員会
- 註14 古本諭司氏の御教示による。
- 註15 島根県教育委員会 2000『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』平成11年度
- 註16 平成14年度島根県教育委員会調査 原田遺跡では厚さ約5cmの太平山降下火山灰が確認され、これを挟んで2枚の包含層を検出している。



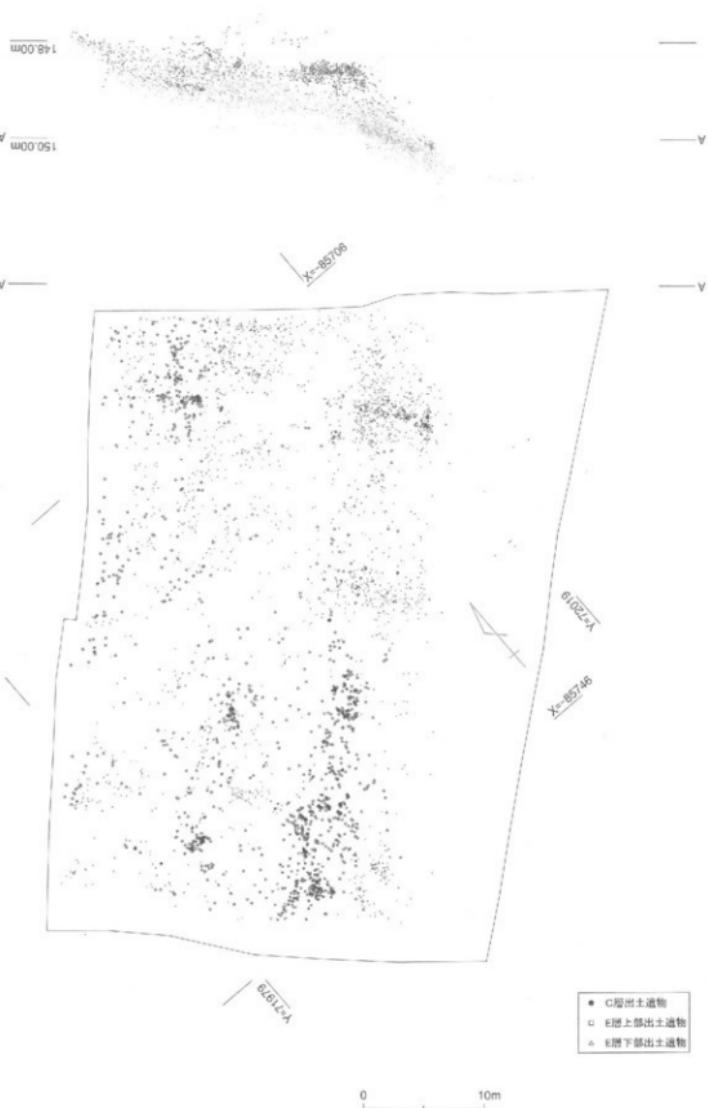
第3図 家の後I遺跡位置図 (S=1/1,000)



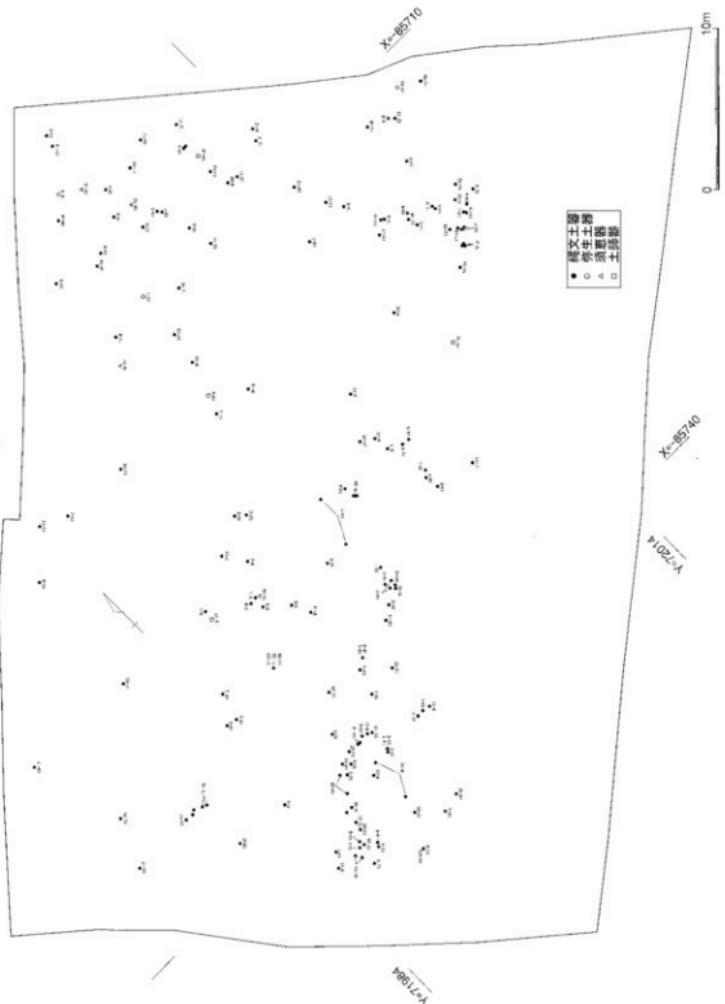
第4図 家の後Ⅰ遺跡調査後測量図 (S=1/400)



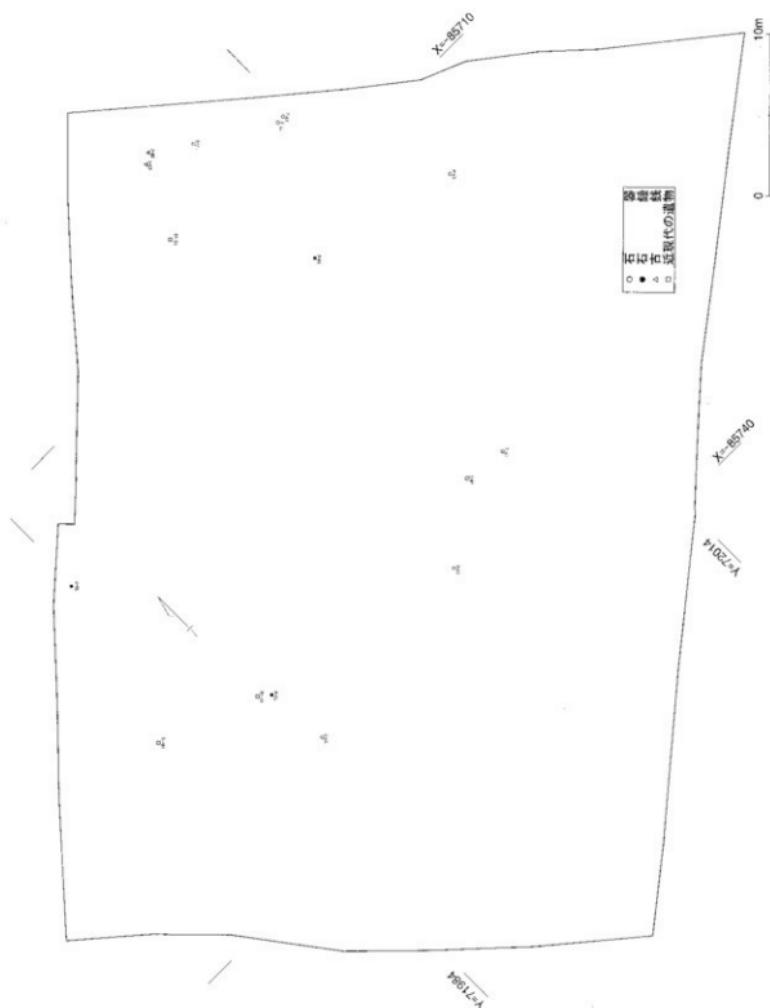
第5図 家の後I遺跡土層図（上図 S=1/80、下図 S=3/400）



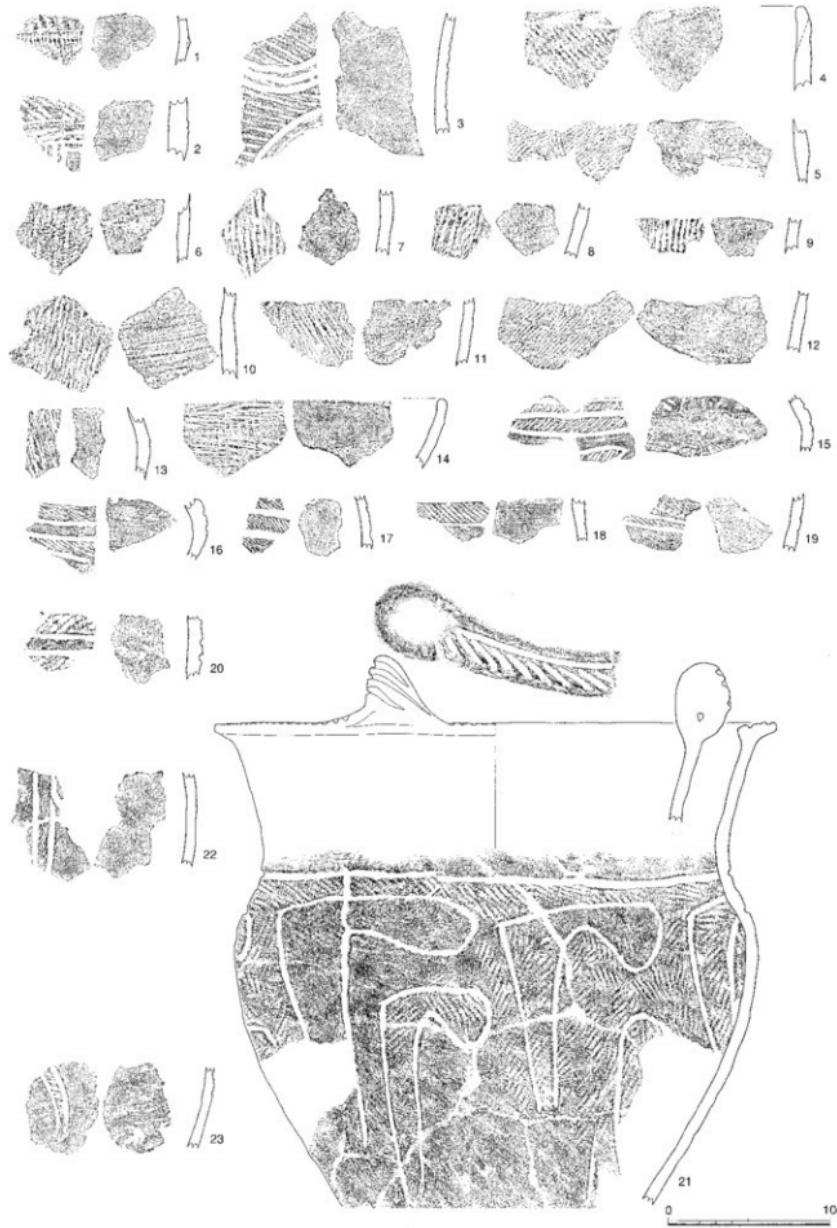
第6図 家の後I遺跡遺物出土状況図1 (S=1/400)



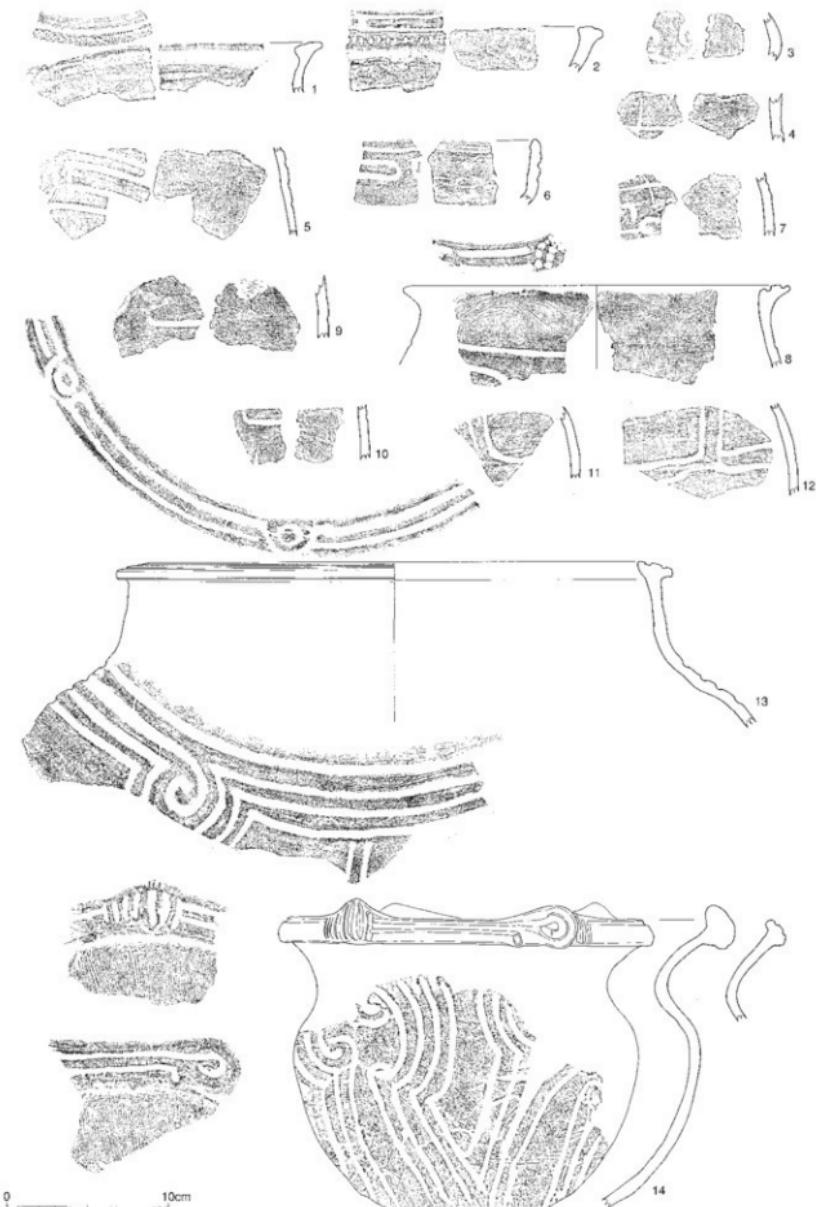
第7図 家の後I遺跡遺物出土状況図2 (S=1/300)



第8図 家の後1遺跡遺物出土状況図3 (S=1/300)



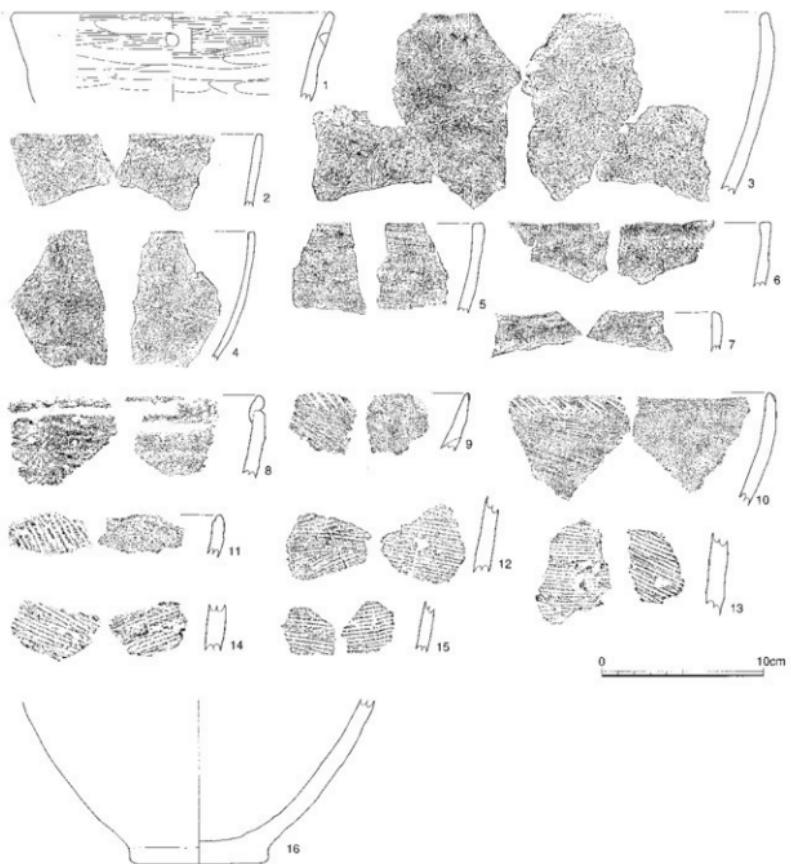
第9図 家の後I遺跡出土縄文土器1 (S=1/3)



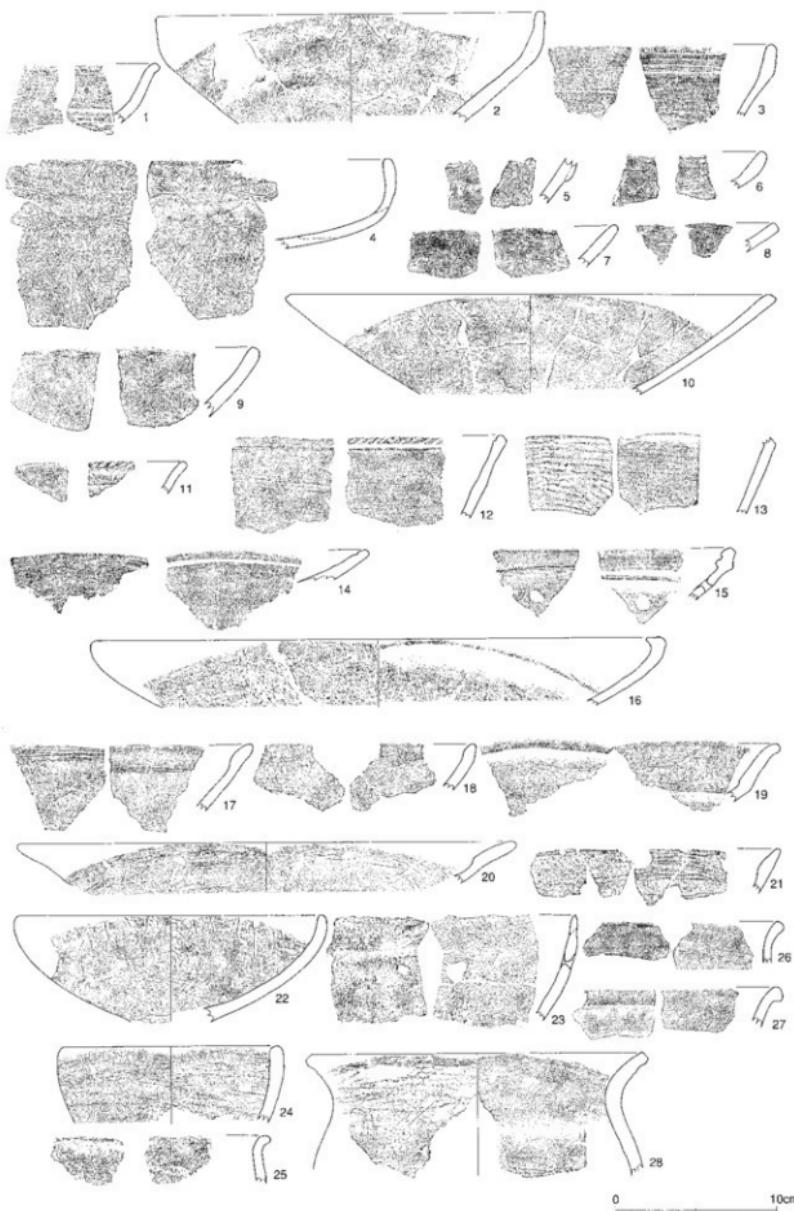
第10図 家の後I遺跡出土縄文土器2 (S=1/3)



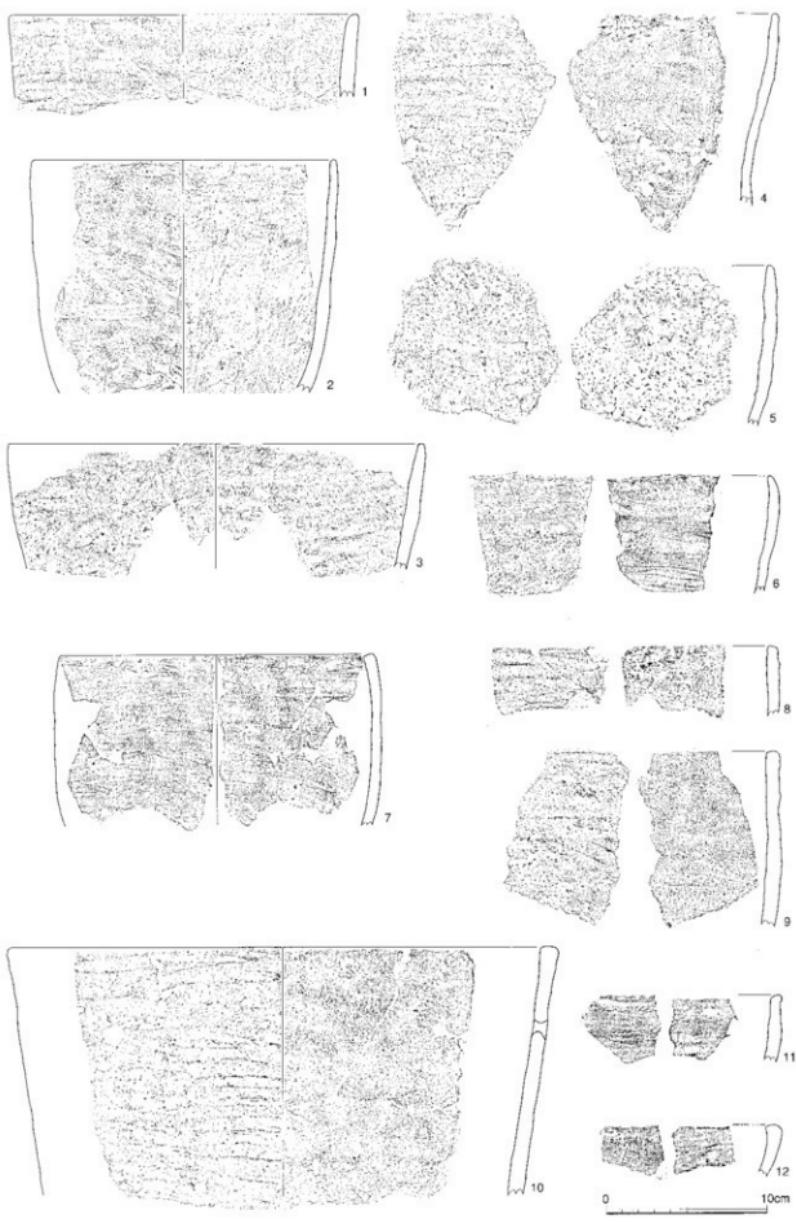
第11図 家の後I遺跡出土縄文土器3 (S=1/3)



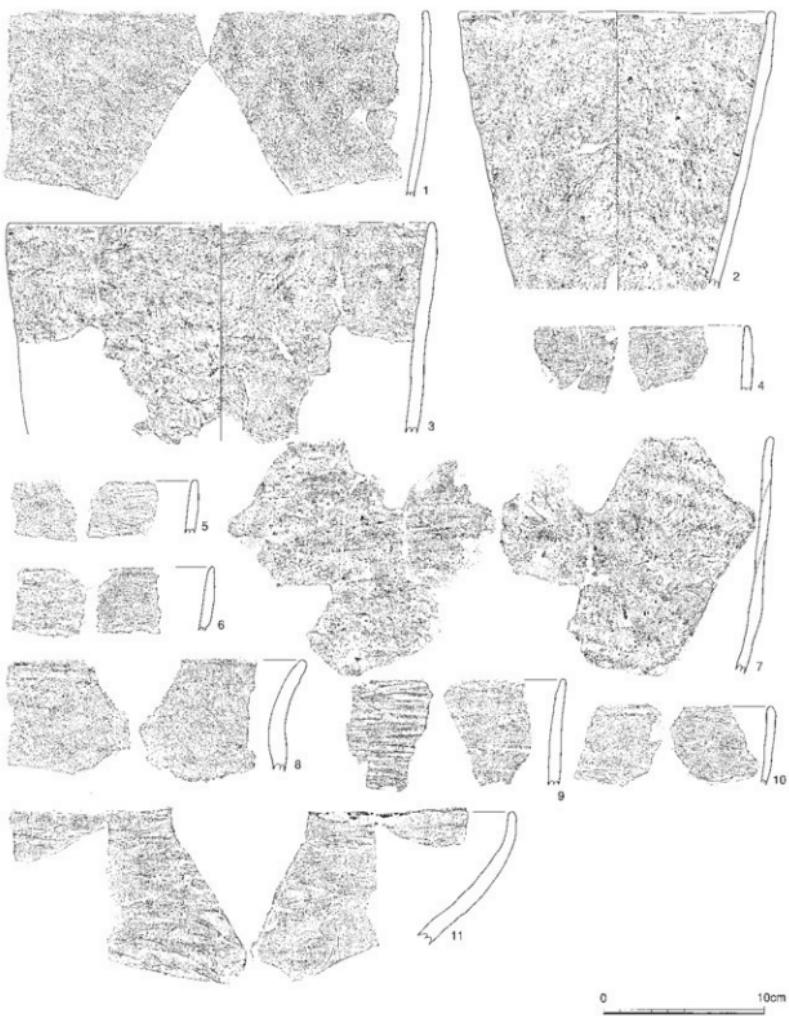
第12図 家の後I遺跡出土縄文土器4 (S=1/3)



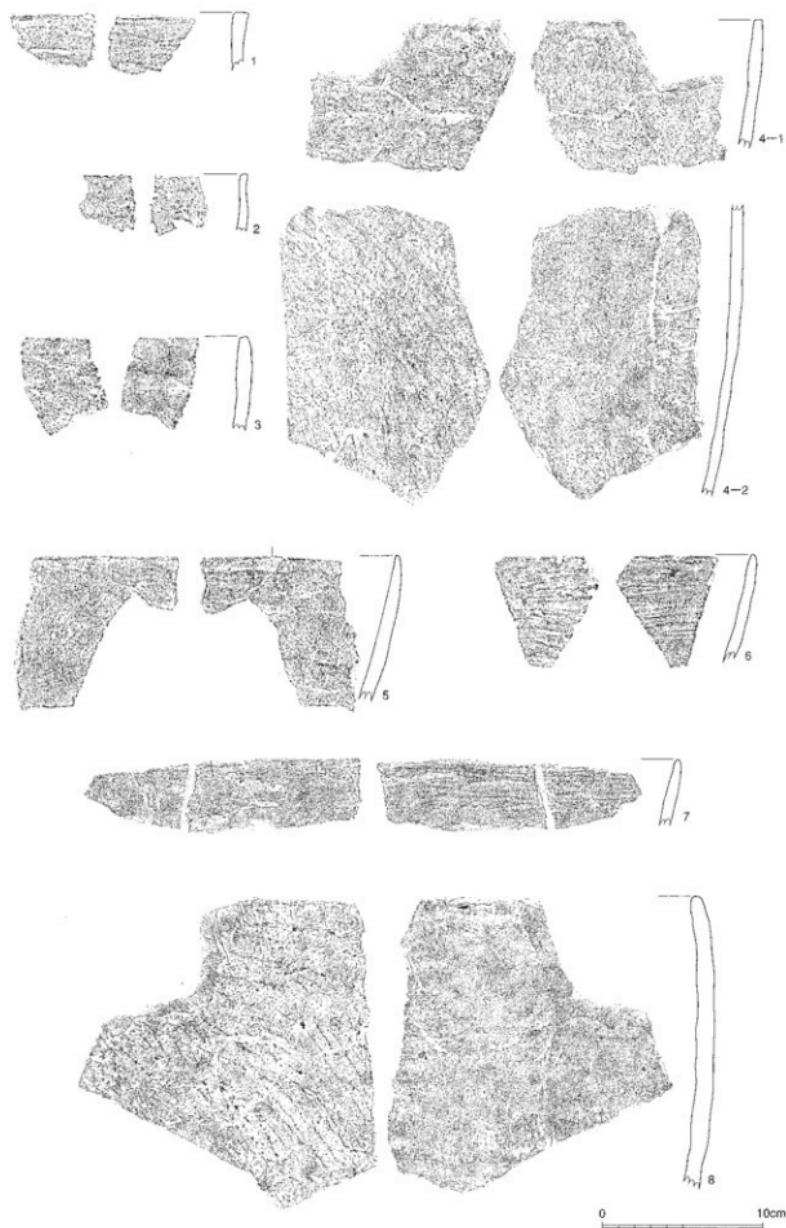
第13図 家の後I 遺跡出土縄文土器5 (S=1/3)



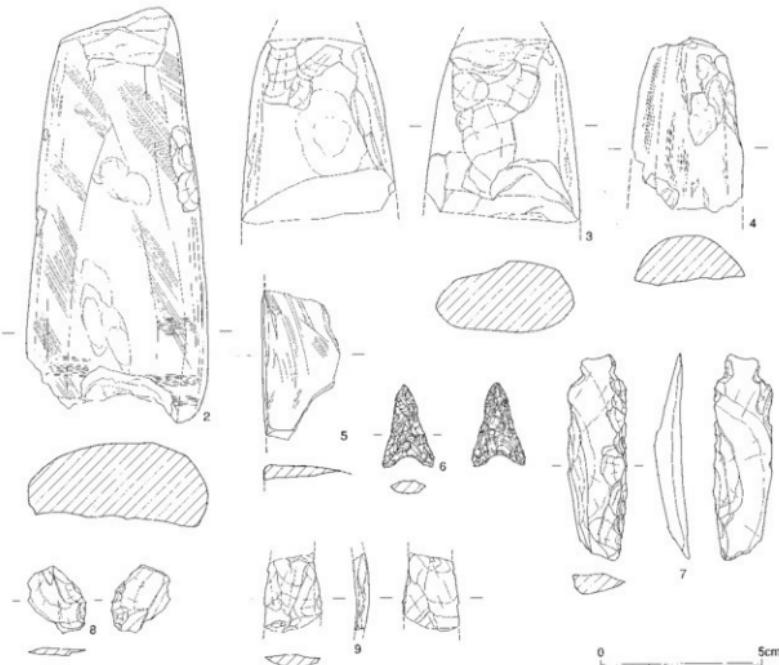
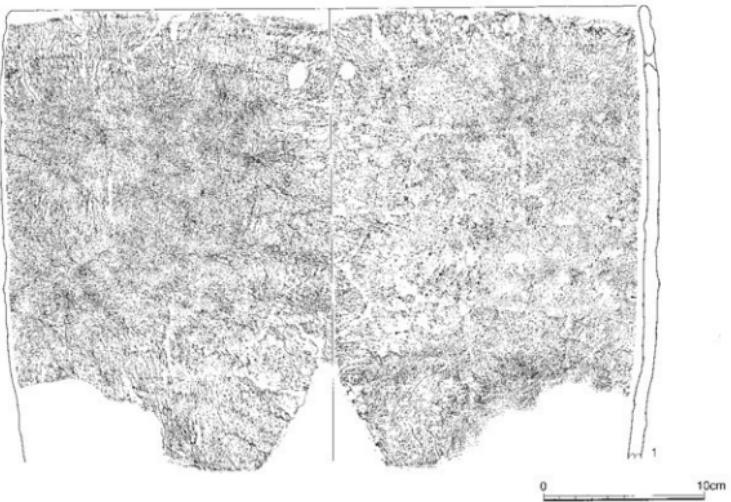
第14図 家の後I遺跡出土縄文土器6 (S=1/3)



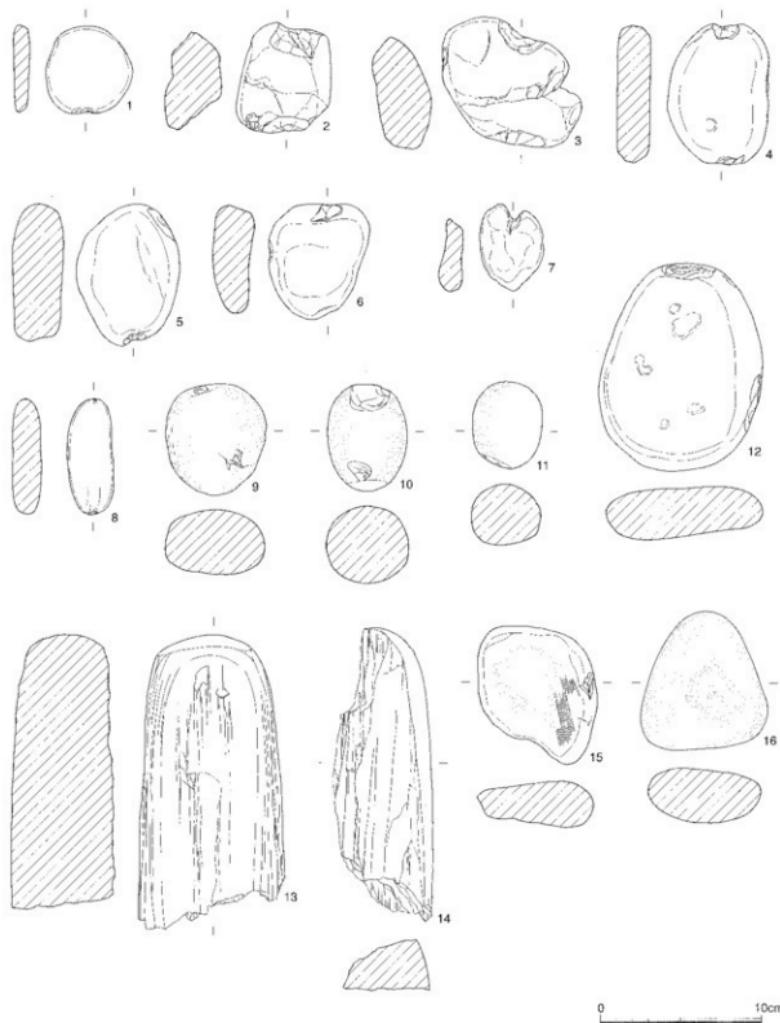
第15図 家の後I遺跡出土縄文土器7 (S=1/3)



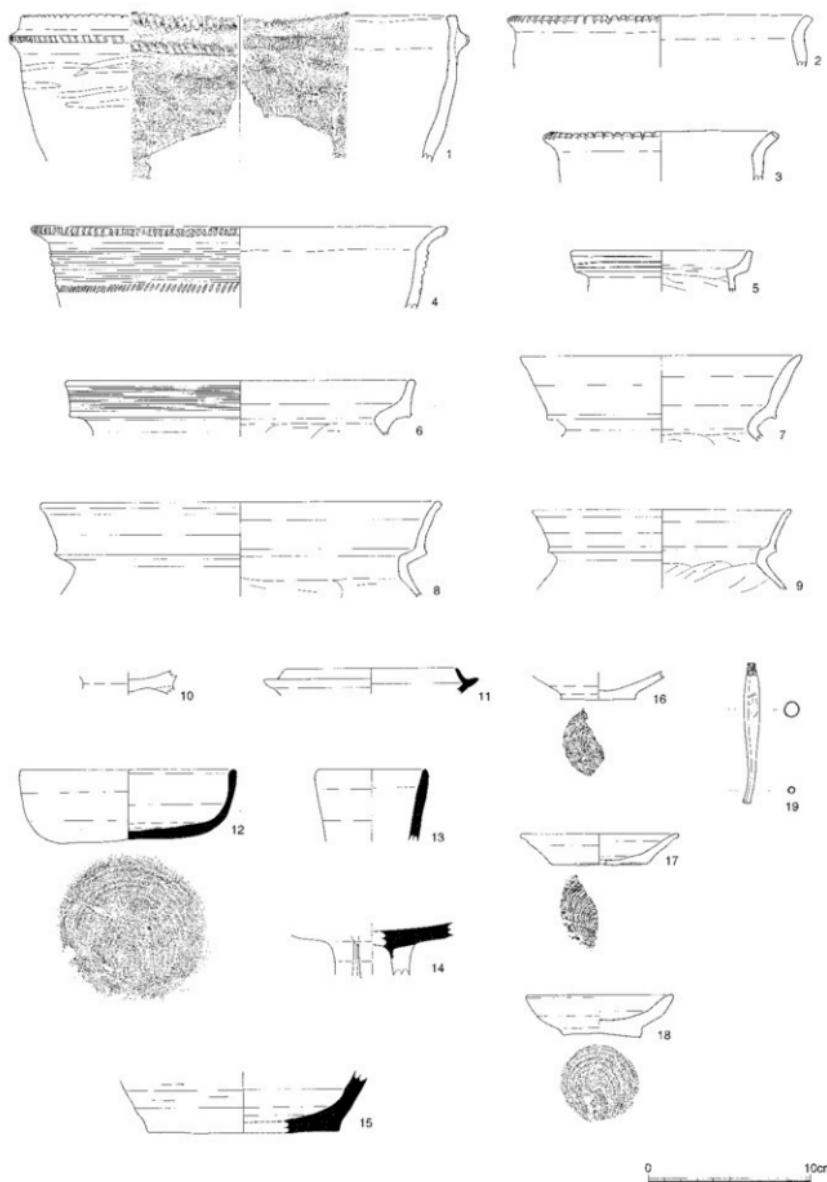
第16図 家の後I遺跡出土縄文土器8 (S=1/3)



第17図 家の後I遺跡出土繩文土器9・石巻1 (1はS=1/3、2~9はS=2/3)



第18図 家の後I遺跡出土石器2 (S=1/3)



第19図 家の後I遺跡出土編文時代以降の土器 (S=1/3)



第20図 家の後I遺跡出土銭 (S=1/1)

表2 家の後I遺跡出土土器観察表

擇出 番号	出 土地	出土位置	種類	縦幅	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色	調	内面の調整	外面の調整	形態・文様の特徴	備考
9 1 6 1区	2827	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナデ	縦文	船付空窓の一彫、横突文、縦文	船元2A	
9 2 6 1区	3166	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ナデ	ナテ面し、半弧竹管文、縦文	船元2A		
9 3 6 1区	3466	縦文	深鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	「家なナデ」 窓	窓	半弧竹管文、縦文	船元3	
9 4 6 1区	3159	縦文	深鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ヨコナデ	ナデ、押圧	押り糸、押圧後残り糸	船元2	
9 5 6 1区	1383	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナデ	ナデ	ななめの擦り糸	船元2	
9 6 6 1区	2706	縦文	深鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナデ、削る様 なナラ	ナデ	ななめ方向の細かい擦り糸	船元2	
9 7 6 1区	2699	縦文	深鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ	ナラ	擦り糸	船元2	
9 8 6 1区	2698	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡褐色 内: 淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	やや荒い擦り糸	船元2	
9 9 6 1区	1736	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡褐色 内: 淡黃褐色	ナデ	ナデ	比較的の丁寧な擦り糸	船元2	
9 10 6 1区	2559	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡黃褐色	ヨコナデ	ナラ	比較方向のやや重い擦り糸	船元2	
9 11 6 1区	2708	縦文	深鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ヨコナデ	ナラ	ななめ方向のやや重い擦り糸	船元2	
9 12 6 1区	1956	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ヨコナデ	ナラ	擦り糸	船元2	
9 13 6 1区	1324	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡褐色 内: 淡黃褐色	ナラ	ナラ	ななめの擦り糸	船元2	
9 14 6 1区	2436	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	擦り糸(横方向後一部強化)	船元2	
9 15 6 1区	2955.3419	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	擦り糸、凹痕	中津2・1	
9 16 6 1区	2179	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ヨコナデ後え ガキ	ヨコナデ	擦り糸、凹痕	中津2・1	
9 17 6 1区	3822	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ	ナラ	擦り糸、凹痕	中津2・1	
9 18 6 1区	2821	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ナラ	ナラ	縦溝縦文、凹痕	中津3	
9 19 6 1区	3709	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡褐色 内: 淡黃褐色	ナラ	ナラ	縦溝縦文、凹痕	中津3?	
9 20 6 1区	1777	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	縦文、半弧竹管文	松ノ木	
9 21 7 1区	3546椎	縦文	深鉢	34.8	-	-	-	全周: 淡褐色	ナデ	ナデ	口輪縁部の平坦面に真っ直ぐな凹痕とななめの凹痕が交互に並んでおり、内面に浅い溝や字モチーフがある	内面に炭化物付着、松ノ木	
9 22 6 1区	1109.3441	縦文	鉢?	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑色	ナデ	ナデ	凹痕文	引と開一側溝、松ノ木	
9 23 6 1区	3390	縦文	鉢?	-	-	-	-	全周: 淡褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	凹痕文、黒口の縦文、削削	松ノ木	
10 1 7 1区	3711	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ後しつか ミガキ	ナラ後しつか ミガキ	1)斜縁部の平坦面にミガキ、凹痕、横うねり、2)内面	1)斜縁部の平坦面にミガキ、凹痕、横うねり、2)内面	
10 2 7 1区	2694	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ後しつか ミガキ	ナラ後しつか ミガキ	1)斜縁部の平坦面にミガキ、凹痕、横うねり、2)内面	1)斜縁部の平坦面にミガキ、凹痕、横うねり、2)内面	
10 3 7 1区	2671	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ	ナラ	ナラ	松ノ木	
10 4 7 1区	270	縦文	鉢	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色	ナラ	ナラ	凹痕文2条	松ノ木	
10 5 7 1区	2679.3131	縦文	鉢?	-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ナラ後しつか ミガキ	ナラ後しつか ミガキ	凹痕文2条	松ノ木	
10 6 7 1区	2463	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 黑褐色	ナラ	ナラ	凹痕文	端ノ舟	
10 7 7 1区	432	縦文	鉢	-	-	-	-	全周: 淡黄褐色	ナラ	ナラ	凹痕文	端ノ舟	
10 8 7 1区	1527	縦文		24.0	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ナラ後ヨコミ ガキ	ナラ後ヨコミ ガキ	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	
10 9 7 1区	363	縦文		-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ナラ	ミガキ	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	
10 10 7 1区	3639	縦文		-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ヨコナデ	ヨコミガキ	凹痕文	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	
10 11 7 1区	3644	縦文		-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ナラ	ミガキ	凹痕文	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	
10 12 7 1区	3685	縦文		-	-	-	-	外: 淡黄褐色 内: 黑褐色	ナラ	ミガキ	凹痕文	1)斜縁部の平坦面に凹痕文を入れてからナラ	

10	13	8	I区	調文	鉢	15.1	-	-	全周：淡黄褐色 内：淡灰褐色	ヨコナデ	ナデ	口縁部に平凸部に凹部を有する。3条背筋とオーバー	帯勢
10	14	8	I区	3688他	調文	鉢	(23.5)	-	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	ナデ縦条痕、ナデ	ナデ	口縁部の平凸部に烈強を2条入れる。灰状紋、後方向の基痕、疑力筋の弱いものと前側の表面の上部がよりか軽柔	帯勢、内面に民化文化付着
11	1	9	Ⅱ区	670	調文	浅鉢	-	-	外：黒褐色 内：淡灰褐色	ナデ	ミガキ	底状の凹縫文、調文	西光
11	2	9	Ⅱ区	3502	調文	鉢?	-	-	全周：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹縫文と調文	口縫部、圓元
11	3	9	Ⅱ区	3846	調文	鉢?	-	-	全周：黒褐色	ナデ	ミガキ	四縫文	口縫、基、圓元?
11	4	9	Ⅱ区	2501	調文	鉢	-	-	外：黒褐色 内：淡灰褐色	ナデ	ミガキ	波状の西縫文、調文	口縫部、圓元
11	5	9	Ⅱ区	19	調文	鉢?	-	-	外：黒褐色 内：淡灰褐色	ナデ	ミガキ	握縫文、四縫内溝斜刺突	高崎 K2
11	6	9	Ⅱ区	3033	調文	-	-	-	全周：暗色	ヨコナデ	-	凹縫部に小さな筋目の透視	元住吉山1
11	7	9	Ⅱ区	589	調文	鉢	-	-	全周：淡灰褐色	ナデ	-	導出鉢文、I区内部透視	口縫部、四元
11	8	9	Ⅱ区	367	調文	浅鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ミガキ	凹縫内透視利光	那崎 K2
11	9	9	Ⅱ区	3359	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ミガキ	円縫文、凹縫内透視利光	那崎 K2
11	10	9	Ⅱ区	3107	調文	鉢?	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ナデ	口縫部に浅い凹縫内透視利光	口縫部、丸住吉山1
11	11	9	Ⅱ区	317	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	-	圓文、凹縫	圓元
11	12	9	Ⅱ区	2006	調文	鉢?	-	-	外：淡灰褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	握縫文、凹縫内透視利光	那崎 K2
11	13	9	Ⅱ区	1429	調文	鉢?	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ミガキ	握縫文と梅円断面の剥離、彌縫文	口縫部、那崎 K2
11	14	9	Ⅱ区	3354	調文	鉢?	-	-	外：黒褐色 内：淡灰褐色	ナデ	-	阿波の船だけ斜向、粗筋文、四縫内透視利光	口縫部、那崎 K2
11	15	9	Ⅱ区	1682	調文	鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡灰褐色	ミガキ	ミガキ	凹縫文、健状の透穴文、凹縫内透視利光	那崎 K2
11	16	9	Ⅱ区	919	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ナデ	凹縫文	那崎 K2
11	17	9	Ⅱ区	520	調文	鉢	-	-	外：淡青褐色 内：淡褐色	ヨコナデ	ミガキ	貝殻の腹側文	50、1165と同一個体、那崎 K2
11	18	9	Ⅱ区	45	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ミガキ	扇消風文	西光
11	19	9	Ⅱ区	5	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ナデ	圓文	四丸
11	20	9	Ⅱ区	1542	調文	鉢	-	-	全周：灰黑色	ナデ	ミガキ	深縫文（昔々見）、無筋キサト、一部赤色添付	口縫部、西平
11	21	9	Ⅱ区	682	調文	鉢	-	-	外：褐褐色 内：田面褐色	ナデ	-	-	西平
11	22	10	I区	1542	調文	浅鉢	-	-	外：褐褐色 内：正褐色	ナデ	-	凹縫文	口縫部
11	23	10	I区	2221	調文	-	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	馬秋の棒状工具による運搬痕	谷尻
11	24	10	Ⅲ区	3631	調文	鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	口縫部通常に骨質状工具での運搬	谷尻
11	25	10	Ⅲ区	2609	調文	鉢	-	-	外：淡褐色 内：褐色	ヨコナデ	-	後方向の尖削角質、ナデ	谷尻
11	26	9	Ⅳ区	1542	調文	鉢	-	-	外：褐褐色 内：正褐色	ナデ	-	足付舟形にキサモ	谷尻
12	1	10	I区	3713	調文	鉢?	-	-	全周：淡褐色	ヨコナデ	ミガキ	輪の連う2種の方孔	美術文
12	2	10	I区	898	調文	浅鉢	-	-	外：褐褐色 内：淡灰褐色	ナデ	ナデ	輪の連う2種の方孔	美術文
12	3	10	Ⅲ区	1957.3410	調文	深鉢	-	-	全周：淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、下 号ナデ後下 方孔	外側の一部に 深鉢	
12	4	10	Ⅲ区	3506	調文	-	-	-	外：黒褐色 内：淡褐色	ヨコミガキ	ナデ	口縫部は平底	-
12	5	10	Ⅲ区	893	調文	浅鉢	-	-	外：淡灰褐色 内：淡褐色	ヨコナデ	ミガキ	口縫部は平底、ミガキ	-
12	6	10	I区	2177	調文	深鉢	-	-	全周：淡黑色	ヨコミガキ	ナデ	ナデ後ココ ガタ、ナデ	口縫部は平底
12	7	10	Ⅲ区	1426	調文	深鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ヨコナデ	-	丁寧な目口ノ 方孔	-
12	8	10	Ⅲ区	400	調文	浅鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ナデ、赤底	口縫部には三日月形の刺痕、凹縫部に斜めのキサモ	-
12	9	10	Ⅲ区	195	調文	浅鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ナデ、赤底	口縫部には斜めのキサモ	-
12	10	10	Ⅲ区	1112番1	調文	鉢	-	-	外：黒褐色 内：赤褐色	ナデ	ナデ、赤底	口縫部に斜めのキサモ、(底)横縫	-
12	11	10	Ⅲ区	2969	調文	鉢?	-	-	全周：淡褐色	ヨコナデ	ナデ、ナデ	横方向の条痕	-
12	12	10	I区	3703	調文	深鉢	-	-	外：黒褐色 内：赤褐色	ナデ	-	横方向の条痕、斜めの条痕	-
12	13	10	Ⅲ区	1755	調文	深鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	-	横方向の条痕	-
12	14	10	Ⅲ区	3128	調文	鉢?	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	-	横方向の条痕	-
12	15	10	Ⅲ区	2656	調文	鉢?	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	-	横方向の条痕、ナデ	-
12	16	11	Ⅲ区	1612他	調文	深鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ミガキ	ナデ	内面に灰化物	-
13	1	11	I区	2211	調文	鉢	-	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ヨコナデ	ミガキ	豊いナデ後 方孔	口縫部ミガキ
13	2	11	I区	2514.3522	調文	鉢	24.2	-	外：淡褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ後 方孔	ナデ、ナデ後 方孔	-
13	3	11	Ⅲ区	2768	調文	鉢	-	-	全周：淡褐色	ナデ	ミガキ	沈縫、ミガキ	-

13	4	11	I 区	288	縦文	計?	—	—	外: 淡黄褐色 内: 淡褐色		ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	内部に赤色斑 跡
									外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色			
13	5	11	Ⅲ区	1977	縦文	浅鉢?	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	
13	6	11	I 区	2218	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	
13	7	11	Ⅲ区	3836	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	
13	8	11	I 区	2685	縦文	鉢?	—	—	全體: 淡褐色	全體: 淡褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	
13	9	11	I 区	2241	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡褐色	全體: 淡褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	
13	10	11	I 区	3396.3397	縦文	浅鉢	30.4	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコの上革な いガキ	ヨコの上革な いガキ	口輪端部ミガキ
13	11	11	Ⅲ区	1409	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	内部の一部に 黒
13	12	11	I 区	2275	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部内側な いキ
13	13	11	Ⅲ区	3910	縦文	浅鉢?	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコの具設楽 他
13	14	11	Ⅲ区	2005	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部内側に凹線支 条
13	15	11	I 区	不明	縦文	方形鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部内側に凹線支 条、その下瓦孔移動?
13	16	12	Ⅲ区	1830	縦文	浅鉢	35.6	—	全體: 黑褐色	全體: 黑褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部は平周
13	17	12	Ⅲ区	1980	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部が肥厚
13	18	12	I 区	3763.3784	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	19	12	I 区	2029	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	20	12	I 区	2063.2215	縦文	鉢	(30.9)	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪端部内側に凹線支 条
13	21	12	Ⅲ区	2975.3143	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	外側の一部に 黒
13	22	12	I 区	2196.3312	縦文	浅鉢	19.4	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	外側の一部に 黒
13	23	12	I 区	2363	縦文	浅鉢	—	—	全體: 黑褐色	全體: 黑褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	ナダ、被膜 空孔
13	24	12	I 区	2663	縦文	鉢?	—	—	全體: 褐褐色	全體: 褐褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	25	12	I 区	3433	縦文	浅鉢?	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	26	12	I 区	3344	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	27	12	I 区	2065	縦文	鉢?	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
13	28	12	Ⅲ区	2478.2473	縦文	鉢?	—	—	全體: 淡褐色	全體: 淡褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	
14	1	12	I 区	2660.2518	縦文	浅鉢	20.3	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	2	12	I 区	3663.3664	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	3	12	Ⅲ区	2962.3483	縦文	浅鉢	25.6	—	全體: 淡褐色	全體: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	4	12	Ⅲ区	1105	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	5	12	I 区	2234	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	6	12	Ⅲ区	3198	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	7	13	I 区	1750.1656	縦文	鉢	19.4	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	8	12	Ⅲ区	3844.3883	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	9	13			縦文	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	口輪部	
14	10	13	I 区	3565	縦文	浅鉢	33.6	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	11	13	I 区	2395	縦文	鉢?	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
14	12	13	Ⅲ区	296	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	1	13	Ⅲ区	2750	縦文	浅鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	2	13	I 区	3402	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	3	13	Ⅲ区	984.985. 986	縦文	浅鉢	(26.4)	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	外側の一部に 黒化付着、残 存1/6
15	4	13	Ⅲ区	2829	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	5	13	Ⅲ区	2269	縦文	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ヨコナダ、ナ ミガキ	ヨコナダ、ナ ミガキ	口輪部	
15	6	13	Ⅲ区	3244	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	7	13	Ⅲ区	1611.1621	縦文	浅鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	8	13	Ⅲ区	2082	縦文	鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	9	13	Ⅲ区	—	縦文	深鉢	—	—	外: 淡黃褐色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部
15	10	13	Ⅲ区	912	縦文	鉢	—	—	全體: 淡黃褐色	全體: 淡黃褐色	ナダ	ナダ	口輪部、外側 約1/4
15	11	13	I 区	3288.3291. 3794.3799	縦文	鉢	—	—	外: 黑色 内: 淡褐色	内: 淡褐色	ナダ	ナダ	口輪部

16	1	14	Ⅲ区	2086	縦文	深鉢	-	-	外: 水滴色 内: 深赤褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平塗	口縫部	
26	2	14	Ⅲ区	76	縦文	鉢?	-	-	外: 赤褐色 内: 深赤褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平塗	口縫部	
16	3	14	I区	2232, 2233	縦文	深鉢	-	-	外: 黑褐色 内: 深褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平塗	口縫部	
16	4~1.	14			縦文	深鉢	-	(7.9)	金型: 深赤褐色 内: 深褐色	丁寧なコナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平塗	回転体、外側に捺印有り	
16	4~2.	14			縦文	深鉢	-	(7.9)	金型: 深赤褐色 内: 深褐色	比較的丁寧なコナデ	ヨコナデ	粗製	回転体、外側に捺印有り	
16	5	14	Ⅳ区	2067, 3084	縦文	鉢	-	-	全面: 深赤褐色	やや荒いヨコナデ、ヨコナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	粗製	口縫部	
16	6	14	Ⅲ区	3370	縦文	深鉢	-	-	全面: 深赤褐色	やや荒いヨコナデ	ヨコナデ	粗製	口縫部	
16	7	14	I区	1186	縦文	鉢	-	-	全面: 黒褐色	ナデ後: エタニティマークナデ	ナデ	粗製	外側の一部に捺印有り、口縫部	
16	8	14	Ⅱ区	3861, 3863, 3864, 3865	縦文	深鉢	-	-	全面: 深黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	粗製、口縁端部は平塗	I区縫部	
17	1	14	Ⅲ区	1091他	縦文	深鉢	39.4	-	全面: 深黒褐色	ナデ後: エタニティマークナデ	ナデ	粗製	1062, 1079~ 1080, 1089~ 1091, 1094, 1279	
19	1	16	I区	3568, 3409	縦文	深鉢	28.4	-	外: 深褐色 内: 深赤褐色	ヨコナデ、強 いナデ	ナデ、ミガキ	口縫端部はキザ、口縫 下は突起を付ける複式工具 突起等		
19	2	16	I区	3500	弥生	鉢	(18.0)	-	全面: 深赤褐色	ヨコナデ、ナ デ	ナデ	口縫端部はヘラ状工具を 用いたキザ		
19	3	16	I区	3500	弥生	鉢	14.6	-	外: 深赤褐色 内: 深褐色	ヨコナデ、ナ デ	ナデ	I区縫部はヘラ状工具を 用いたキザ		
19	4	16	I区	792	弥生	鉢	25.7	-	外: 深赤褐色 内: 深褐色	ヨコナデ、ナ デ	ナデ	口縫端部はヘラ状工具を 用いたキザ、面部凹部 入り毛、明瞭な突起		
19	5	16	Ⅲ区	3256	弥生	鉢	10.8	-	全面: 深赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縫部ヘラ状工具による 削除		
19	6	16	Ⅲ区	2384	弥生	鉢	21.5	-	全面: 深褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縫部に擬円縫文		
19	7	16	Ⅲ区	3925	弥生	鉢	17.3	-	外: 深褐色 内: 深褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外側の一部に 削除		
19	8	16			弥生	鉢	24.4	-	外: 深褐色 内: 深褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縫端部は平塗にナデ		
19	9	16	I区	791	弥生	鉢	16.0	-	全面: 深赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ			
19	10	16	Ⅲ区	1665	弥生	直輪形	-	-	外: 深褐色 内: 深褐色	ナデ	ナデ	舞台は後からナタつけ		
19	11	16	I区	2865	彌生器	环身	10.6	-	全面: 深褐色	ナデ	ナデ			
19	12	16	I区	3266, 3102	彌生器	环身	13.2	4.5	全面: 深褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部圓軸系切		
19	13	16	I区	2163	須恵器	直口壺	6.6	-	全面: 水白色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縫部円面に 凹凸有		
19	14	16	I区	1350	須恵器	高輪	-	-	全面: 水白色	ヨコナデ、ナ デ、スカリ	ヨコナデ、ナ デ、スカリ	透かし有り		
19	15	16			須恵器	高輪	-	-	9.8	全面: 水白色	ヨコナデ	透かし有り		
19	16	16	Ⅲ区	1900	土師器	直	-	-	4.6	全面: 深褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部圓軸系切	
19	17	16	I区	2563	土師器	直	9.8	1.9	5.7	全面: 深褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部圓軸系切	
19	18	16	Ⅲ区	3934	土師器	直	9.0	2.7	4.8	全面: 深褐色	ナデ	ナデ	底部圓軸系切	
19	19	16	Ⅲ区		研磨	研磨	8.7	1.4	1.0	全面: 深褐色	ナデ	ナデ	丸のような筋の船	丸筋製 7.18~ 19世紀

表3 家の後I遺跡出土打製、磨製石製品観察表

種別	遺物番号	写真番号	台帳番号	種別	調査区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
17	2	15	1	磨製石斧	I区	(12.80)	5.60	(2.60)	283.74	流紋岩	乳棒状石斧の破片で約1/2が残る。刃部欠損。
17	3	15	2	磨製石斧	Ⅲ区	(5.60)	4.80	2.20	109.48	堆積岩	乳棒状石斧残片で、約1/3が残る。刃部欠損。
17	4	15	3	磨製石斧	Ⅲ区	(5.30)	3.40	(1.50)	35.59		乳棒状石斧残片で、約1/6が残る。刃部欠損。
17	5	15	4	砥石	Ⅲ区	(4.60)	(2.40)	(0.40)	8.14		乳白色の砥石片。

表4 家の後I遺跡出土剥片石器、二次加工剥片、洞片観察表

種別	遺物番号	写真番号	台帳番号	種別	調査区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
17	6	15	1	石鏃	I区	6.27	1.81	0.84	11.20	安山岩	複形で一辺のみ刃を付けている。
17	7	15	2	石鏃	I区	(2.32)	1.78	0.51	2.46	安山岩	複形で欠損。
17	9	15	3	楔形石器	Ⅲ区	2.18	1.49	0.28	1.06	安山岩	洞部は欠損。分析 No.80584
17	8	15	4	二次加工剥片	Ⅲ区	2.60	2.03	0.41	1.73	安山岩	石器製作途上で割れたものか。
			5	二次加工剥片	Ⅲ区	-	2.15	1.09	0.78	安山岩	
			6	二次加工剥片	-	-	-	-	-		

			7	二次加工剥片	I 区	14.32	14.18	1.92	170.23	安山岩	板状剥片素材から剥片を有する程度採った後の大形の残片。厚さの薄い一辺に連続した削離痕があるが、刃部として調整されたものかは不明。
			8	剥片	I 区	2.05	1.79	0.69	0.87	黒曜石	
			9	剥片	I 区	2.83	0.99	0.68	1.84	黒曜石	
			10	剥片	I 区	1.60	1.30	0.15	0.35	黒曜石	
			11	剥片	I 区	2.87	1.05	0.84	2.28	黒曜石	
			12	剥片	I 区	2.75	1.00	0.37	1.07	黒曜石	
			13	剥片	I 区	1.68	0.94	0.20	0.35	黒曜石	
			14	剥片	—	1.60	1.49	0.42	0.89	黒曜石	
			15	剥片	—	3.27	1.33	1.13	3.25	黒曜石	
			16	剥片	I 区	2.36	1.42	0.32	1.21	安山岩	
			17	剥片	I 区	2.68	1.86	0.58	2.53	安山岩	
			18	剥片	I 区	3.65	2.87	1.00	7.92	安山岩	
			19	剥片	I 区	2.74	1.80	0.28	1.52	安山岩	
			20	剥片	I 区	3.14	2.00	0.36	2.11	安山岩	
			21	剥片	I 区	3.14	2.53	0.36	3.43	安山岩	
			22	剥片	I 区	2.05	1.08	0.16	0.58	安山岩	
			23	剥片	I 区	3.47	1.94	0.25	2.31	安山岩	
			24	剥片	I 区	3.75	1.94	0.25	2.31	安山岩	
			25	剥片	II 区	2.30	2.02	0.33	1.72	安山岩	
			26	剥片	II 区	3.02	2.13	0.36	2.87	安山岩	
			27	剥片	II 区	2.56	1.47	0.59	2.93	安山岩	分析 No.80585
			28	剥片	III 区	8.53	3.12	0.43	15.88	安山岩	
			29	剥片	III 区	2.62	2.31	0.26	1.78	安山岩	
			30	剥片	III 区	3.54	1.64	0.41	2.48	安山岩	
			31	剥片	III 区	3.34	1.22	0.36	1.45	安山岩	
			32	剥片	III 区	1.46	0.92	0.13	0.27	安山岩	
			33	剥片	III 区	1.92	1.83	0.18	0.73	安山岩	
			34	剥片	III 区	2.55	1.43	0.45	1.67	安山岩	
			35	剥片	III 区	1.95	0.92	0.16	0.26	安山岩	
			36	剥片	T 区	2.55	1.84	0.82	3.92	瑪瑙	一部を残して変色しており、熱を受けた可能性がある。

表5 家の後I遺跡出土礫石器観察表

辨認番号	遺物番号	写真図版	台帳番号	種別	調査区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
18	13	15	1	製石	Ⅲ区	2793	17.80	9.05	6.09	1,600	棒状の柱化木で一端に擦痕が残る
18	14	15	2	磨石		S2	18.00	5.80	4.43	570	棒状の柱化木で一端に擦痕が残る。約1/4が残る
			3	—	Ⅲ区	550	4.33	3.07	1.99	300	
			4	—	Ⅲ区	2419	8.33	3.52	2.31	110	
18	10	15	5	磨石	I 区	2930	6.68	4.95	4.02	190	両端に磨痕および剥離痕
18	8	15	6	磨石	I 区		7.05	2.78	1.60	55	一端に磨痕
18	15	15	7	磨石	I 区	1739	8.12	7.24	2.83	245	片面に擦痕
18	16	15	8	磨石	I 区	2372	8.45	7.61	3.49	350	片面に擦痕
18	11	15	9	磨石	II 区		5.32	4.33	3.89	130	両端に磨痕
18	12	15	10	磨石		89	12.82	10.01	3.78	800	両面に擦痕、一端に磨痕
18	9	15	11	敲石	II 区	1523	6.73	6.09	3.32	220	一端に磨痕、3カ所に剥離痕

表6 家の後I遺跡出土銭觀察表

辨認番号	遺物番号	写真図版	地区	名称	寸法						重量	初鑄年代	
					a	b	c	d	e	f			
1			Ⅲ区 No.3247	皇宋通宝		(2.43)			1.94		0.85	0.13	1.63 ^{**} 1098年
2			Ⅲ区 No.3316	元祐通宝	(2.35)	(2.32)	1.98	(1.99)	0.85	0.84	0.14	2.18	1094年
3			II 区表土	寛永通宝	(2.28)	(2.26)	1.92	1.94	0.72	0.64	0.12	1.58	17末~18世纪

** 小破片を含む

出土銭は3点が出土している。11世紀代初期の2点は腐食が著しく、出土時にも若干破損した。

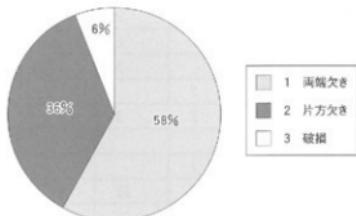
表7 家の後I遺跡出土石錘観察表

探査番号	遺物番号	写真図版番号	台帳番号	種別	形態	調査区	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
		1	石錘	2	Ⅲ区		804	6.64	4.47	2.09	80	
		2	石錘	1	Ⅱ区		1522	6.42	4.67	2.07	100	
		3	石錘	1	Ⅰ区		1731	6.33	4.37	1.82	80	
		4	石錘	1	Ⅰ区		1716	5.58	4.38	1.69	64	
		5	石錘	1	Ⅱ区		1526	7.96	7.12	2.35	200	
		6	石錘	1	Ⅱ区		2938	7.34	3.75	1.20	54	
		7	石錘	1	Ⅲ区		2586	9.11	4.99	1.85	119	
		8	石錘	1	Ⅲ区		805	6.90	6.35	2.30	160	
		9	石錘	1	Ⅱ区		1525	8.14	7.93	1.55	134	
		10	石錘	1	Ⅰ区		2339	8.09	6.93	2.78	239	
		11	石錘	1	Ⅲ区		1767	6.75	3.79	2.37	73	
		12	石錘	1	Ⅱ区		1425	5.98	4.41	1.41	61	
		13	石錘	1	Ⅱ区		2873	7.51	4.98	2.10	102	
		14	石錘	3	Ⅱ区		3040	4.33	(3.89)	1.80	54	
		15	石錘	1	Ⅲ区		1675	5.85	4.50	1.25	59	
		16	石錘	1	Ⅰ区		2684	7.09	7.95	1.81	150	
18	2	15	17	石錘	1	Ⅲ区	2063	6.72	5.60	3.10	169	
		18	石錘	1	Ⅲ区		2587	8.91	5.14	1.55	130	
		19	石錘	1	Ⅱ区			6.56	5.38	1.97	100	
18	1	15	20	石錘	2	Ⅰ区		5.45	5.26	1.00	54	
		21	石錘	1	—			10.05	9.90	4.47	560	
		22	石錘	2	Ⅰ区		2680	5.44	4.99	2.51	70	
18	7	15	23	石錘	2	Ⅰ区	3097	5.28	3.96	1.80	54	
18	3	15	24	石錘	1	Ⅰ区	2683	7.93	9.53	4.52	365	
		25	石錘	2	Ⅰ区		2371	5.46	5.11	2.51	100	
		26	石錘	2	Ⅰ区		3762	5.28	5.45	1.65	70	
		27	石錘	2	Ⅲ区		2651	6.19	4.48	2.62	95	
		28	石錘	2	Ⅱ区		2717	13.57	9.62	5.64	980	
		29	石錘	2	Ⅱ区			6.33	6.21	2.95	175	
		30	石錘	2	—			4.65	5.76	1.84	65	
		31	石錘	2	—			4.20	5.95	1.97	80	
18	6	15	32	石錘	2	Ⅱ区		7.02	5.96	2.64	170	
		33	石錘	3	Ⅲ区		2653	6.12	(6.61)	1.94	125	
		34	石錘	1	Ⅰ区			7.80	6.38	2.35	180	
18	4	15	35	石錘	1	—		8.55	6.13	2.36	225	
18	5	15	36	石錘	2	—		8.65	6.31	2.85	235	
		37	石錘	3	—			6.81	4.72	1.35	45	

形態欄凡例

- 1両端欠き
- 2片方欠き
- 3破損

グラフ1 家の後I遺跡出土石錘形態別割合



グラフ2 家の後I遺跡出土石錘重量別分布

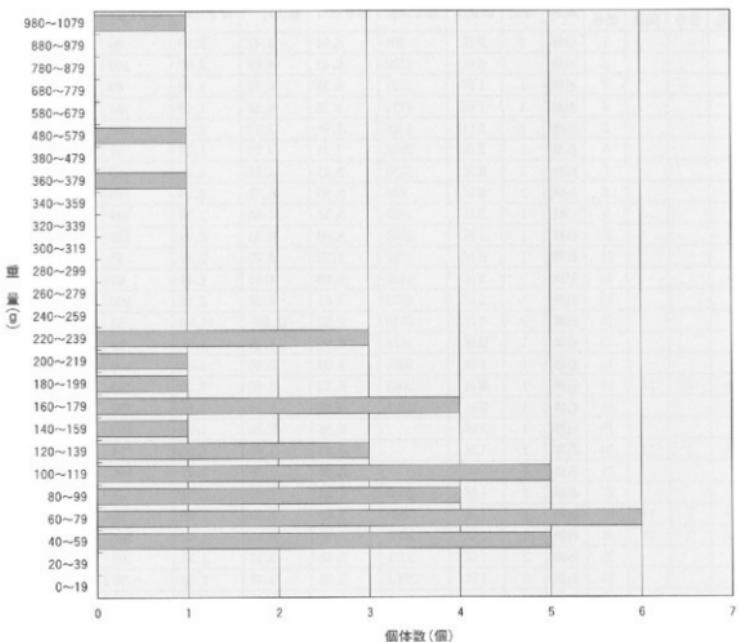


表8 家の後I遺跡出土石錘観察表

	時期	器種	I区	II区	III区	表採	計
赤生土器・古式土師器	前期	壺		1	2		3
	中期	壺・壺	1		1		2
	中～後期	底		1			1
	後期	低脚壺			1		1
	後期末	壺			1		1
	古式土師器	小片	8	1	6		15
	不明	小片	4		3		7
土師器	前期	壺類		1	2	3	6
	7世紀～	壺類	1		1		2
	7世紀～	底部糸切りの壺	2		5		7
須恵器	前期	壺類	2	2			4
	7世紀～	壺類	3	2	3	1	9
	7世紀～	壺類	2			1	3
	不明			1			1
製塙土器			3	6	13		22
備前	近世	すり鉢	1	1			2
陶器	18世紀以降	在地系	1			1	2



家の後 I 通跡調査前風景（北東から）



調査風景

図版 2



調査後空撮（南西から）



調査後空撮（北西から）



調査後近景（東から）



三瓶太平山降下火山灰検出状況

図版4



II区セクション



繩文土器出土状況

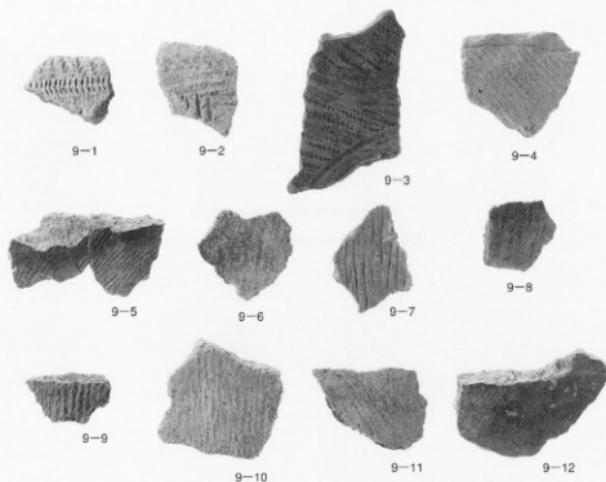


C 層繩文土器出土状況（東から）

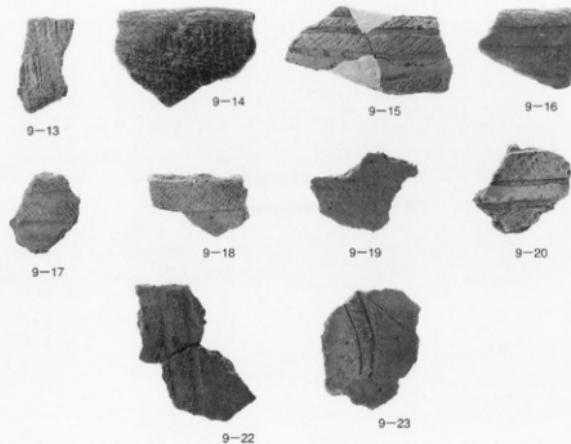


粗製深鉢出土状況

图版 6



包含层出土绳文土器 1



包含层出土绳文土器 2

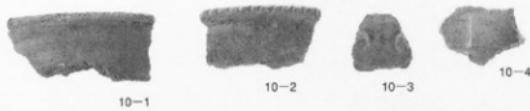


9-21



9-21

包含層出土繩文土器 3



10-1

10-2

10-3

10-4



10-5

10-6

10-7

10-8



10-9

10-10

10-11

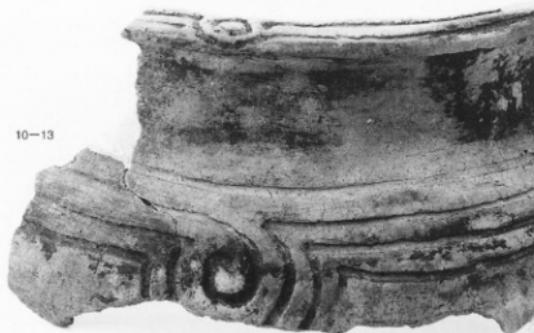
10-12

包含層出土繩文土器 4

図版 8



10-13



10-13

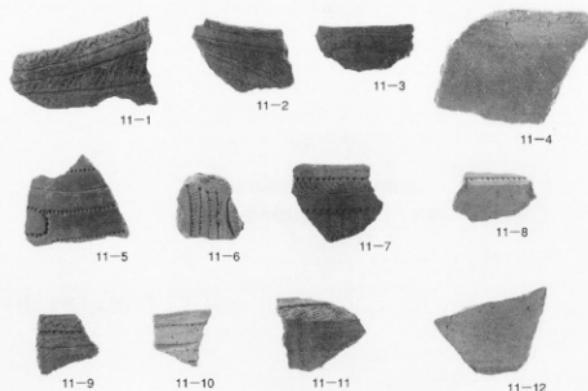


10-14

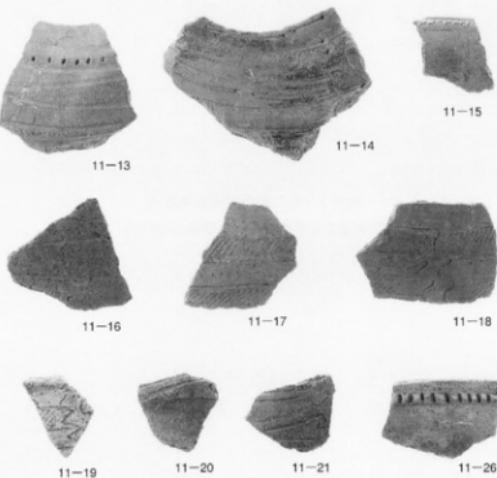


10-14

包含層出土縄文土器 5

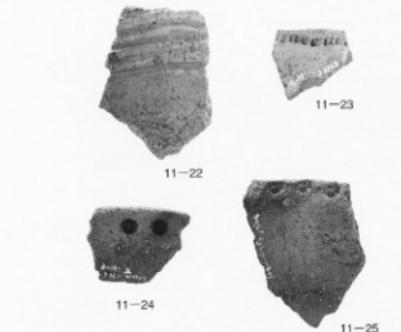


包含層出土繩文土器 6

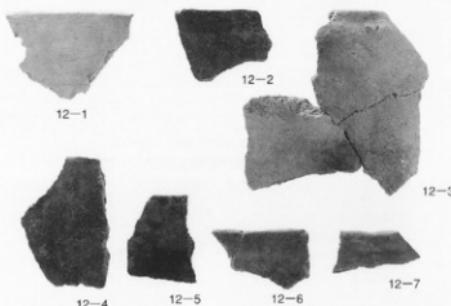


包含層出土繩文土器 7

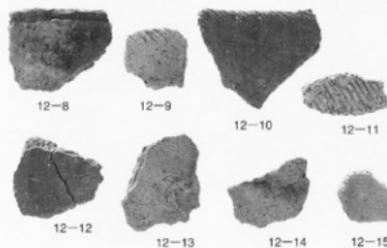
図版 10



包含層出土縄文土器 8



包含層出土縄文土器 9

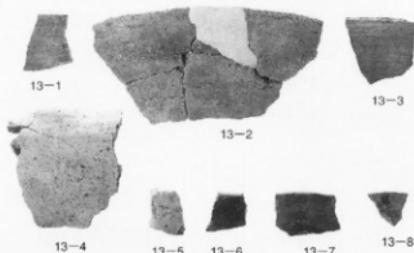


包含層出土縄文土器 10

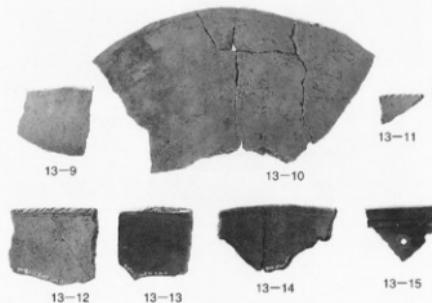


12-16

包含層出土繩文土器11

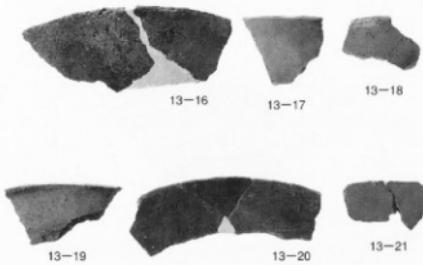


包含層出土繩文土器12

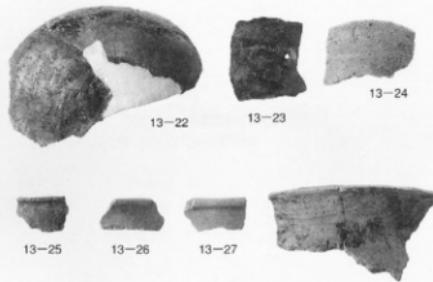


包含層出土繩文土器13

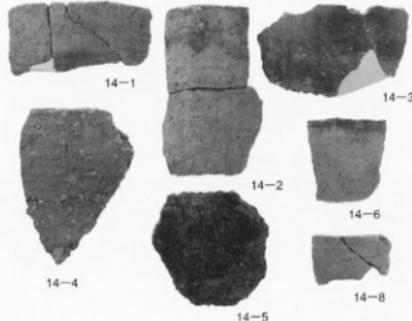
圖版 12



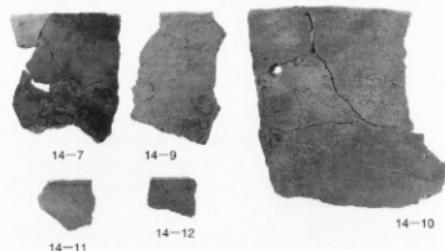
包含層出土繩文土器14



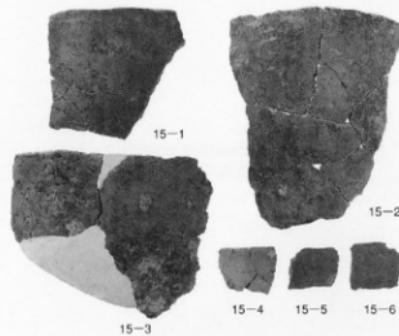
包含層出土繩文土器15



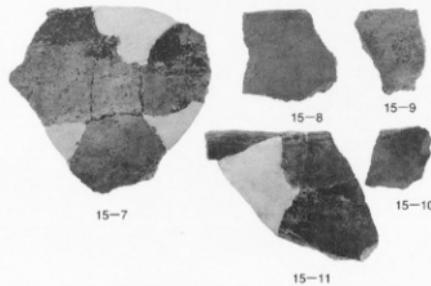
包含層出土繩文土器16



包含層出土繩文土器17

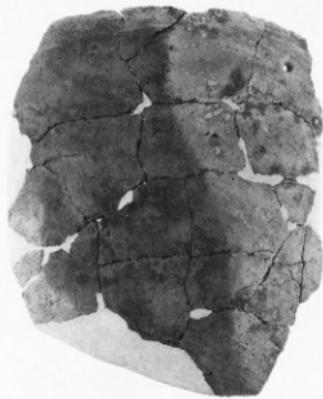
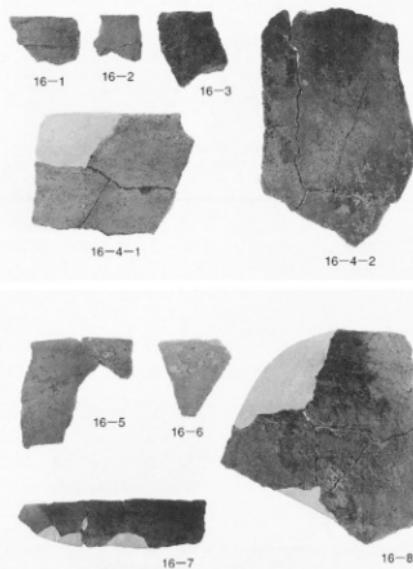


包含層出土繩文土器18



包含層出土繩文土器19

圖版 14



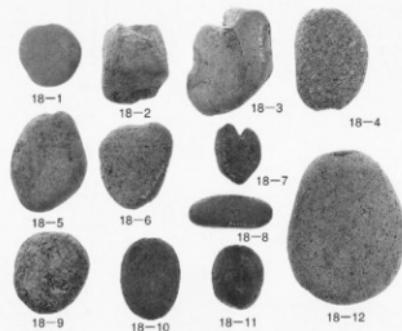
17-1

包含層出土繩文土器20

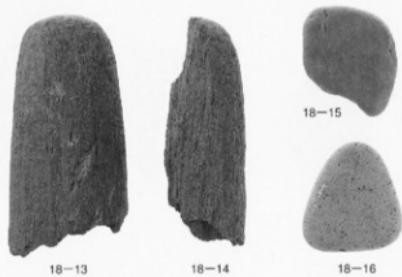
図版 15



包含層出土石器 1

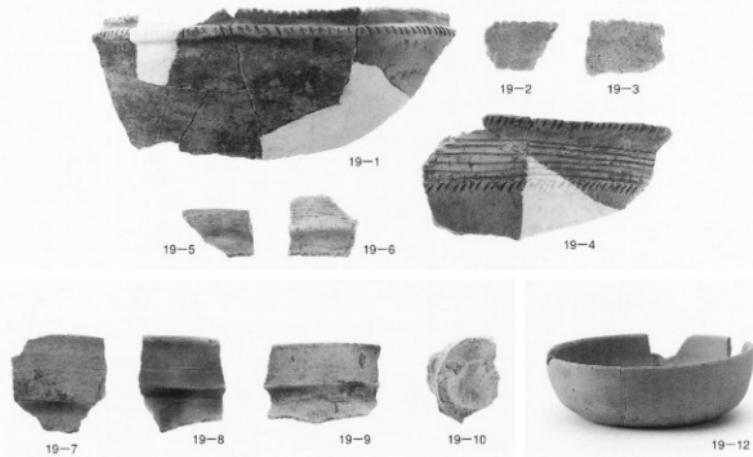


包含層出土石器 2

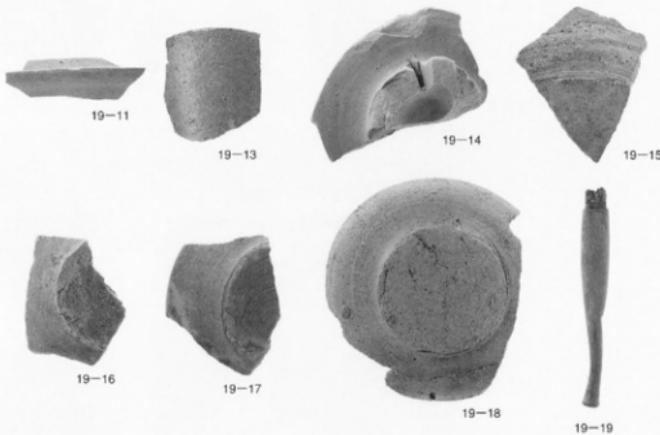


包含層出土石器 3

圖版 16



包含層出土繩文土器・弥生土器・須恵器



包含層出土須恵器・土師質土器・煙管

垣ノ内遺跡

第3章 垣ノ内遺跡

第1節 調査の経過と概要

垣ノ内遺跡は鳥取県大原郡本次町大字北原字門に位置する遺跡である。斐伊川が北西から南西へと大きく流れを変える北原は、広大な河岸段丘を擁し、古くから集落が営まれてきた。この付近の集落は斐伊川左岸の河岸段丘に広がる北原地区、斐伊川右岸に位置する川平地区、斐伊川右岸に注ぐ支流沿いの山方地区、尾白地区、下布施地区、法印地区などに分かれている。支流の中で最も水量が豊富で谷の広い下布施地区は、斐伊川本流との合流点から上流数キロにわたって水田が広がっている。

垣ノ内遺跡は合流点から約500m遡った地点に位置し、下布施川がさらに支流と分岐する場所に形成された緩傾斜地である。調査時の土層観察では、背後の山から流れ込んできた土砂よりも下布施川によって運ばれてきた土砂が多く、扇状地に似た過程を経て形成されたようだ。それゆえ水はけが非常に良く、堆積土も非常に厚い。南向きの日当りの良い傾斜地で、調査前には5～6段の水田が広がり、山裾には納屋を備えた屋敷が建っていた。(図版17) また、背後の山には山道のがびており、愛宕神社(愛宕さん)が祀られていた⁴¹。毎年7月23日夜には、多くの参拝者のもと神事が執り行われたそうである。ダム建設に伴って愛宕神社は移されたが、沢山の灯籠を吊り下げたという大木が山頂の平坦面に鎮座している⁴²。この場所は平成13年度に本次町教育委員会によってトレンチ調査され、弥生土器が數片出土している。

垣ノ内遺跡の発掘調査は、平成11年度の範囲確認調査を受けて、平成12年4月から開始した。まず水田の最上段から3段目までの表土掘削を行い、調査の進行に合わせて下段へと拡張した。調査に際し、調査区A～D区を設定した。5月に入りSI01、07が検出されると、次々と竪穴住居が検出されはじめた。5月末にはSB04～SB05とSI03を検出した。6月中旬は雨の合間を縫って、AKDD、AYD1の土器滲りを検出、加工段2上の土器滲りが姿を現した。包含層の厚さはA区で1mを越え、重機掘削を併用しながら掘り下げた。7月からは順次調査区を拡張し、8月4日には第1回の調査指導会を行った。

8月、9月は各遺構を精査しつつ、拡張部分の掘り下げに費やされた。遺構の出土状況から調査区のさらに山側の平端部(屋敷跡地)にも遺跡が広がる可能性が高まったため、重機併用で全長8mのトレンチを設定した。その結果、後世の擾乱が多いものの、包含層の大部分が残存していることが明らかになった。遺構面があることも確実となつたため、関係機関と協議を行い、翌年の調査が決まった。10月に入って硬化面1、2を検出し、29日には現地説明会を開催した。当日は雨模様の天気であったが、開催時にはどうにか雨も止み、多くの方々にご参加いただいた。11月中は各遺構の精査と、縄文包含層の掘り下げ、調査区畦の撤去にあてた。第2回の調査指導会を11月22日に実施、12月8日には空撮を行った。天候もすっかり冬型となり、厚さ10cmにもなる霜柱が立ち、雪のちらつく中で遺構図を作成した。この年の調査は12月15日に終了した。

平成13年度の調査は、家の後1遺跡の調査が終盤に近づいた8月から準備に入った。擾乱土が多くため、表土掘削に合わせてこれを取り除いたが、結果として径5m深さ2m前後の大穴が6か所開いた。地山層まで抜けており、この部分には包含層・遺構面とともに残っていなかった。本格



第21図 堤ノ内遺跡位置図 (S=1/2,000)

的な調査は9月からとなり、東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区の3調査区を設定した。調査区内は大部分が傾斜地で、加工段1やSB10など若干の遺構が確認されたものの、調査の多くは土器 sondage の精査にあてられた。10月下旬、焼失住居であるSI13を検出し、炭化材がある程度残っていることが明らかとなった。11月14日には調査指導会を行い、焼失住居の炭化材を可能な限り持ち帰ることとなつたため、発泡ウレタンを用いて梱包の上で取り上げた。また11月23日には現地説明会を行い、75名の参加者があった。12月5日には家の後I遺跡を含めて、調査指導会を行つた。12月17日には調査後の空撮を行い、全工程を終了した。

第2節 垣ノ内遺跡の基本層位（第23図）

垣ノ内遺跡の土壤は、前記のように肩状地の原理で堆積した土砂と、背後の山から流れ込んだ上砂が非常に厚く堆積している。層位は大きく8層に分けられるので、それぞれについて説明したい。

第1層は圃場整備による客土層で、耕作土とその基盤層からなる。大小の角礫や川原石を含み、水捌けの非常によい土層である。最下部に2~5cmの厚さでマンガン質が沈着するため、以下の層と明確に区別することができる。近代、現代の陶磁器が出土したが、これが客土に元々含まれたものか、客土後の遺物かは判然としない。客土中には若干の鉄滓も混じるが、出自は不明である。

第2層は中世以降の遺物を含む砂質土で、近世の遺物をかなり多く含んでいる。圃場整備以前の土で、カンナ流しの結果堆積したと考えられる礫層や、比較的有機質に富んだ粘土層など多様な性格の層を括っている。

第3層は主として古墳時代後期~9世紀頃の遺物を含む包含層で、加工段上を中心にして多数の遺物が出土した。褐色もしくは暗褐色の比較的きめの荒い砂質土で、水分浸透が早く、乾燥も早い。

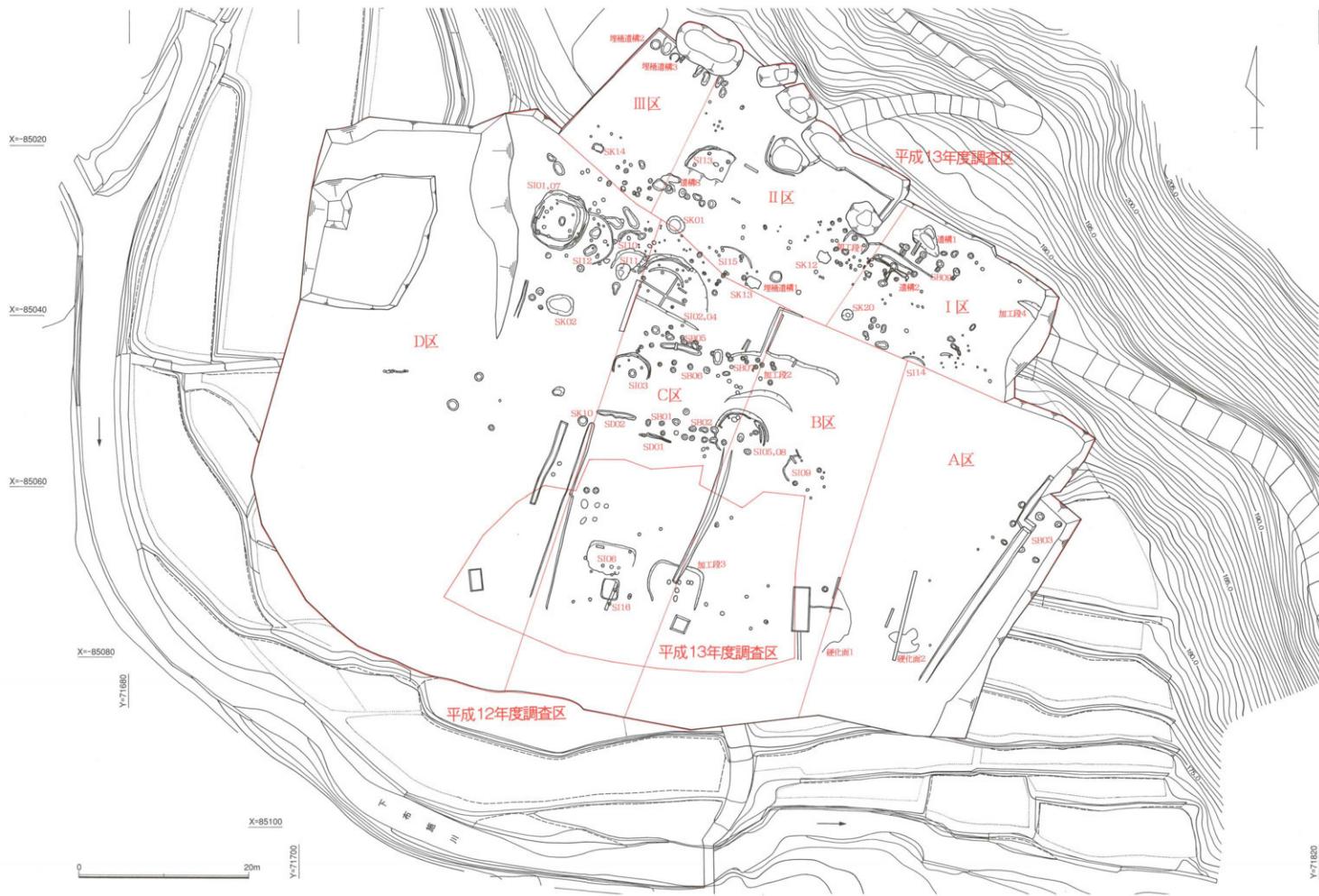
第4層は黒色系の砂質土層で、A区からC区にかけて局所的に堆積する。弥生時代中期~古墳時代後期の土器が混在する土層で、遺物の包含量は各層位で最も多い。この層はさらに細分できるが、それを面的に検出することは困難であった。

第5層は弥生時代中期後半から後期の遺構を覆う覆土で、色調が黄褐色系の砂質土である。大部分が中期の土器で占められ、層の上部で弥生時代後期以降の土器が混じる。4層との境界は明確でない場所が多く、漸移部分では両者の遺物が見られる。

第6層は黄色系砂質土からなる地山上で遺物は全く含まれない。調査区の山側では確認できるが、加工段2よりも川側では残っていない。花崗岩由来の石英、雲母などを含む目の荒い砂で構成されている。

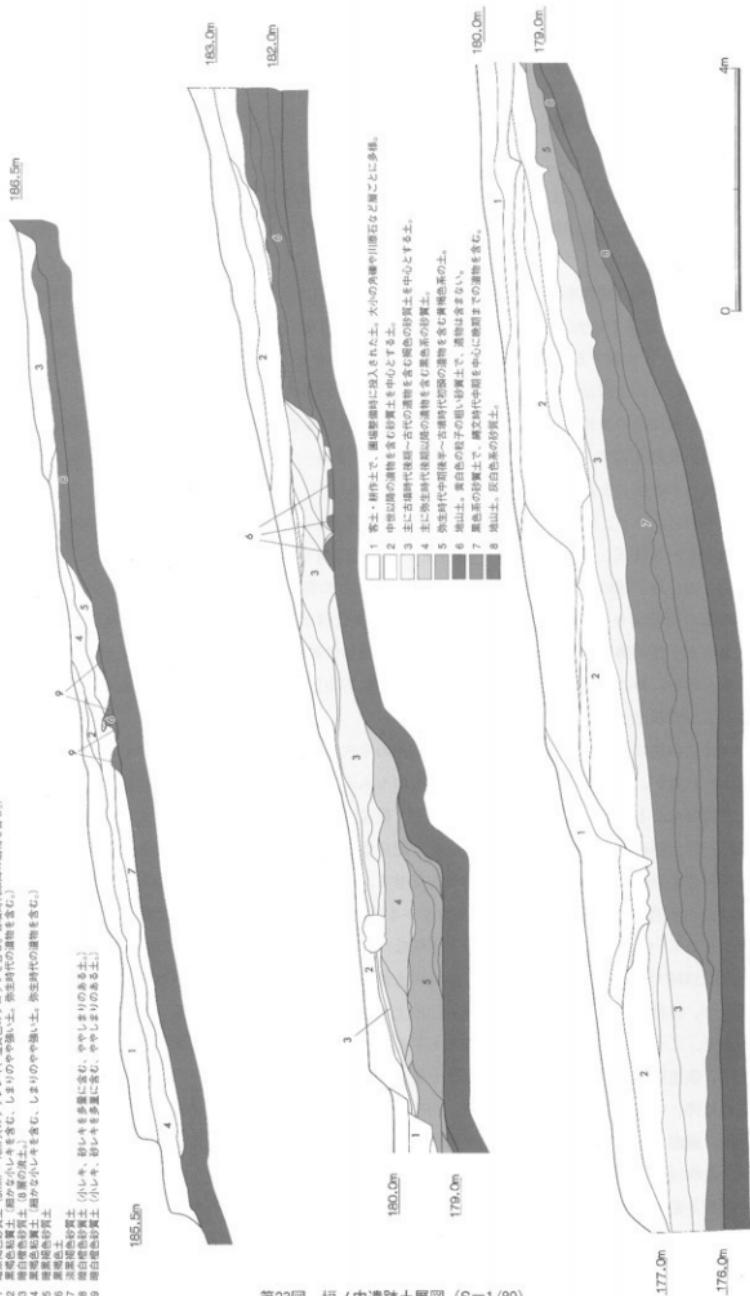
第7層は、黒色および黒褐色の砂質土からなる土層で、縄文時代中期を中心とする包含層である。標高約179m以下の川側に堆積しており、後期から晩期の遺物も混じる。上面は弥生時代、古墳時代の遺構面である。

第8層は地山土である。花崗岩に由来する石英や雲母の荒い砂粒からなる灰白色の層と、粒子が微細でやや粘性としまりのある黄褐色の土層の2種からなる。背後の山に花崗岩の露頭が見られることから、灰白色層はこれに由来すると考えられる。調査後に重機を用いて裁ち割ったところ、これらは厚さ10~20cmで重なり合いながら深さ約3mまで堆積していた。それぞれの境界は必ずしも明確でなく、場所により漸移層が20cmに達する部分もある。褐色がかった層が2層あり、さらに古い時期の包含層がある可能性は否定できないが、裁ち割り内では遺物を確認できなかった。この層



第22図 垣ノ内遺跡遺構配置図、調査区分図 (S=1/400)

- 1 滲透地盤質土 (5mm ~ 1cm 大のクサリレット、暗褐色プロックを含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 2 黒褐色質土 (黒色を含む。しりのやや強い土。発生時の遺物を含む。)
- 3 淡白色質土 (白質土を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 4 深褐色質土 (褐色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 5 深褐色質土 (褐色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 6 黑褐色質土 (黒色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 7 深褐色質土 (褐色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 8 淡白色質土 (白色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)
- 9 淡白色質土 (白色を含む。古墳時代以前の遺物を含む。)



第23図 垣ノ内遺跡土層図 (S=1/80)

まで掘削すると深さ5mを超てしまうという物理的な問題もあって、全面調査は断念した。

第3節 調査の結果

(1) 概要

垣ノ内遺跡の調査は2年にわたって行われたが、縄文時代中期から近現代に至るまで様々な遺構・遺物が出土した。この場所が、断続的とはいえ4,000年も生活の舞台となってきたことが明らかになったのである。

垣ノ内遺跡は縄文時代中期前半まで遡る。縄文時代を通して出土遺構は皆無であったが、下布施川に近い斜面南側で船元2式から突帯文までの土器が出土した。これらのうち中期の土器は約3,300点、コンテナ数で6箱強出土しており、この遺跡の中心となる時期のひとつである。後期から晩期にかけての土器は、時期が明確でない粗製土器を除けば、中期に比べかなり少ない。有文の土器では、後期の中津式から縁帶文土器にかけての磨消し縄文や充填縄文を持つ一群と、晩期前半の縦原式、孔列土器に代表される谷尻式などに当たる一群、突帯文土器の三群に大別されるが、これらの時期の土器はそれぞれ10点ほどにすぎない。

弥生時代に入ると、遺構・遺物とも全く出土しなくなる。弥生時代の中心となるのは中期後半新相（松本IV-2様式）で、前期から中期中葉までが空白期である。中期後半には、少なくともSI05、08、09、13、16の5棟（うちSI05、08は建て替え）の竪穴住居・竪穴建物が建てられており、この時期の土器割りも數か所で確認した。SI13では炭化材が折り重なるようにして検出されたほか、塙町式土器と鋳造鉄斧が出土した。この時期の遺物は焼成の良い土器が多く、総出土遺物数の半数を占める。特に広島県三次盆地を中心に、中国地方山間部で出土例が増えつつある塙町式土器がまとまった数出土したことが注目される。

弥生時代中期以降、古墳時代初めまでに計15棟の竪穴住居（建て替え分も含む）と1棟の竪穴建物が作られるが、時期が明確にできなかったものもある。後期から古墳時代初頭の遺物は、包含層出土遺物を見るとはほぼ継続して出土しているが、数量は時期を追う毎に減少し、古墳時代初頭（草田7期）の土器は数点である。これ以後、6世紀中葉までの遺物・遺構は皆無である。

6世紀後半以降、垣ノ内遺跡は三度活気を見せる。まず硬化面にともなって蓋壺、土師器甕、紡錘車を並べる遺構が検出されている。出雲3~4期の須恵器を伴うこれらの遺構は、硬化面こそしっかりとしているものの、上屋の有無など不明な点が多く、性格は明らかでない。

7世紀以降では、加工段にともなって多くの土器が出土しているが、それ以外の遺構は不整形の土坑など、性格の判然としないものが多い。出土した土器には、土師器甕、瓶、土製支脚、移動式竈があり、こうしたセット関係が少なくとも7世紀初頭には成立していたと考えられる。8世紀以降では、須恵器壺・丹塗り土器を中心まとまった遺物が出土している。

これ以降、中世から近世の遺物は青磁、白磁、短刀などが少数確認されるのみである。この時期の建物は確認されておらず、垣ノ内の集落は9世紀代には終焉を迎えたようである。

出土遺物は陶磁器を中心に18世紀頃から増加をはじめめる。特に布志名焼、石見焼などの在地系陶器や肥前系磁器の雜器類が増加する。前後して、この地に屋敷が建てられたと考えられ、近年に至るまでの様々な遺物が出土した。また近世末から明治時代に使われたと考えられる屋敷の付属施設も検出している。



第24図 堤ノ内遺跡調査後測量図 (S=1/400)

(2) 出土遺構

A. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は堅穴住居・堅穴建物と掘立柱建物がある。各遺構の形態と計測値は表9にまとめた。内訳は、中期後半から後期末にかけての堅穴住居が15棟、中期後半の堅穴建物が1棟、掘立柱建物が6棟以上である。

SI01・07 (第25・26図、図版19・20)

耕作土直下で検出した堅穴住居である。大型のSI01と、その床面下に検出したSI07がある。SI01は径約6mのほぼ円形の堅穴住居で、5本の柱穴と中央穴を持つ。北東および南東側の堅穴壁面にテラス状の段が付くのが特徴である。壁体溝は明確でなく、途切れながら周囲を廻っている。SI07は隅丸方形の4本柱で、西側の一部を除き壁体溝が廻る。中心よりやや東側に位置する中央穴は全面に礫を敷き詰めており、底部では地山に含まれる礫を利用し、壁面は円礫を詰めている。

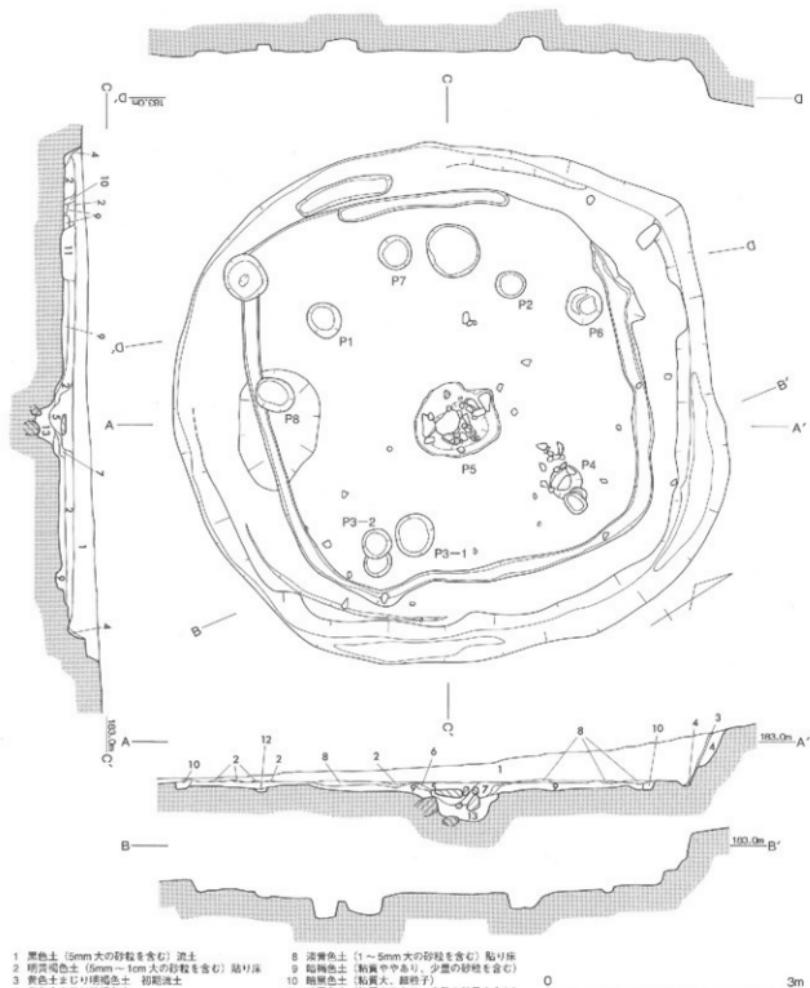
SI01はSI07の床面を嵩上げし、全体に外側へ広げることにより構築されている。SI01の床面は10~15cm嵩上げされており、暗褐色土(9層)を挟んで、貼り床土を敷く。貼り床はSI07の壁体溝までで止まっており、拡張部は地山削り出しのままである。中央穴は完全に掘り上げてはいないものの共用しており、位置自体もやや南西側にシフトしている。柱穴はP3-1、P4、P6、P7、P8がSI01、P1、P2、P3-2、P4がSI07に付随するものである。

出土遺物は第26図に掲載している。1、2は後期前葉(松本V-1様式 以下「V-1」のように略して記す)の壺・甕で、1では内部のケズリが頸部まで上がらないものである。これらはSI01の床面下の9層から出土したSI07に伴う遺物である。直上にSI01が作られたため、SI07に伴う土器は少なく、図化できるのはこの2点である。

3~16はSI01に伴う土器である。3が占手であるが、4~7の甕は口縁端部に外向きにアクセントが付くもので草田5~6期頃のものだろう。8は口縁に段を付けて外反させる高坏である。段付近の外面に刷毛が残るが、外面には丁寧なミガキが入る。この個体は北側のサブトレーンチ畦から一括して出土したが、脚部は全く出土しなかった。口縁端部と内面の段に沿って煤が付着しており、蓋として転用された可能性がある。9は外面に着色する高坏で、幅0.8~1.2cmのラインを放射状に描き込んでいる。ラインが交差するなど着色は必ずしも丁寧でないが、内面にはみ出するものはない。またラインは欠損する脚部までのびていたようである。退色しているため本来の色は分からぬ。草田6期に位置づけられるだろう。10~13は稜が張る高坏である。11、12は接合しないが同一個体であろう。15は外面に赤色顔料を塗布する器台で、同心円状のスタンプ文が入る。17は中央穴内出土の黒曜石製石鏃である。

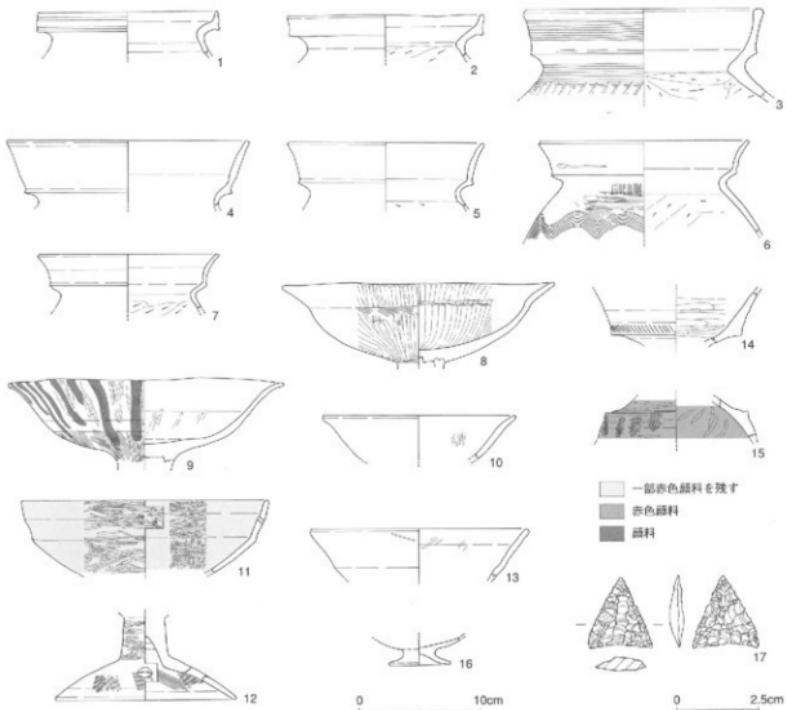
SI07の時期は後期前葉である。またSI01は遺物にかなり幅があるが後期末である。遺物を見る限り、SI07とSI01の間には空白期を考えざるを得ず、単なる建て替えではない。SI01の貼り床土を見ると直下に薄く暗褐色土(9層)を咬んでおり、これがSI07の覆土の残部であろう。またSI07の柱穴や壁体溝には覆土を掘り上げた形跡が認められなかった。つまり SI07の堅穴部分だけを掘り上げ、新たに貼り床土を施し、地山を削り込んで外側に拡張したと考えられる。

また隣接するSI12はSI01に切られており、SI07とSI01の空白期に構築された可能性があるが、調査では判断できなかった。



- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 黒色土〔5mm 大の砂粒を含む〕洗土 | 8 淡青色土〔1 ~ 5mm 大の砂粒を含む〕貼り床 |
| 2 明黄褐色土〔5mm ~ 1cm 大の砂粒を含む〕粘り床 | 9 稲荷色土〔粘質やあり、少量の砂粒を含む〕 |
| 3 黄色土まじり暗褐色土 初期洗土 | 10 稲葉色土〔粘質大、超粘子〕 |
| 4 食魚土まじり暗褐色土 | 11 繊黒色土〔粘質ややあり、多數の砂子を含む〕 |
| 5 稲荷褐色土〔粘質大、少量炭化〕 | 12 黒褐褐色土〔含有物やあり、木炭を含む〕 |
| 6 稲荷褐色土〔粘質大、2を含む混合〕 | 13 淡黒褐色土〔含有机物少ない、木炭を含む〕 |
| 7 淡青褐色土〔粘質大、2を含む混合〕 | |

第25図 塙ノ内遺跡 SI01・07実測図 (S=1/60)



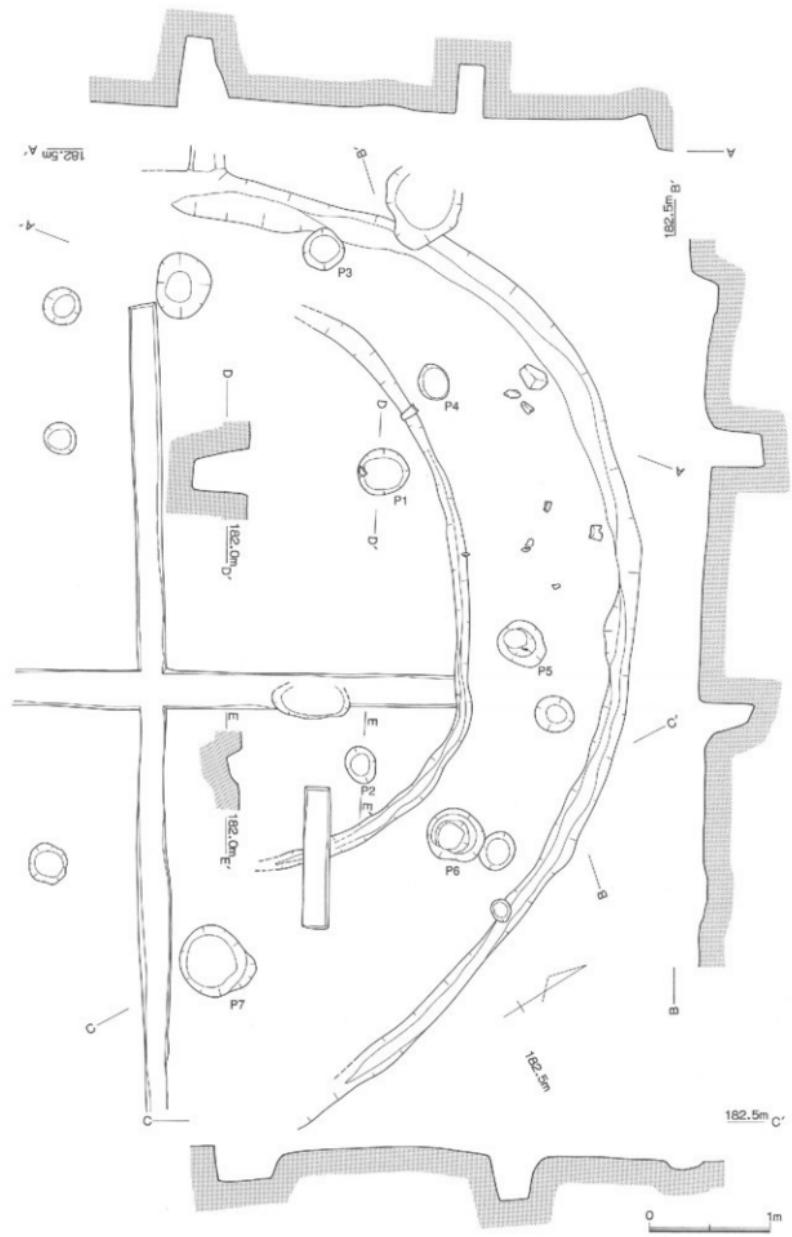
第26図 塙ノ内遺跡 SI01・07出土遺物 (1~16は S=1/4、17は S=2/3)

SI02・04 (第27~29図、図版21~23)

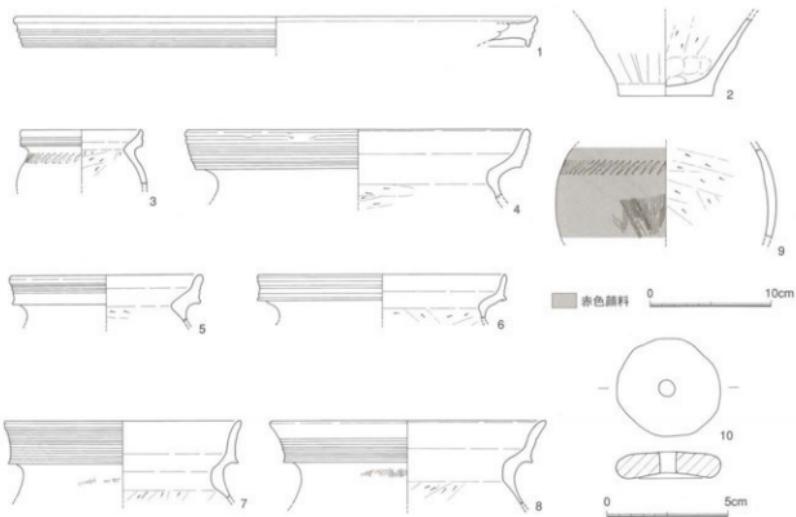
SI02と04は竪穴住居群の中央に位置する住居である。便宜上、調査でまず検出した外側の壁体溝を持つ住居がSI02、追って内側に検出した壁体溝を用いる住居をSI04とした。SI02の床面は北西側の幅約50cmは地山層に掘り込まれているが、それ以外の部分は黒色土上に形成されており、検出が困難であった。サブトレンチのセクションで、床面と考えられる白色砂粒を多く含む厚さ0.8~1cmの硬化面を確認したが、全面で検出することはできなかった。調査では、部分的に確認できた硬化面のレベルを基準に精査を行い、SI04の壁体溝とピットを確認し、写真撮影、図化を行った。SI02・04間に床面のレベル差は確認できなかった。またSI04の壁体溝や柱穴を埋めて、新たに床面を成形した形跡は確認できなかったので、SI04→SI02の構築順が想定される。

第28図には出土遺物を挙げている。1、2は中期後半の広口壺片、3~9は後期の壺・甕類、10は土器片を用いた紡錘車である。

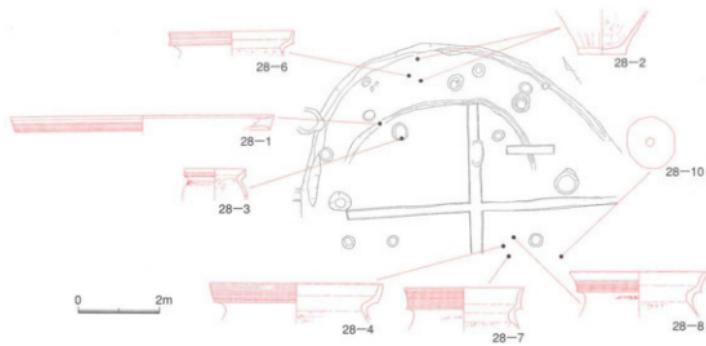
出土遺物は、中期後半(IV-2)から後期(V-3)までが確認できる。中期の遺物は竪穴壁面近くの出土で、SI02の床面から明らかに3~5cm浮いていたことから覆土とともに流れ込んだ可能



第27図 堀ノ内遺跡 SI02・04実測図 (S=1/40)



第28図 塙ノ内遺跡 SI02・04出土遺物（1～9はS=1/4、10はS=1/2）

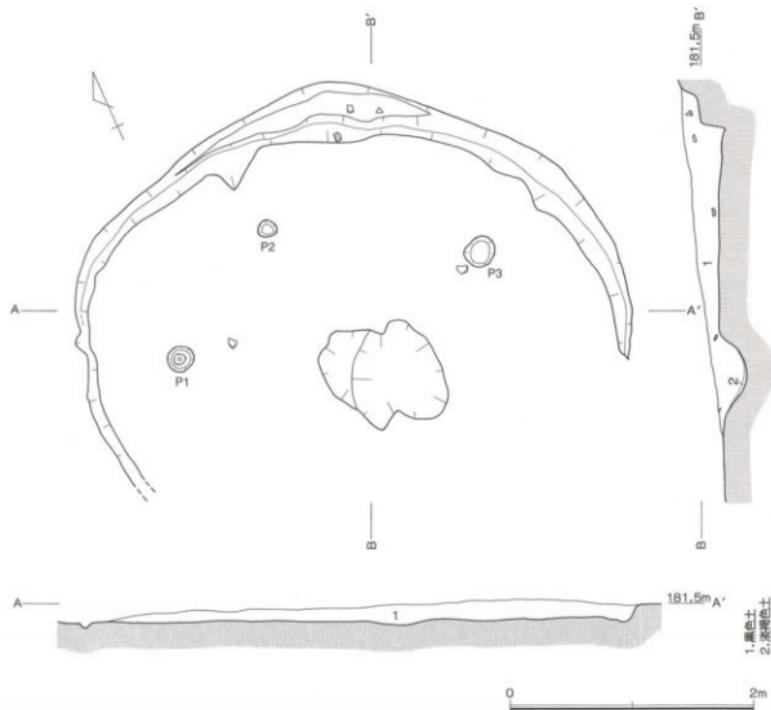


第29図 塙ノ内遺跡 SI02・04遺物出土状況図

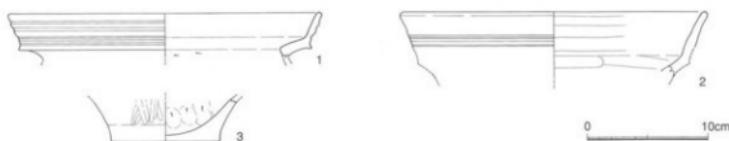
性が高い。一方3～10は出土位置の床面自体が確実に押さえられていないため厳密ではないが、床面上1cm前後の範囲内で出土しているのは確実である。構築はSI04→SI02の順が考えられるため、SI02は後期後葉に位置づけられ、SI04はそれ以前のものとなる。

SI03（第30～32図、図版23）

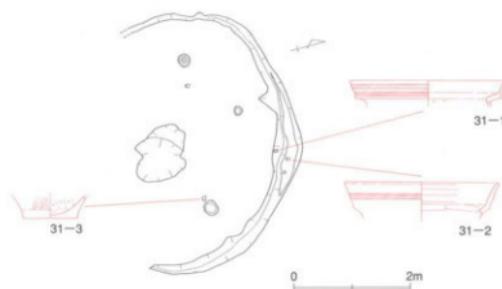
円形の堅穴住居で、柱穴3と中央穴を確認した。南側約1/2は流失してしまっている。堅穴は深さがあまり無いが、後述するSB04～06が北側に隣接し、この造構面が直上にあたることから、堅



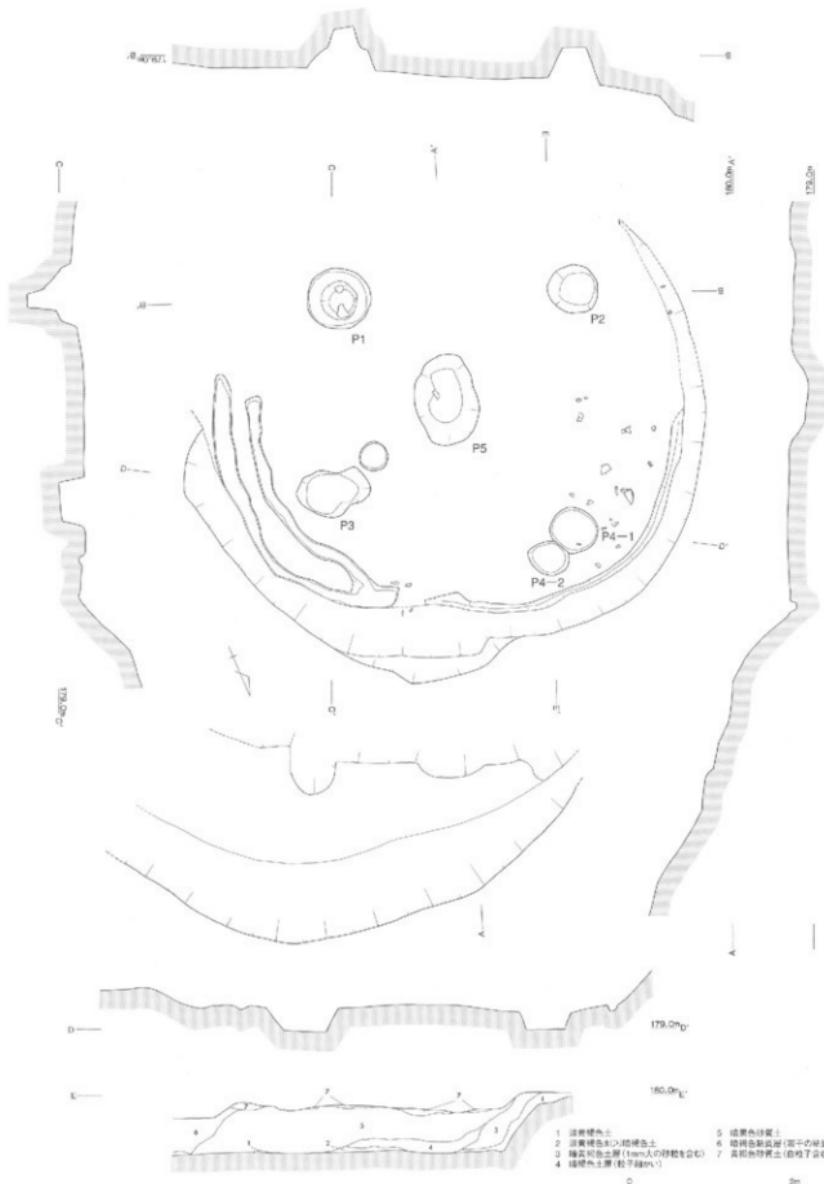
第30図 堀ノ内遺跡 SI03実測図 (S=1/40)



第31図 堀ノ内遺跡 SI03出土遺物 (S=1/4)



第32図
堀ノ内遺跡 SI03遺物出土状況図



第33図 塙ノ内道路 SI05・08実測図 (S=1/60)

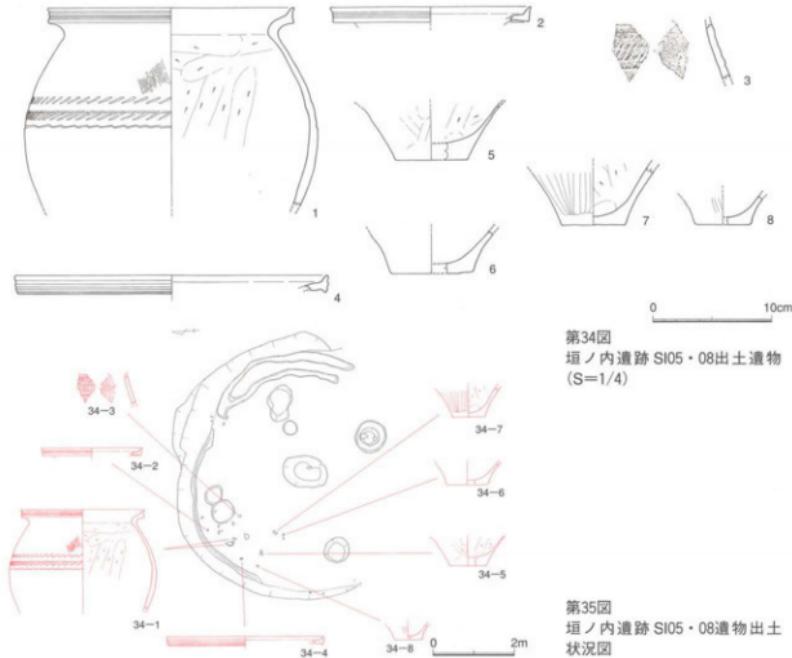
穴自体も上部が削平された可能性が高い。壁体溝ははっきりしておらず、堅穴の壁面に沿って僅かにくぼむ程度である。また北側壁面にテラス状に段が付くが、その機能は不明である。他の堅穴住居に比べて柱穴の径が小さいのが特徴で、配置も5本あるいは6本柱と考えられる。中央穴は平面がH形に凹凸のあるもので、西側に中段が付く。覆土には炭粒が多量に含まれ、底面には焼土(2層)が残る。

出土遺物は少なく、図化できたものは3点にすぎない。1、2は壺の口縁で、粗雑に凹線文を入れている。これらの遺物は後期中葉から後葉に位置づけられる。

SI05・08 (第33~35図、図版24・25)

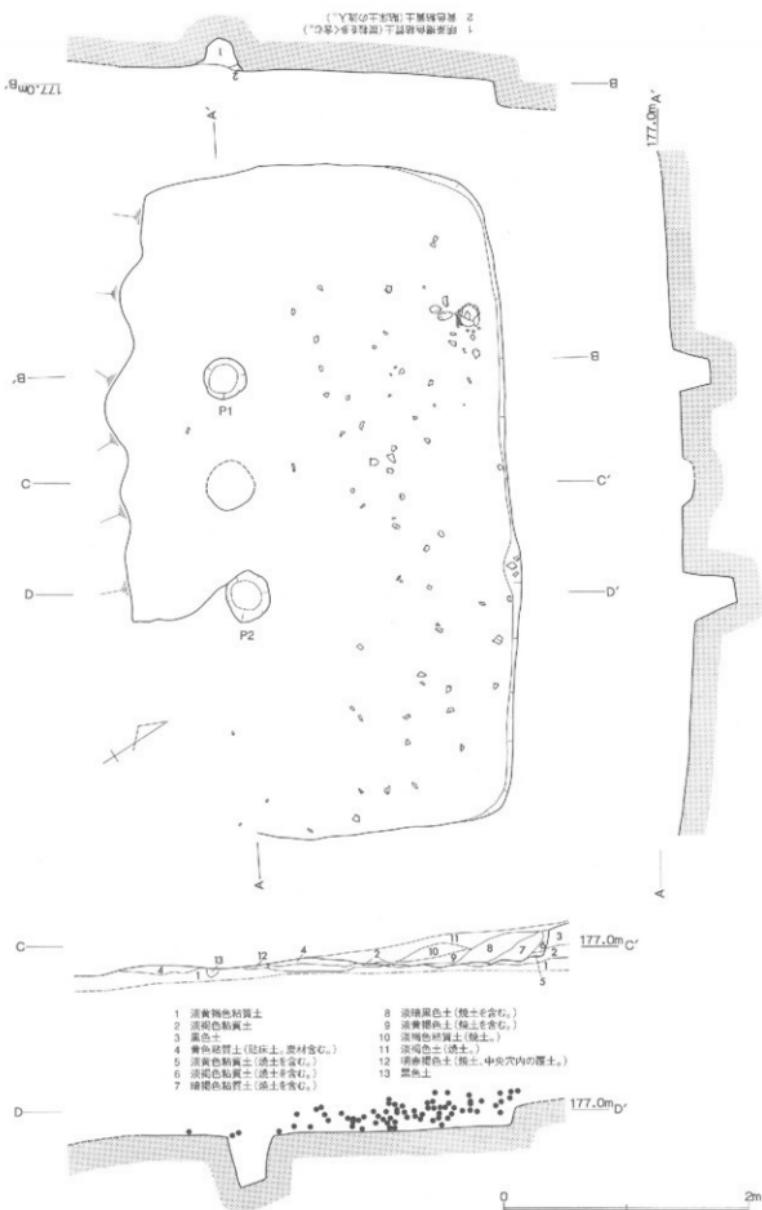
B区、C区の境界付近に検出した堅穴住居である。当初の調査区の角地に位置していたため、堅穴との認識が遅れ、検出時には調査区畦部分を残して覆土の大部分が掘り上げていた。そのため覆土中の遺物はコンテナ1箱あるが、出土位置と層位が全く不明である。

SI05・08は円形4本柱の堅穴住居で、ほぼ中心に中央穴を配置する。東側の壁体溝は2重に廻るが、床面のレベルに差は無く、ごく短期間に建て替えられたと考えられる。P1、P2は共用されており、P3、P4もほぼ同じサイズで柱穴を開けている。東側にシフトしているP3-2とP4-2に対応する壁体溝が、同じく東にシフトしている外側の溝とすれば、SI05→SI08という変遷が考えられよう。

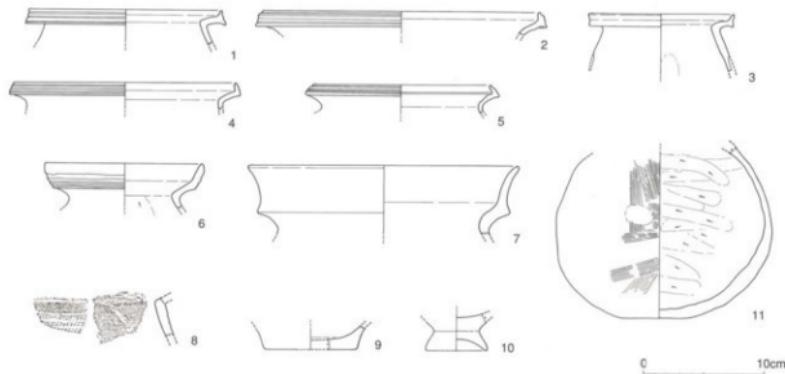


第34図
塙ノ内遺跡 SI05・08出土遺物
(S=1/4)

第35図
塙ノ内遺跡 SI05・08遺物出土
状況図



第36図 堤ノ内遺跡 SI06実測図 (S=1/40)



第37図 塙ノ内遺跡 SI06出土遺物 (S=1/4)

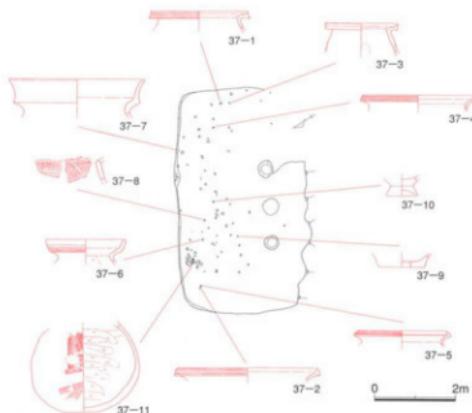
なお隣接して別の加工段があり当初は背後に平坦面を配置する竪穴住居として認識していたが、セクションを見る限り、同時期のものとは考えにくい。平面上も東西にズレが認められることから、この加工段は全く別の造構であり、SI05、08が覆土に埋まって以降に構築されたものと考えられる。

第34図は床面上の出土遺物である。中期後半（IV-2）から後期初頭（V-1）に位置づけられる。1は内面のケズリが頭部直下まで上がってくる壺である。3は頸部に多条凹線と刻目文⁵が入る塩町式土器の壺片である。

SI06（第36～38図、図版25～27）

縄文時代の包含層に掘り込まれた竪穴住居である。平面が方形で中心部に柱穴が2本並ぶもので、南半部は流失している。中央穴は10cmで、周辺に焼土面が広がっている。床面は中央穴周辺に黄色の粘質土が敷かれているものの、西半部ではややしまりのある硬化面でしかなかった。床面は東西壁面から中央に向かって微妙に傾斜している。

出土遺物は1～5、8、9が床面出土の中期後半（IV-2）の壺・壺で、8は塩町式土器の頸部である。6、7は覆土中の土器で後期の壺と壺、10は低脚壺である。11は覆土から出土した土師器



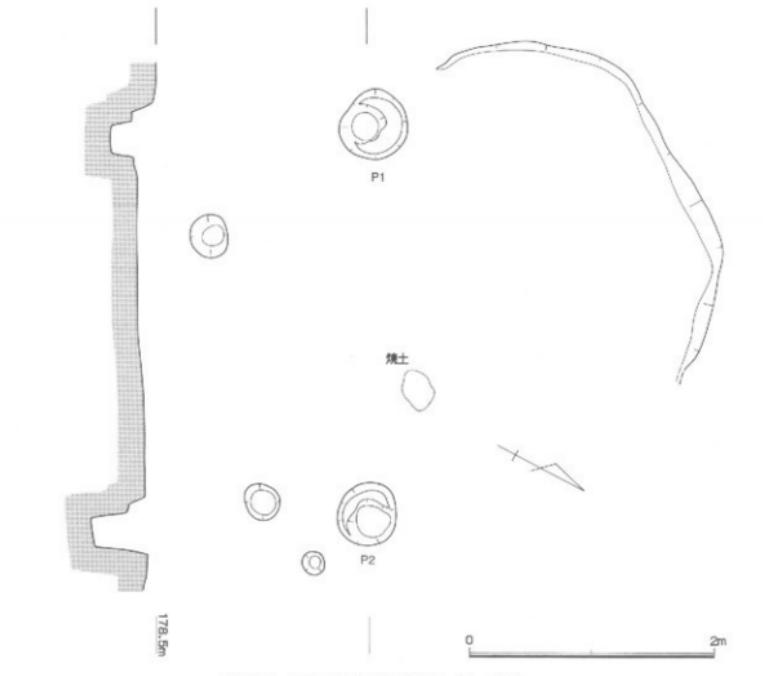
第38図 塙ノ内遺跡 SI06遺物出土状況図

の臺で、内面には深いケズリが入る。口縁部は出土していない。

SI06の時期は遺物から見て中期後半(IV-2)と考えられる。IIは中央のセクションから見て、比較的早い時期の覆土から出土していることになるが、土器の周囲に明確な掘り方を確認できなかったので、この土器がSI06に作るものか、別の遺構によるものかは不明である。

SI09(第39・40図、図版27)

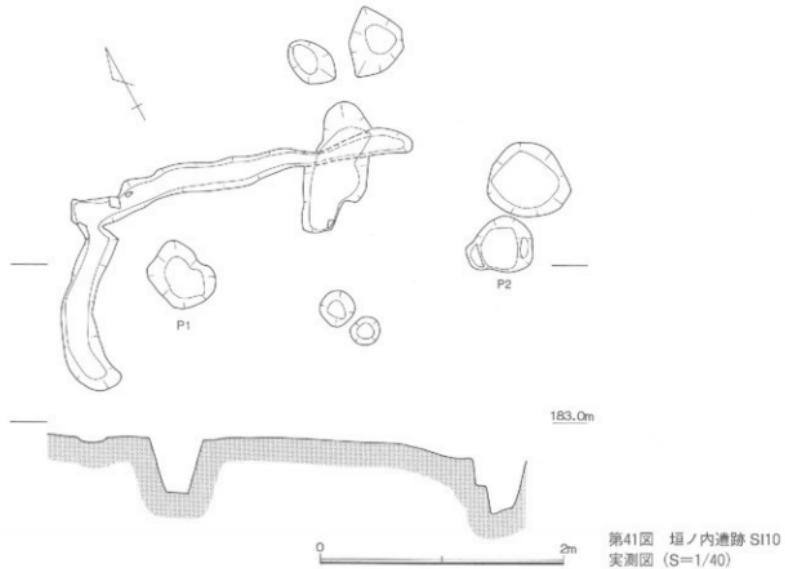
SI05の東側に検出した竪穴で、段の付く柱穴を2穴を確認した。南側は流失し、全体の規模は不明であるが、2本柱の建物の可能性がある。竪穴は一部が残るのみで、壁体溝はない。床面はややしまりのある硬化面で、白色の粒子を含む。柱穴間のやや北側に焼上層が検出された。出土遺物は少なく、団化したものも小片である。口縁のみのため、頸部ケズリの有無は不明だが、中期後半(IV-2)から後期初頭(V-1)の遺物である。



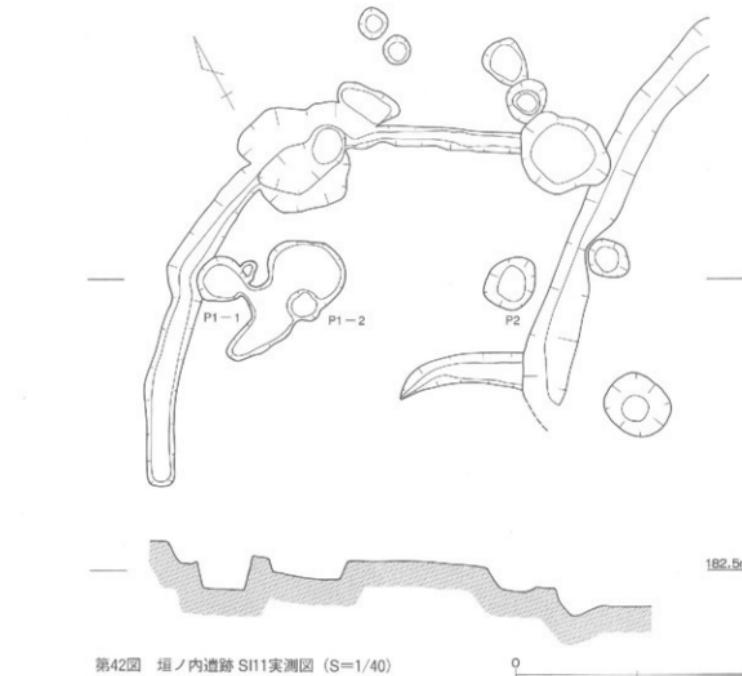
第39図 堀ノ内遺跡 SI09実測図 (S=1/40)



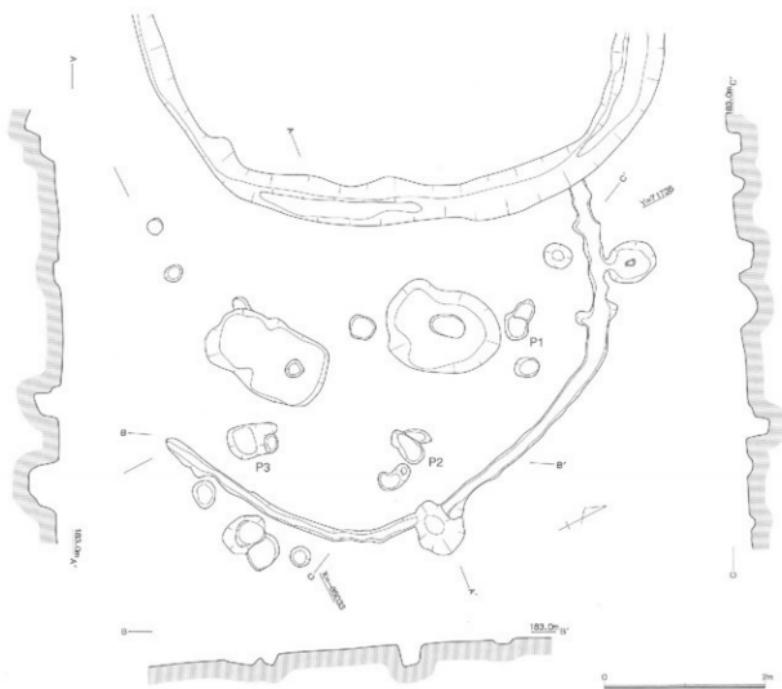
第40図 堀ノ内遺跡 SI09出土遺物 (S=1/4)



第41図 埼ノ内遺跡 SI10
実測図 ($S=1/40$)



第42図 埼ノ内遺跡 SI11実測図 ($S=1/40$)



第43図 塙ノ内遺跡 SI12実測図 (S=1/60)

SI10、SI11、SI12（第41～43図、図版28・29）

SI01とSI04に挟まれて検出した3つの堅穴住居である。SI10、SI11は隅丸方形の住居址で、壁体溝で区画される住居である。地山土層が急激に落ち込む場所にあたり、床面の造成土と覆土の区別は困難であった。また時期不明の土坑とピットが入り乱れており、それぞれに付随する柱穴を判別することはできなかった。一方、SI12はSI01に西側を切られた状態で出土した堅穴住居で、壁体溝を見る限りでは六角形もしくは円形の建物が想定される。この場所も時期不明のピットが入り乱れており、覆土のセクション検討などからは柱穴を把握することができなかった。表9には、堅穴住居に伴うと推定されるピットについて、計測値を載せている。柱穴の配置にはなお不明な点が多いため、参考として各ピット間の距離を載せている。

各堅穴住居の時期は、周辺の造構との切り合い関係から推定するほかにない。SI10はSI04とSI11に切られており、SI11もSI04に切られているので、SI10→SI11→SI04の構築順が想定できる。SI04はV-3期以前の構築であるから、SI10、SI11はさらに遡ることがわかる。おそらくは中期後半から後期前葉に収まるだろう。SI12については切り合うSI01、07との関係から導く以外にない。平面上見る限り、SI12がSI07の範囲にも掛かるのは確実であり、SI07構築以前（後期前葉以前）に建てられたか、SI07廃棄の後SI01が建てられるまでの間に存在したか、のどちらかが想定される。